

鶴翔会

平成31年4月1日発行 2019年 126号

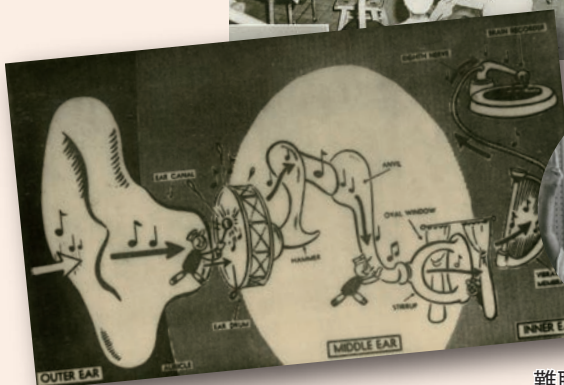
岡山医学同窓会報



臨床講義風景



高原滋夫 教授



耳の創造を示した模式図



難聴学級にて
左から田中文雄先生、高原滋夫先生、三木行治知事と一緒に

表紙の写真



たかはしお
高原滋夫 教授 (1908~1994)

岡山県和気郡出身。旧制姫路高等学校を経て岡山医科大学を昭和6年に卒業。卒業と同時に耳鼻咽喉科教室に入局し、田中文男教授に師事した。小田大吉教授退職の後をうけて昭和21年12月に耳鼻咽喉科教授に就任した。

太平洋戦争直後の廃墟の中、耳鼻咽喉科教室の主宰を任され、占領下における極度の物資、食料欠乏の困難な中、海外文献の不足など悪条件を克服して、戦地より復員する教室員を督励して新しい研究生活に立ち向かった。

まず教室の総力を挙げて多発する難治性の耳管中耳カタルの成因と治療法の研究成果を昭和26年の第52回日本耳鼻咽喉科学会総会で宿題報告として「耳管疾患、特に其の成因と治療に就いて」を発表した。同じく同年頃より学童の難聴問題に着目し、Better Hearing Clinicを設け、主として潜在性無自覚難聴児の発見に努め、昭和35年、日本初の難聴学級（岡山市内山下小学校）、続いてかなりや学園に結実させた。その後も乳幼児の難聴の早期発見とその対策について、諸種の自覚的、他覚的探索手段について研究を行なった。伝音系聴力障害耳の聴力改善については、蝸牛電気反応を応用した基礎実験、

伝音系修復材料としての皮膚その他の生体組織、人工諸材料と広範囲に研究を展開した。また、第62回日本耳鼻咽喉科学会総会において「兔唇口蓋裂の遺伝および手術後の遠隔成績」として兔唇、口蓋裂に関する研究成果を発表するなど、診断、治療、研究、教育に大きな足跡を残した。

中でも昭和21年、高原教授が発見した稀有な血液異常症「無カタラーゼ血液症」は、臨床医学はもとより生化学、免疫学、遺伝学など生物学の全領域にわたる興味ある研究課題となり国内外の多くの研究機関で研究が行われた。一方、医学教育の改善にも努め、岡山大学方式と言われた少人数グループによるベッドサイドティーチングの実施の中心的役割を果たした。

先生は、医学研究者であると共に岡山大学医学部長、附属病院長及び日本学術会議会員の要職を務められ、医学・医療並びに大学の管理運営及び日本の科学行政に貢献をされた数々の輝かしい業績は、朝日賞、日本学士院賞、文化功労者をはじめ多くの受賞につながった。

（参考：岡山大学医学部百年史）

ご挨拶	1
医学部長就任 浅沼幹人 岡山大学理事・副学長（研究担当）就任 那須保友 退任 荻野景規 退任 土居弘幸 国際医療福祉大学医学部医学教育統括センター感染症学教授就任 矢野晴美	
会員動向	6
人の動き（受賞者、人事異動、役員異動など） 学位授与 平成30年度（平成31年3月）岡山大学医学部医学科卒業者 会員訃報	
クラブ報告	9
岡山大学医学部準硬式野球部西医体2連覇達成 中尾篤典	
会員のこえ	11
佐伯矩先生の「栄養100年」を記念した第8回栄養管理指導者協議会に参加して 中瀬浩一 秦 佐八郎博士～没後80周年記念事業～ 坪井修平 目医者をつぶやき「希少がん診療」 松尾俊彦	
会員の近況	19
ことば降る森～強くて優しいファンタジー～ 井上紀美（井上さくら）	
同期会だより	20
昭和28年卒のクラス会 矢部芳郎 平成30年度 みとう会（昭和30年卒同窓会） 山本泰久 三十三（ミソミ）会卒業60周年記念祝賀会 氏平一郎 昭和34年卒業「ねぶち会」同窓会 卒後60年を経過して 瀧谷泰博 山麓会（昭和36年卒） 難波正義 昭和57年卒 卒業36周年同窓会報告 伊達 勲 第2回 平成4年度入学および平成10年度卒業生同期会報告 片岡祐子	
支部だより	25
平成30年度兵庫県鶴翔会総会 林 充 平成30年度 鶴翔会呉支部総会報告 木村 亘 平成30年度鶴翔会山口県支部総会の報告 牧野泰裕 鶴翔会福岡支部報告 高田 徹 H30年度鶴翔会近畿総支部報告 野上浩實 平成31年岡山医学同窓会香川支部会 報告 青江 基	
新聞より	30
岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など（2018.9～2019.3）	
歴史の広場	35
岡山大学附属図書館医学部分館・資料室物語⑥ 中浜東一郎〈前編〉 万城あき 岡山大学附属図書館医学部分館・資料室物語⑦ 中浜東一郎〈後編〉 万城あき 医師養成の歴史と岡山大学医学部—その2 棕野 洋 ヒポクラテスの木 小西池泰三	

ヒポクラテスの木の植樹に向けて 大塚愛二

海外だより 49

インディアナ大学に移りました。 植木靖好

学生だより 51

解剖学実習を終えて 安藤 碧

解剖学実習を終えて 金 晟烈

解剖学実習を終えて 森下瑤子

教室だより 53

海外への留学生一覧

岡山より 79

岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会総会のご案内

ご寄附いただきました

お詫びとお知らせ

平成30年度 Student Doctor 認定式

平成30年度 岡山大学医学部医学科 学位記授与式

第113回 医師国家試験 合格者状況

平成30年度卒年次別会費納入状況

おひとり“3,000円”の年会費が鶴翔会の活動を支えています！

(公財)岡山医学振興会より一ブラ塵一 難波正義

岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧

鶴翔会会報 投稿内規

編集後記 89

ご 挨拶

医学部長に浅沼幹人氏 ご就任



ご 挨拶

岡山大学医学部同窓、鶴翔会会員の先生方におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、ご推薦を頂き、医学部教授会での選出、学長・理事による部局長選考会議を経て、4月より医学部長を拝命することになりました。

医療系教育の国際標準化、地域医療教育の拡充、それに伴うカリキュラムの肥大化、入学者選抜改革といった差し迫った課題を全国の医学部も抱えていますが、岡山大学はスーパーグローバル大学、研究大学強化促進事業に選定されており、それにふさわしい医学教育と入学者選抜制度（2021年度からの新共通テストに対応）を備える必要があります。また、多職種連携の共通教育プログラムの実質化も医学科、保健学科および医療系学部全体の課題です。さらに、医歯学総合研究科と大学病院を中心として橋渡し研究加速ネットワークプログラム、臨床研究中核拠点事業、がんゲノム医療中核拠点事業に選定されており、中国四国地域に根ざした医療中核となることが求められております。医療系学部学科の連携により推し進められる体制の拡充を行い、先端医療、基礎・臨床医学研究ができる国際的競争力を備えた若手医学研究者の育成に務めなければなりません。同窓の先生方のご協力による学部教育における地域関連病院との連携プログラムについても更なる拡充が求められます。同時に、これらの課題への対応で多岐多様となった教育、研究、管理運営に関するプログラムや組織体制の検証も必要になると考えられます。医学部構成員の方々それぞれにご協力頂き、「持続可能な協働体制の構築」を目指したいと思います。

一方で、資格試験を目標に医療人養成のためのプログラムが重視され、コア・カリキュラム準拠が求められ、医療系学部が医療人養成学校化しており、大学としてのアカデミズムを享受されないまま卒業する学生が増えることが危惧されます。将来、本学医学部で基礎・臨床医学研究、先進医療に従事したいと思う学生

を一人でも多く輩出するために、医学研究や先進高度医療とそれに向けた開発研究の魅力を学生に教授する取り組みの推進を行い、さらに学部教育から大学院教育をシームレスに接続するプログラム履修者の増員により「アカデミズムの再生」を図りたいと考えます。

ご存知の通り、2020年には岡山大学医学部は創立150周年を迎えます。医学部創立150周年記念事業が大塚愛二前医学部長、那須前研究科長、金澤病院長、吉野創立150周年記念事業実行委員長、山田雅夫教授のご尽力により、また同窓の多くの皆様のご援助のもと進んでおります。入院棟最上階のアメニティスペース Floor150が開設され、市民公開イベントの健康フェスタ in Okayamaが昨年より開催され、現在鹿田会館（旧生化学棟）の整備・歴史的講堂の改修、創立150周年記念誌の編集が行われています。同窓の先生方におかれましては更なるご支援ご援助を頂きますようお願い申し上げます。そして、2020年11月3日に創立150周年記念式典が予定されています。岡山大学医学部の歴史を深化させる起点となるこの時期に、古い歴史に安住することなく、かつて関正次教授が記されているように「古い大学の伝統にある師弟や先後輩がよく融和し互いに助長し合うという潜勢力」をもって、50年先を見据えた医学部のあり方を皆様と一緒に考えたいと思います。「持続可能な協働」と「アカデミズムの再生」により、「地域に支えられ世界を目指す岡山大学医学部」をさらに発展させていきたいと思っております。

もとより浅学非才の身ではございますので医学部構成員の方々にご支援いただきながら、諸課題に取り組む所存でございます。同窓の先生方にはご指導ご鞭撻ならびに更なるご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

略 歴

昭和57年	岡山県立津山高等学校卒業
昭和63年	岡山大学医学部医学科卒業
平成4年	岡山大学大学院医学研究科修了
平成4年	岡山大学医学部分子細胞医学研究施設併任所員
平成6年	(助)長寿科学振興財団リサーチレジデント
平成7年	岡山大学医学部分子細胞医学研究施設神経情報学部門 助手
平成8～10年	米国国立保健研究所 (NIH)、薬物濫用研究所分子神経精神学部門 客員研究員
平成12年	岡山大学医学部分子細胞医学研究施設神

経情報学部門 助教授
 平成13年 岡山大学大学院医歯学総合研究科神経情報学分野 助教授；平成19年より岡山大学大学院医歯薬学総合研究科神経情報学分野 准教授
 平成19年～ 国立精神・神経医療研究センター 客員研究員
 平成26年～ 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科神経ゲノム学分野；平成27年より脳神経機構学分野 教授
 平成27年～ Acta Medica Okayama 編集委員長
 平成28～29年 岡山大学医療系部局研究倫理審査専門委員会 委員長
 平成29～31年 岡山大学医学部医学科教務委員会 委員長
 平成30～31年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科附属医療教育センター医療教育研究部門長

平成27年6月に母教室である泌尿器病態学分野教授に就任、若手泌尿器科医師・研究者の自由な発想を伸ばし、チャンスを与え発展させることに尽力いたしました。お陰様で教授就任後約30名の新入局員を迎えることができました。

平成28年4月より大学院医歯薬学総合研究科長を拝命し、構成員の皆様と一緒に部局運営に従事させていただきました。

榎野博史先生（前岡山大学病院長、前第三内科教授）におかれましては平成29年4月に岡山大学学長に就任されましたが、学長就任に際し「榎野ビジョン」を発表され、しなやかに超えていく「実りある学都」を実現するため国連の提唱するSDGs（持続的可能な開発目標）をキーワードとして多くの戦略を立案されました。とりわけ研究大学強化促進事業・スーパーグローバル大学創成支援事業という国の重要な施策と連動した研究・教育の取り組みを通じて大学力を高め、必要な大学改革を行い『世界水準型』大学として発展すべく奮闘されておられます。

医療を取り巻く社会環境は、我が国の少子高齢化に伴い年々厳しさを増していることは会員の皆様は日々感じ取っておられることと存じます。おなじく国立大学法人を取り巻く環境も年々厳しさを増しております。特にその経営的環境は厳しく、国からの交付金が毎年1.6%削減され、少子化に伴う受験生・入学生の減少による受験料・授業料収入は低下しております。企業で例えれば倒産、債務超過に相当する状況にすでに陥っている地方国立大学もあり、今後再編・統廃合の動きが加速されていきますし、政府はすでにその方向で舵を切っております。

わたくしの使命は、榎野博史学長のリーダーシップの下、岡山大学の研究力のより一層の強化を図り、社会実装としての産学連携促進を通じた大学の経営基盤の充実を図ることです。

わたくしを育ててくれた岡山大学の発展のために粉骨砕身努力する覚悟であります。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

岡山大学理事・副学長(研究担当)に那須保友氏 ご就任

ご挨拶

平成31年4月1日をもって岡山大学 理事・副学長（研究担当）を拝命いたしました。岡山大学医学部同窓（鶴翔会）の先生方皆様には平素より大変お世話になりありがとうございます。改めて感謝・ご挨拶申し上げますとともに、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

私は、昭和56年岡山大学医学部泌尿器科（当時：大森弘之先生主宰）に入局、同時に大学院に入学しました。

平成22年に院内に新設された新医療研究開発センター・教授に異動後は、学内の有望なシーズをいち早くその出口である臨床応用へと導く学内の体制整備を行いました。研究担当の副病院長就任後も引き続き、学内の体制整備・部署横断的な連携体制を構築しました。その結果は国家プロジェクトであります「臨床研究中核病院整備事業（厚生労働省）」「橋渡し研究加速ネットワークプログラム（文部科学省）」などの拠点事業採択に結びつくことになりました。

略歴

昭和50年3月 私立愛光高等学校卒業
 昭和56年3月 岡山大学医学部卒業
 昭和61年3月 岡山大学大学院医学研究科（博士課程泌尿器科学専攻）修了
 昭和61年4月 岡山大学医学部附属病院泌尿器科医員
 昭和61年7月 社会保険広島市民病院泌尿器科医師
 平成1年4月 財団法人積善会附属十全総合病院泌尿

器科部長

- 平成3年4月 岡山大学医学部附属病院泌尿器科講師
 平成8年6月～平成10年6月 米国テキサス州ベ
 ラー医科大学泌尿器科客員研究員
 平成16年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科准
 教授（泌尿器病態学）
 平成22年1月 岡山大学病院新医療研究開発センター
 教授
 平成25年9月 岡山大学病院・副病院長（研究担当）
 平成26年4月 岡山大学病院・副病院長（研究・国際
 担当）
 平成27年6月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
 教授（泌尿器病態学）
 平成27年8月 岡山大学副理事（国際、ヘルスシス
 テム統合科学研究科担当）
 平成28年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長
 平成31年4月 岡山大学理事・副学長

荻野景規教授 ご退任



ご挨拶

「少年老い易く学成り難し」昔さんざん聞かされたこの言葉をかみしめている。「光陰矢の如し」もまた然り。金沢大学医学部教授就任時は、この重圧が24年も続くのかと、めまいすら覚えたが、目前の課題に追われる内に11年。緒方正名名誉教授

のご縁で岡山大学の教授となり13年。重圧は忙殺で無視した。岡山時代を振り返り、スタッフをはじめとする多くの卒業生、同門の先生方、研究協力者様のおかげで得た現在の研究課題を2つ報告する。

○PM2.5の喘息誘因性の原因にタンパク質の重要性を世界で最初に報告。更にPM2.5中に特定のタンパク質ヒトアルブミンを世界で最初に証明した。喘息発症と関連するオゾンと二酸化窒素からPM2.5中のタンパク質のチロシンのニトロ化が起こることを世界で最初に認め、PM2.5タンパク質の変異がアレルギー化する可能性を証明した。今後はPM2.5付加ヒトアルブミンのPM2.5の生体曝露影響における意義を解明し、PM2.5中のタンパク質及びヒトアルブミンを新しい国際的環境基準としたい。

○運動トレーニングにより、ミトコンドリアから活性

酸素が産生され、核内の転写因子を介しミトコンドリアの抗酸化酵素群が増加し、抗加齢を介して、寿命が延伸するミトホルミシス現象を、従来、筋肉正検組織で検出していたものを、初めて末梢血単核球で検出できることを証明した。現在、ミトホルミシス現象が、どのような運動で、どのくらいの期間で上昇し、従来からの健康指標とどのような関係にあるかを検討中である。さらに、この検査法が、指先採血でも可能であるかも検討中である。この現象は運動効果の新しい評価法となる可能性があり、今後、企業との連携を念頭に置いている。

浅学菲才の為多くのやり残しがあるが、好奇心は未だ尽きず今後も地道に精進したい。末筆ながら、お世話になった皆様に深謝申し上げ、岡山大学の発展を祈念します。

略 歴

- 昭和55年4月 山口大学医学部医学科卒業
 昭和60年3月 山口大学大学院医学研究科（内科学専攻）修了
 昭和63年8月 山口大学医学部助手（公衆衛生学講座）
 平成3年8月 山口大学医学部講師（公衆衛生学講座）
 平成4年10月 山口大学医学部助教授（公衆衛生学講座）
 平成7年2月 金沢大学医学部教授（公衆衛生学講座）
 平成14年5月 米国デューク大学メディカルセンター
 麻酔学教室（研究協力員）
 平成18年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授（公衆衛生学分野）

土居弘幸教授 ご退任



ご挨拶

行政官から懐かしの母校に戻り、教育・研究畑に転身したが、本人以上に周囲が面食らったのではなからうか。役人には役人の掟があるが、恩師青山英康名誉教授から「社会正義を貫くことが役人の本懐」との薫陶を受け、数々の掟破りを行って来た。すると、その度に強力なサポーターが内外に増え、私なりの役人スタイルが固まった。大学に赴任後、最初の教授会。おと

なくしていようと思ったが、なんと生物学を医学部受験の必須科目とする議案があった。到底納得出来る説明ではなかつただけに、異議を申し立てたが（正にKY）、議案は通り生物学が必須となった。そして入試の結果は某予備校の岡大医学部の難易度が2ランク下がるものとなった。こうした私のマナーは、疫学・衛生学のスタッフからは非常にウケ、共通の価値観を有する同志として快適な教育・研究生活を送ることが出来た。改めて感謝したい。

しかし、国立大学も淘汰される時代、反骨だけでは無能の徒に過ぎない。幾つかの提案をし、前例がないとのことで却下されたが、今ではそれが有効に機能しており、母校に僅かでも貢献出来たのでは、と受け止めている。

数年前、文部科学省からの助成で、大学院修士課程に公衆衛生学コース（MPHコース）を開設することとなった。しかし修士課程の定員は既得権化しており、当時の専攻長が多くの反対を押し切って英断し（自分が腹を切れば良いと）、定員枠を強引に2名増やして下さった。そして今春、5名のMPH取得者が卒業する。過去の卒業生には、厚生労働省技官、PMDA技官がいる。他大学の者から見ると、それこそが150年の伝統と実績。様々な意見の違いはあっても、組織全体が発展へ向けて動く大きな力が岡大医学部にはあるのだと言う。なるほど、中には見えないことが、外からは見えるらしい。教授を始め学内の教職員が、真摯に諸先輩の声に耳を傾けるならば、母校は益々発展するに違いない。

略 歴

- 昭和60年 岡山大学医学部卒業
- 昭和60年 岡山大学大学院医学研究科入学
- 昭和62年 国際協力事業団（JICA）インドネシア地域保健対策専門家
- 平成元年 岡山大学大学院医学研究科博士課程修了
- 平成2年 厚生省保健医療局企画課課長補佐
- 平成6年 世界保健機関（WHO）Global Program on Vaccine専門監
- 平成9年 厚生省健康政策局指導課課長補佐
- 平成13年 静岡県健康福祉部技監
- 平成15年 静岡県理事
- 平成19年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授（疫学・衛生学分野）

国際医療福祉大学医学部 医学教育統括センター感染症学 教授に矢野晴美氏 ご就任



ご挨拶

平成30年4月1日付で、国際医療福祉大学医学部、医学教育統括センター教授、平成30年7月1日付で、同大学 感染症学教授を拝命し、医学教育と診療、研究に従事しております。

私は、平成5年に本学を卒業後、衛生学（青山英康教授）の

大学院生としてご縁をいただき、現在に至っております。学生時代から、米国臨床留学の相談に快く応じてくださり、自由に研修させてくださった青山英康先生をはじめ、同門の先輩の九州大学教授の馬場園明先生、本学教授の津田敏秀先生、また2019年3月末でご退任された衛生学教授の土居弘幸先生には大変お世話になりました。

小学生のころ聞き始めた英語ラジオ講座がきっかけで本学2年生のときに米国ダートマス大学にて1ヶ月ほど夏休みの集中講座を受講しました。1年後、英国オックスフォードでさらに英語コースを受講しましたが、そのときに直感的に感じた「世界とつながる仕事がしたい」との気持ちから、卒後3年目に渡米し臨床研修を受けることとなりました。在米中は、総合内科3年、感染症科2年半弱のトレーニングを積み、現在もメンターと仰ぐ生涯にわたる恩師との出会いに恵まれました。在米通算9年弱の後、ご縁あり、栃木県の自治医科大学にて感染症科を立ち上げる仕事をいただき帰国いたしました。自治医科大学では、本学の先輩であり自治医科大学細菌学教授（当時）の平井義一先生に臨床感染症センターおよび感染症科の立ち上げで大変お世話になりました。自治医科大学在任中は、本学同窓の先生がたが、麻酔科、小児心臓血管外科、脳外科などにいらっしゃり、診療面や岡山県人会などでたいへんお世話になりました。

前職では、平成27年6月に筑波大学医学医療系教授を拝命し、茨城県水戸市の筑波大学病院附属の地域中核病院を拠点に、医学生、研修医の臨床教育およびグローバルヘルスセンター・感染症科を立ち上げる仕事に従事させていただきました。内科系疾患はすべて総合診療科が主治医となる総合内科診療で、感染症科の専門診療を提供するシステムを構築し、やる気のある

若手と切磋琢磨いたしました。平成30年4月より、本邦では初の英語による医学教育を行い、21世紀の医療を担う人材育成に情熱をかけております。医学教育学研究および感染症の臨床研究も主軸に、学生が国内外で活躍できるよう尽力しております。本学および同窓の先生方のさらなるご発展をお祈りするとともに、引き続きご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

略 歴

- 平成5年3月 岡山大学医学部医学科卒業
岡山大学大学院医学研究科社会医学系
衛生学入学
沖縄米海軍病院インターン
- 平成6年6月 岡山赤十字病院内科研修医
- 平成7年7月 米国Beth Israel Medical Center, New York 内科レジデント
- 平成10年7月 米国University of Texas-Houston Medical School, Houston, TX
感染症科フェロー
- 平成12年12月 日本医師会総合政策研究機構（日医総研）主任研究員
- 平成13年3月 岡山大学大学院医学研究科社会医学系衛生学・博士課程卒業
- 平成15年6月 米国Johns Hopkins University Bloomberg School of Public Health Baltimore, MD, USA, Master of Public Health (MPH) 取得
- 平成15年10月 米国南イリノイ大学医学部感染症科アシスタントプロフェッサー
- 平成17年4月 自治医科大学附属病院 感染制御部講師
- 平成18年6月 同上 助教授
- 平成18年10月 自治医科大学 臨床感染症センター感染症科 助教授
- 平成19年4月 同上 准教授
- 平成24年4月 岡山大学 客員教授
- 平成26年6月 筑波大学医学医療系 教授
筑波大学附属病院水戸地域医療教育センター/水戸協同病院
- 平成30年4月 国際医療福祉大学医学部 医学教育統括センター教授
- 平成30年7月 同上 感染症学教授



受章

瑞宝中綬章	(昭39) 岡田 茂 (昭39) 石垣 一彦 (昭42) 長尾 省吾
平成30年度救急医療功労者厚生労働大臣表彰	(会員) 金田 道弘
平成30年度産科医療功労者厚生労働大臣表彰	(昭46) 田淵 和久
平成30年度国民健康保険関係功績者厚生労働大臣表彰	(昭56) 菅原 英次
平成30年度社会保険診療報酬支払基金関係者厚生労働大臣表彰	(昭48) 植原 幸二
平成30年度岡山県警察本部長感謝状	(昭48) 西崎 進 (昭49) 松田 忠和 (昭58院) 岩本 博通 (昭62) 江田 泉 (会員) 山成 洋
平成30年度中国管区警察局長感謝状	(会員) 小野 泰生
平成30年度岡山県保健衛生功労者表彰	
岡山県知事表彰	
公衆衛生	(昭35) 森下 家代子 (昭40) 西下 明 (昭43) 丹治 康浩 (昭43) 松原 浄 (昭51) 森脇 和久 (会員) 浅野 浩一 (会員) 大西 武生 (会員) 長谷川 賢也
へき地医療	(昭41) 國富 泰二
地域医療	(昭49) 坪井 雅弘 (昭49) 野村 修一

地域医療	(旧教員) 三好 新一郎
岡山県保健福祉部長表彰	
公衆衛生	(昭44) 辻 仁子 (昭52) 当真 純二 (昭61院) 渡辺 英臣 (平5院) 遠藤 彰 (会員) 苅田 総一郎 (会員) 國司 研介 (会員) 坂本 裕治

平成30年度岡山県精神保健福祉事業功労者表彰

(昭55) 原田 俊樹

平成30年度岡山県教育関係功労者表彰

(昭50) 庵谷 和夫
(昭52) 川上 晋一郎
(昭52) 野田 憲男
(昭54) 平松 美佐子
(昭61) 岡野 和美

岡山県医師会学術奨励賞

(平20) 三瀬 広記

第47回医療功労賞中央表彰

(昭33) 江口 壽榮夫

〃

県表彰 (昭52) 山崎 史行

このたびの受賞に対し、会員一同心からお喜び申し上げますとともに、今後益々の御健勝をお祈り致します。

※会員の方が各賞を受賞された場合は事務局にご連絡ください。

医学部・病院関係

准教授就任

心臓血管外科学 小谷 恭弘

講師就任

消化器内科 池田 房雄

救急外傷治療学 山田 太平

転出

旭川荘・療育医療センター 新井 禎彦
(心臓血管外科学)

学位授与

博士

平成30年9月27日(甲) (医歯薬学総合研究科)

武藤 典子 麻酔・蘇生学

宮本 朋幸 人体構成学

上岡 亮 循環器内科学

青 山 克 幸 消化器外科学
 高 木 弘 誠 消化器外科学
 春 間 朋 子 産科・婦人科学
 松 本 洋 形成再建外科学
 平 野 雅 幸 眼科学
 岡 浩 介 総合内科学
 LEMOTO VIKI FATAFEHI 麻醉・蘇生学
 高 遠 薬理学
 楊 旭 病理学（免疫病理）
 ZEGGAR Sonia 腎・免疫・内分泌代謝内科学
 張 菁 菁 眼科学
 呂 智 超 整形外科学
 佐 野 俊 和 心臓血管外科学
 三 瀬 広 記 腎・免疫・内分泌代謝内科学
 吉 川 知 伸 小児医科学
 藤 田 志 保 産科・婦人科学

安 松 美 佐 組織機能修復学
 横 山 達 哉 組織機能修復学

**平成30年度（平成31年3月）
 岡山大学医学部医学科卒業生**

赤池 夏樹 小川 隆守 北出 怜司 里見 雪音
 田中 瑛三 二口 慧介 藤原 万里 大谷 啓江
 青島 賢治 明石 耕生 赤塚 陸 芦田 湧基
 飯尾 享平 石川 順一 石田 将大 石原 健嗣
 石村 昂誠 泉原 康平 市瀬 仁 井上 湧介
 今尾 武士 今西謙太郎 今村 竜太 上枝 舜治
 内田 陽介 大崎 剛 太田 圭祐 岡本 悠佑
 岡安 和寛 小川 彩 奥村 浩基 奥村 美紗
 小田 貴之 尾地 晃典 越智 清暁 尾上 慶尚
 神浦 真光 鴨頭実加子 川崎 綾子 紀田 心一
 樹下 明典 久保元志郎 糸 明日香 古賀 裕梨
 小久保咲紀 小西 智子 小原 利輝 小橋 藍子
 近藤 碧 近藤隆太郎 近藤 怜子 合田 百花
 西条 智也 坂本 美咲 坂本 萌 佐々木啓太
 篠崎真里奈 清水 彰人 白谷 怜央 須江 美裕
 鈴木芙希子 砂川 滉 瀬越 空人 妹尾 知哉
 園山 拓 高橋 拓也 滝西 史麻 竹内 あい
 田中駿二郎 津川 卓士 辻 彰洋 豊田 裕介
 仲地 翔 中原 清香 中村 俊介 中村 大
 永野 智浩 奈田 知明 檜崎 弘務 西尾 俊彦
 西田 康平 西村 侑太 野田 寛貴 濱崎 友洋
 濱本 奈々 原 尚史 馬場 貴大 日吉 俊晴
 平井 美帆 平岡 悠飛 廣野 欣司 福永 優季
 藤井 裕生 藤井龍之介 藤本 聡子 藤本 周作
 藤原 知洋 藤原 亮太 古川 真一 古谷 春乃
 堀元絵梨花 本田 貴裕 増田 泰之 松尾 啓太
 松本 慎 三浦 望 皆木 仁志 三原 大樹
 宮木 亮輔 三次 悠哉 守山 雅晃 山下 浩司
 山下 大輔 山田 智史 山本 淳史 横山希生人
 吉永 武史 出海 里佳 奥田 真吾 河野 和馬
 中田 大介 森谷 亮

修 士

平成30年9月27日（医歯薬学総合研究科）

藤 谷 陽 子 人体構成学

平成31年3月25日（医歯薬学総合研究科）

岸 川 俊 大 医療政策・医療経済学
 舩 上 豪 紀 細胞生理学
 津志田 圭 吾 腎・免疫・内分泌代謝内科学
 大 津 裕 貴 細胞生理学
 塩 本 凌 士 細胞生理学
 松 持 歩 夏 細胞生理学
 柚 木 彩 細胞生理学
 岡 本 瑞 生 生化学
 隅 田 健 斗 生化学
 中 居 絵梨奈 病原細菌学
 山 崎 雷 太 公衆衛生学
 浅 井 愉香子 医療政策・医療経済学
 甲 斐 寛 彬 システム生理学
 魏 恒 システム生理学
 黄 永 脳神経内科学
 坂 本 陽 子 疫学・衛生学
 中 島 康 子 疫学・衛生学
 松 木 宣 嘉 疫学・衛生学
 八 幡 晋 輔 疫学・衛生学
 水 田 美 紀 医療政策・医療経済学
 河 合 弘 樹 精神神経病態学
 黒 田 啓 太 脳神経機構学
 遠 藤 寛 之 組織機能修復学
 本 上 遥 組織機能修復学

鶴翔会役員

鶴翔会役員は、平成30年度末任期満了に伴い改選の結果、次のとおり選出されました。

会 長	浅沼 幹人			
副会長	金澤 右			
	浅利 正二			
幹 事	松尾 信彦	浜家 一雄	太田 武夫	
	谷崎 真行	小田 慈		
	山田 雅夫	西堀 正洋	伊達 勲	
	岡田 裕之	藤原 俊義		
監 事	池田 敏	吉野 正		

会 員 訃 報

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

昭17専	真 鍋 欣 良	30. 3. 23
昭18専	江 尻 通 磨	30. 3. 4
昭21	米 元 重 雄	30. 10. 13
昭23	永 原 貞 郎	29. 11. 10
昭24	正 岡 吉 則	30. 6. 24
昭24	荒 木 文 雄	30. 2
昭24専	足 立 史 郎	30. 3. 29
昭24専	岡 本 文 治	30. 11. 30
昭25専	中 嶋 廣 平	30. 3. 15
昭25専	河 原 佳 正	30. 10. 19
昭25専	有 木 庸	30. 10. 27
昭25専	椎 木 保 人	31. 1. 10
昭25専	田 村 誠一郎	31. 2. 1
昭27	宮 武 昭三郎	29. 11. 3
昭28	山 崎 巖	29. 12. 20
昭29	粟 井 弘 二	31. 1. 4
昭31	田 辺 功	31. 1. 18
昭32	三 宅 精 平	30. 8. 18
昭33	大 熊 佳 晴	29. 10. 7
昭33	川 村 範 夫	31. 2. 18
昭34	小 坂 直 也	30. 11. 8
昭34	安 木 邦 昌	31. 1. 23
昭37	徳 永 五輪雄	30. 3. 10
昭37	栗 山 榮	30. 3. 18
昭37	田 中 啓 幹	29. 8. 13
昭39	久 松 三 生	30. 10. 16
昭39	田 中 良 憲	31. 1. 1
昭43	松 原 淨	30. 11. 1
昭44	玉 置 幸 弘	26. 10. 14
昭44	藤 田 征 男	29. 7
昭46	西 岡 健 次	30. 10. 27
昭55	植 田 育 寛	30. 8. 4
昭55	真 嶋 良 昭	30. 1. 30
平17	吉 村 文 太	30. 8. 14
会員	金 高 利 昌	29. 12. 26
会員	川 崎 俊 夫	30. 6. 30
会員	岸 本 愛 二	30. 9. 25
会員	富 山 吉 久	31. 2. 7
会員	小 野 勝一郎	30. 7. 3

クラブ報告

岡山大学医学部準硬式野球部 西医体2連覇達成

平4 中尾篤典

鶴翔会の皆さま方におかれましては、ご清栄のことと御慶び申し上げます。平成4年野球部卒業の中尾と申します。このたび、我々の後輩である岡山大学医学部準硬式野球部の輝かしい活躍を、鶴翔会でご報告できますこと、大変幸福に感じております。

平成28年4月に本学にお世話になることになり、先代の谷本部長より部長を引き継ぐように仰せつかりました。教授は40人ほどいますが、野球部の部長には一人しかなれません。OBとして大変光栄なことで、同じくOBの廣畑聡先生をはじめ、関係諸先生方のおかげをもちまして、部員に怪我もなく無事野球部長としての3年間を終えられたことをまず御礼申し上げます。

我が野球部は、過去4年間、2度の西医体優勝、2度の西医体3位という好成績を残しており、皆木主将のもと黄金期の並々ならぬプレッシャーをもって挑んだ本大会でした。小生も夜勤明けの体に鞭打ってグラウンドにでては部員と汗を流すことを繰り返してまいりました。

壮行会では盛大にステーキでも食べさせてやるのが

いい部長なのでしょうが、就任早々なかなかお財布事情も苦しく、Tシャツ短パンサンダル姿でビアガーデンで壮行会を行いましたところ、見事優勝。また、決勝戦はせめて観戦しようと計画しておりましたが、これもまた救急対応でいけず、決勝戦は観戦しない、壮行会はビアガーデン、というジレンマは今後も継続しなければなりません。

選手としては大した活躍もせず、ランナー三塁ではいつもスクイズをさせられていましたが、部長としてようやく私の才能が開花したと言っても過言ではないでしょう。新チームは既に宮本主将のもと練習を開始、3連覇に向け始動しております。

グラウンドが駐車場工事のため半分の面積しか使えないというハンデを乗り越え、工夫と精神力で困難を乗り越えてくれることと思います。

鶴翔会の皆様方には、引き続きまして岡山大学医学部準硬式野球部ならびに学生諸君が健やかに学べるよう、ご支援を心よりお願い申し上げます。

西医体2018 戦績報告

8月13日二回戦

対山口大学

津球場（7回コールド）

TN	1	2	3	4	5	6	7	R	H	E
山口	2	0	0	0	4	0	0	6	9	3
岡山	4	1	0	1	1	4	2×	13	15	3

バッテリー：藤田、寺本－市場

本塁打：石村

二塁打：石原

安打：15本



8月14日三回戦

対金沢大学

安濃中央総合公園野球場

TN	1	2	3	4	5	6	7	8	9	R	H	E
金沢	0	0	0	1	0	2	0	0	0	3	9	3
岡山	1	0	0	0	2	0	1	4	×	8	9	3

バッテリー：藤田、寺本-市場

三塁打：宮本

二塁打：石村、山羽、大元

安打：9本

8月15日準々決勝

対宮崎大学

TN	1	2	3	4	5	6	7	8	9	R	H	E
宮崎	0	2	0	0	0	1	0	0	0	3	7	4
岡山	0	1	1	2	1	0	0	0	×	5	10	3

バッテリー：寺本-市場

二塁打：石村、三輪

安打：10本

8月16日準決勝

対佐賀大学

津球場（7回コールド）

TN	1	2	3	4	5	6	7	R	H	E
岡山	0	2	0	2	0	5	0	9	9	1
佐賀	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2

バッテリー：藤田-市場

三塁打：石村、手島

二塁打：手島

安打：9本

8月17日決勝

対長崎大学

津球場

TN	1	2	3	4	5	6	7	8	9	R	H	E
長崎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	5
岡山	0	0	2	0	0	0	0	0	×	2	5	0

バッテリー：藤田・寺本-市場

二塁打：宮本

安打5本



会員のこえ

佐伯矩先生の「栄養100年」を 記念した第8回栄養管理指導者 協議会に参加して

平8 中瀬浩一



写真① 佐伯 矩先生

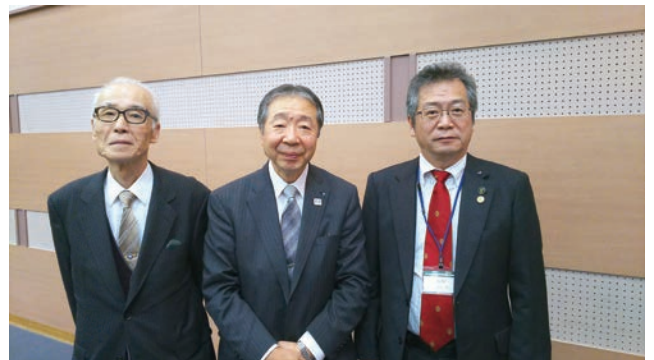
であった事を報告させていただきます。

佐伯先生（写真①）は、栄養学を世界で初めて確立された方で、過去の鶴翔会報にも佐伯先生についての記事があります（80号小田皓二先生、106号恩地森一先生、107号及び108号坪井修平先生）。そして平成25年の115号は佐伯先生が表紙を飾られており、佐伯先生が「偏食」「栄養指導」を造語されたことや、従来使われていた「營養」ではなく「栄養」の漢字を使用することを建言されたのが1918年と書かれています。つまり、2018年は「栄養100年」の記念すべき年なのです。もし佐伯先生がいらっしゃらなければ今頃「栄養」は「營養」、「栄養指導」も存在しなかったかもしれません。

私が取り組んでいる造血器腫瘍の治療において、抗がん剤や感染症治療薬は時代とともに選択肢が増えて着実に進歩していますが、栄養療法は十分に浸透していないように思います。当院の造血細胞移植患者の治療成績を振り返ると、栄養状態の悪い（アルブミン値の低い）患者さんは予後が悪いと分かりました。患者さんの栄養状態を改善すれば移植成績は向上するので

は、という思いが、私が栄養に興味をもったきっかけです。そして、栄養管理について真剣に議論をする医療従事者の集まりである栄養管理指導者協議会に参加して勉強を始めました。

栄養管理指導者協議会の代表理事が大阪大学の外科医である井上善文先生（写真②）で、栄養と感染管理の正しい知識の普及に精力的に取り組まれています。井上先生は愛媛県伊方町出身のため、同じ愛媛出身の佐伯先生が提唱された栄養100年にあわせて、第8回栄養管理指導者協議会～栄養100年イベント～が松山市で開催されました。佐伯 矩先生が開設された佐伯栄養学校で直接薫陶を受けた最後の教え子で、厚生省の初代栄養指導官の原正俊先生が講演され、佐伯先生は身長が150センチ程と高くはなかったが、講義の時は袴姿で熱弁を振るわれ、海外での経験も踏まえた講義では新しい事ばかり教えてもらったとの思い出を話されました。



写真② 左から原先生、佐伯栄養専門学校山崎大治校長、井上先生

また、愛媛県伊予市の栄養寺の高橋宏文住職（写真③）の講話もありました。佐伯先生は幼少時に栄養寺の近くに生まれ、100年前に栄養という漢字を選んだ時に、当然栄養寺の事を意識されたはずですが、それを証明する資料はないとの事、しかし佐伯



写真③ 高橋住職



写真④ 全員写真

先生のために100年後に多くの人が集まった縁を大切にしようとお話をされました。そして、栄養の漢字のルーツを探る井上先生の講演など、栄養100年にふさわしい話題の研究会は、約100人の栄養を真剣に考える医療従事者が参加して盛大に行われました（写真④）。

我々、いや日本人が当たり前のように使う「栄養」という漢字やその意味に、岡山大学医学部のDNAが100年前から組み込まれている事を、今一度鶴翔会で共有しておきたいと思いつつ筆を置きます。

本稿執筆にあたり、坪井修平先生（昭和40年卒）に御指導を頂きましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。

秦 佐八郎博士 ～没後80周年記念事業～

昭40 坪 井 修 平



写真① ポスター

ショットの記念メダル、様々なパネル、写真、ポスター

2018年11月24日（土）9：20～14：30、豪勢な益田市島根芸術文化センターで「魔法の弾丸サルバルサン606号発見 化学療法のパイオニア 秦佐八郎博士～没後80周年記念事業～」(写真①)が盛大に開催されました。ロビーには、東方16kmの美都町に在る秦記念館から搬送された、サルバルサン606号やエールリッヒ博士とツ

が所狭しと展示されていました。

式典ではお孫さんの秦 宏樹氏、曾孫の秦 真樹氏が招待され、万雷の拍手で迎えられました。

式典に続いて森 孝之 北里研究所北里柴三郎記念室次長による「冷静なる秦 佐八郎博士、好転を活かす」と公文裕巳 新見公立大学学長・前岡山大学泌尿器科教授による「魔法の弾丸サルバルサンから続く21世紀の標的医療」の記念講演があり、午後はNPO-MASUDAの企画製作による市民劇「秦 佐八郎物語」が上演されました。

秦博士の故郷、人口3千人にも満たない美都町が15年前に人口5万人の益田市と合併したお蔭で、秦博士の顕彰が充実強化され、国が強力に進めている市町村合併の成果の1つではないかと嬉しく思いました。

冷静なる秦 佐八郎博士、好転を活かす

森次長の講演（写真②）は、秦 佐八郎博士の生い立ちから始まり、岡山第3高等学校学校医学部での秀才ぶり、岡山県立病院での井上善次郎内科学教授・荒木寅三郎医化学教授の知遇、伝染病研究所での北里柴三郎の薫陶・ベストの研究と防疫活動、野口英世・志賀潔との交友、エールリッヒの下世界初の抗菌薬スピロヘーター症治療薬サルバルサン606号の発見、慶応大学医学部教授就任、ドイツ自然科学アカデミー会員の荣誉等々に至る波乱万丈の生涯を分かりやすく話され、地元の人達は秦博士の偉業を再認識することが出来ました。

講演の中で、とくに印象に残ったお話を紹介します。

- ◆「40歳を過ぎたら自分の顔に責任を持つ」
- ・長年の喜怒哀楽の蓄積が顔に刻まれる。



写真② 講演-1

- ・人生の行動規範が表情に出る。
- ◆「秦 佐八郎論説集」
 - ・運とは実際分らない。
 - ・運は寝て待て、と努力を止めて居ると知らない間に通り返して仕舞ふ。
 - ・運は何時でも来るがぼんやりして捕へぬから悪いとも云われるが、鵜の目鷹の目 待っていても幸運がやたらと飛んで来るわけでもない。
 - ・矢張り努力しつつ逃がさぬ様に注意することが肝要。
 - ・日々の研鑽が好機に役に立つ。
 - ・仕事は楽しみを以て進めば苦はない。天運はこれを助けるのである。
 - ・決して自分の功勞などと考ふべきではない。
- ◆「北里柴三郎博士」
 - ・ロベルト・コッホ博士から細菌学を学ぶ。
 - ・福沢諭吉の支援を受けて日本初の私立伝染病研究所を創設。
 - ・血清療法の開発。
 - ・人体への空気・経口・昆虫等感染経路の追究。
 - ・抗毒素血清・抗菌血清・感作ワクチン。
 - ・国家衛生法の審議機関の設立。
- ◆「パウル・エールリッヒの研究に必要な4つのG」
 - ・Geld お金
 - ・Geduld 忍耐
 - ・Gluck 運
 - ・Geschick 熟練
- ◆「チャンスを生かす」
 - ・荒木寅三郎教授による北里柴三郎伝染病研究所長への紹介
 - ・北里所長とエールリッヒのコッホ研究所での出会い
 - ・危険極まりないペストの研究で発揮した卓越した技術・明晰な研究データの解析

◆「秦 佐八郎博士から学ぶべきもの」

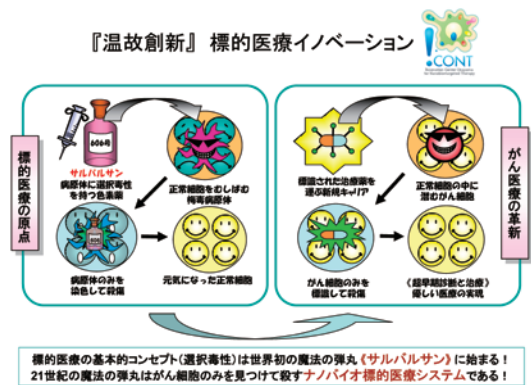
- ・誠実
- ・謙虚
- ・目的に向けて日々の努力
- ・周囲の人々との協調性
- ・自分の志を貫く



写真③ 講演－2

魔法の弾丸サルバルサンから続く21世紀の標的医療
続いて公文先生が後輩の

医学者の立場から秦 佐八郎博士の功績が21世紀の「標的医療」に繋がっていることを強調されました(写真③)。公文先生は、日本化学療法学会が制定した“感染症に対する化学療法の進歩に寄与した研究者を讃える”「志賀潔・秦 佐八郎記念賞」を2007年に受賞されており、この記念事業には打って付けの特別講演者だと思いました。私が最も印象に残った言葉は「温故知新」をグレードアップした「温故創新」(スライド①)です。その他興味を惹いたスライドを抜粋します(スライド②～③)。若手の研究者や学生の皆さんに参考になれば幸いです。



スライド① 『温故創新』 標的医療イノベーション



スライド② “21世紀の魔法の弾丸”を目指す「魔法のナノマシン」

ナノバイオ標的医療の融合的創出拠点



スライド③ ナノバイオ標的医療の融合的創出拠点

魔法の治療遺伝子「REIC/Dkk-3」

Reduced Expression in Immortalized Cells/Dickkopf-3

究極のがん遺伝子治療と標的医療の創出

- ・がん細胞選択的細胞死の誘導
- ・抗がん免疫の活性化
- ・多種類のがんに幅広く適用
- ⇒がん予防のための遺伝子治療と遺伝子・分子創薬への展開

全ての条件を満たす岡大発新規がん治療遺伝子REIC

基本特許：特許第381382号, US11/434,813,EP00956811.4
 応用特許：①PCT/JP2006/300411, ② PCT/JP2007/071170など6件

スライド④ 魔法の治療遺伝子「REIC/Dkk-3」

現在の標準的がん治療

がん細胞の増殖死

外科手術 + 放射線治療 + 化学療法 + 免疫療法

抗がん剤を使って行うがん治療を一般的に化学療法と呼ぶ

通常の抗がん剤は選択毒性が十分でなく、正常細胞にもダメージを与え副作用が少なくない!!

21世紀のがん標的医療

選択毒性 ↑

スライド⑧ 現在の標準的がん治療

化学療法の扉を開く

1910 サルバルサンの発見

梅毒は種々な治療法がなかった時代には、エイズが発見された初期の段階と同じように恐れられ、患者は差別を受けていました。1910年薬匠八郎がエルリッヒと一緒に梅毒の特効薬(魔法の弾丸)サルバルサンを発見したことにより、世界中で使用され、多くの患者が救われました。

「化学療法の元祖(魔法の弾丸)」

サルバルサンは色素から発見された細菌だけを殺めて毒を化学療法の元祖でした。サルバルサンの発見から、色薬がもつ病原菌に対する選択毒性の研究が盛んになりました。

選択毒性

606 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

スライド⑤ 化学療法の扉を開く

魔法の弾丸サルバルサンから続く21世紀の標的医療

抗がん化学療法への進歩 - 分子標的薬 -
 がん細胞の増殖に関わる特定の分子(たんぱく、遺伝子)を狙い撃ちする薬剤

低分子医薬品
 分子重300~500と小さく、細胞膜の中や核に入り込むことができ、血液製剤も通る。製剤となるタンパク質に結合して効果を発揮する。副作用も少ない。
 ⇒ 阻害剤: EGFR阻害剤、酪氨酸キナーゼ阻害剤など
 ⇒ 阻害剤: mab:モノクローナル抗体(mAb)抗体

抗体医薬品
 血液療法(感染症の治療に抗毒素を含む血清を使用)に起源をもつ。血清から抗体のみ分離した免疫グロブリン製剤(第一世代)が開発された。その後に、ハイブリドマ技術の発明によりモノクローナル抗体の製造が可能となり、遺伝子組み換え技術の応用により第二世代抗体医薬品が登場。
 ⇒ 阻害剤: mab:モノクローナル抗体(mAb)抗体

Fluorouracil, 5-FU, 1957年発見
 Doxorubicin, 1966年発見
 Etoposide, 1987年発見
 Imatinib, 2001年発見
 Gefitinib, 2003年発見
 Erlotinib, 2004年発見
 Trastuzumab, 2006年発見
 Rituximab, 2006年発見
 Pembrolizumab, 2015年発見
 Nivolumab, 2015年発見

スライド⑨ 21世紀のがん標的医療ー選択毒性

「化学療法の夜明け」

1901年 第1回 ノーベル賞 ジョセフ・スタリクが梅毒の特効薬(魔法の弾丸)サルバルサンの発見

化学療法

- 1910 サルバルサンの発見
- P.エルリッヒ 薬匠八郎
- 1929 ペニシリンの発見
- A. Fleming
- 1932 サルファ剤の発見
- Q. Domag
- 1940 ペニシリンの実用化
- H. Florey E. Chain
- 1944 ストربتマイシンの発見
- S. Waksman
- 1948 セファロスポリンの発見
- J. Florey

血清療法
 細菌の毒素を中和する抗毒素(抗体)による感染症治療。現代医療の主役となった抗体医薬の起源!

スライド⑥ 「化学療法の夜明け」

本庶氏ノーベル賞

免疫学 生理学賞

免疫系はがん細胞を異物として認識し、攻撃できる!
 (がん)抗腫瘍免疫の標的になる

がん細胞は免疫による攻撃を逃れる複数の仕組みを作りながら増殖する!

がん細胞が免疫から逃れる仕組みをブロック(邪魔)すると、がん細胞を選択的に排除できる!
 (選択毒性を実現)

免疫関連の特有の副作用に注意

PD-1, CTLA-4経路阻害剤の効果は限定的(15-30%)であり、新しい複合免疫療法の探索が世界中で進行。
 ⇒ Ad-REICと抗PD-1抗体との併用療法は理想的なオプショナルの1つと考えられる。

スライド⑩ 本庶氏ノーベル賞ーがん薬オプジーボ

がん細胞には選択毒性発現のための標的が少ない

抗がん剤

がん抗原は標的にならないのか?

がん細胞

自己由来のヒト細胞

選択毒性発現のための標的

がん

がん細胞は、元々は自己の細胞が悪性化したものであり、攻撃目標が少ない。従来低分子薬剤では正常細胞とがん細胞との選択性(選択毒性)に限界がある?!

スライド⑦ がん細胞には選択毒性発現のための標的が少ない

魔法の弾丸REIC遺伝子治療薬

免疫活性T細胞

がん細胞を標的にして攻撃するように遺伝子を組込んだ!

抗がん免疫の活性化

がん細胞の選択的細胞死

桃太郎の分身軍団

免疫活性T細胞

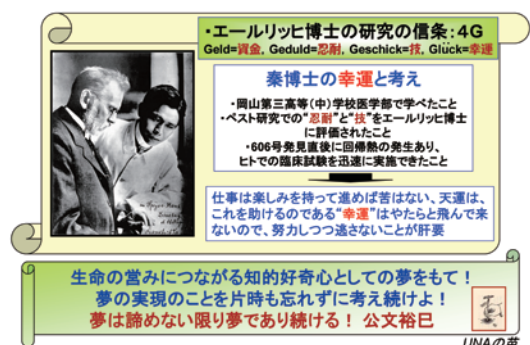
がん細胞を標的にして攻撃する!

スライド⑪ 魔法の弾丸Ad-REIC



スライド⑫ 岡山大学発ベンチャー August, 2007

『先人の跡を師とせず先人の心を師とすべし』 志賀傑



スライド⑬ 『先人の跡を師とせず先人の心を師とすべし』

お二人の講演は、秦 佐八郎博士の世界初の抗菌薬発見＝ノーベル賞級の偉業のみならず、頭脳明晰・類稀な克己心・不屈の精神・慎重緻密な性格・謙譲の美德・忠恕の心を有する素晴らしい人物像についても称賛され、会場の同郷の人達、とくに特別招待された中学生達が深い感銘を受け、誇りと勇気を与えられたのではないかと思います。文豪で陸軍軍医総監の森鴎外も同じ石見の津和野町出身であり、世界的に有名な偉人を二人も輩出し、最盛期には世界の1/3の銀を産出した鉱山を掘り当てた石見の人達に畏敬の念を深くしております。

市民劇「秦 佐八郎物語」

この市民劇の意義については、本事業の実行委員会委員長の益田市長のごあいさつが如実に物語っています。

「秦 佐八郎博士の没後80周年を迎え、記念事業が盛大に開催できますことを大変喜ばしく思います。

特定非営利活動法人NPO-MASUDAにおかれましては、日頃からの練習を積み重ねられ、市民劇を通じて秦 佐八郎博士の顕彰にご尽力されてきましたことに深く敬意を表します。この事業をきっかけとして秦

博士の顕彰機運がさらに高まり、ふるさと益田市の偉人として市民一人ひとりの関心がさらに広まっていくことを願っております」

秦博士がドイツで梅毒の治療薬発見に没頭していた頃の場面では、市民役者がエールリッヒ役を迫真の演技で演じられました(写真④)。



写真④ エールリッヒ博士と秦博士

サルバルサン606号を発見して、故郷に凱旋した時、郷里の人達が日の丸を振って温かく迎え、その喜びが満場を感動させました(写真⑤)。時代考証も徹底しており、50名に及ぶ市民役者の皆さんも劇団「四季」にも迫る名演技ぶりで、拍手喝采が鳴り止みませんでした。

黄泉の国の秦先生は嬉しい反面、照れ笑いされているのでは、と思いました。



写真⑤ 故郷に錦を飾る

おわりに

益田は遠かった。2泊3日の旅程で、往路は岡山から津山線に乗り、津山市で「津山洋学資料館」と「鶴山公園」、「衆楽園」を訪れ、奥津温泉で一泊。翌朝、因美線：津山→智頭→鳥取で山陰本線に乗り換えて益田に到着。津山・奥津での滞在時間を差し引いて岡山-益田全行程420km所要10時間。帰路は、出雲で伯備線に乗り換えて350km所要時間は往路の半分の5時間でした。因みに、3月1-2日「糖尿病学の進歩」が開催された本州最果ての青森は1,450km、7時間で新幹線の威力を再認識しました。

2017年8月、1泊2日の旅程で益田市美都町の秦記念館を訪れましたが、マイカーで山陽道、広島道、中国道を走り、益田市まで250km、正味4時間の長時間ドライブでした。といっても、車の場合、遠回りして山口県秋芳洞、秋吉台カルスト、サファリ、萩市の松下村塾のほか、鳥根県では益田の雪舟の郷記念館（雪舟は岡山県総社市出身ですが益田にお墓があります）、津和野の森鷗外記念館、広島県境に近い匹見峡や三段峡等名所旧跡に気軽に立ち寄ることが出来ます。他方、電車では駅弁の楽しみがあり、うたた寝もでき、交通事故の心配もなく、ハンドルを握る心身のストレスも皆無です。智頭－鳥取間では山岳鉄道の気分を味わい、車窓からは、山陰本線の日本海、伯備線の高梁川の飽くことを知らない美しい眺めを満喫できます。“狭い日本、そんなに急いで何処へ行く？”の揶揄に、我が意を得たり、でした。

鶴翔会会員たる者、偉大な大先輩の秦 佐八郎先生のご功績を知り、「温故創新」のためにも、たとえ地の果てであっても一度は秦記念館を訪れて頂きたい、と念願しています。

なお、奇しくも翌日の11月25日（日）、「佐伯 矩先生 栄養100年イベント」が松山市で開催されました。

残念ながら、その行事は後日耳にしたため出席出来ませんでした。秦 佐八郎先生（岡山大学医学部の前身 岡山第三高等学校医学部 明28卒）の3期後輩の佐伯 矩（サイキ タダス）先生（同 明31卒）は「栄養」を「栄養」に改め、七分搗き米を奨励、世界で初めて「栄養学」を「内科学」から独立、栄養士を養成、欧米各国で「栄養学」の招待講演等々秦先生と並んで出色の業績を挙げられ、世界の「栄養学の父」「栄養学の祖」と讃えられる大先輩です。余談ですが、栄養士の“士”は「学徳の立派な人、自ら赴く者」、師は「駐屯地、先方から来る者を待っている」と深い漢学の素養から熟考の末“士”を採用、「栄養士」と命名されました。

幸い、愛媛県立中央病院血液内科の中瀬浩一先生（平8）が『佐伯矩先生の「栄養100年」を記念した第8回栄養管理指導者協議会に参加して』と題して本号に寄稿されますので、楽しみにしています。

今後、このような鶴翔会にとって極めて重要な行事は、学外イベントであっても、事前に会報でお知らせして頂ければ幸いです。少なからぬ会員が出席され、主催者も喜ばれると思います。

今回の記念事業は山根家（秦先生の実家）と益田市美都支所から私に丁寧なお知らせがあり、念のため直ちに鶴翔会にもお伝えしました。

式典では北里研究所の祝電披露がありましたが、母校からは無く、私は肩身が狭く俯いていました…。

※本稿は講演－2の演者の公文先生にお目通し頂きました。的確に推敲して頂き、厚く御礼申し上げますと共に、桃太郎源（株）が「21世紀の魔法の弾丸」Ad-REIC製剤を上市される日の早からんことを心よりお祈りしています。

*今までに本誌に掲載された秦 佐八郎先生関連の記事

1. 「秦記念館の竣工式に参加して」77号、1994、島田宣浩（昭24）
2. 「化学療法の先駆者秦佐八郎博士の生誕地訪問記」79号、1995、中山 沃（昭24、准）
3. 「我が医学部の歴史と伝統」87号、1999、小田皓二（昭30）
4. 「英国医学史教科書に日本人でただ一人掲載されている秦佐八郎」100号、2006、石田純郎（昭48）
5. 「志賀潔・秦佐八郎記念賞を受賞して」103号、2007、公文裕巳（昭49）
6. 「秦 佐八郎」104号、2008、表紙
7. 「“サルバルサン戦記－秦 佐八郎”を読んで」122号、2017、坪井修平（昭40）
8. 「秦記念館を訪れて」123号、2017、坪井修平（昭40）
9. 「医師養成の歴史と岡山大学医学部－その1」125号、2018、椋野 洋（昭41）

目医者のつづやき 「希少がん診療」

昭60 松尾俊彦

通常の眼科診療では「がん」に出会うことは稀です。他の診療科で「がん」が大きな診療上の課題となることに比べ、眼科医にとって滅多に出会わない「がん」は、経験がなく苦手な疾患と言えるかもしれません。私は今まで、ぶどう膜炎（眼炎症と全身疾患）、小児眼科、眼腫瘍を専門として診てきました。目医者の私がちょっとマニアックな分野（？）を専門としているのは、大学病院で診療している期間が長いということがあると思うのですが、駆け出しの若い頃に置かれた環境も大きかったのではないかと思います。

1966年。当時、岡山大学眼科学教室の教授であった奥田観士先生が、年1回の眼科臨床病理組織研究会を始められました。眼球の炎症（ぶどう膜炎）や腫瘍は眼球という特殊な臓器で起こり、他領域の病理と比べ

て特殊であるにもかかわらず、誰もが日常的に経験する疾患ではないので皆で勉強していこうという趣旨の研究会です。奥田教授は若き日々、病理学教室でも研究しておられましたし、電子顕微鏡の黎明期に研究を始められた松尾信彦教授も病理が好きな様子でした。この研究会の事務局は、後任の松尾信彦教授の定年となる1997年3月まで岡山大学にありました。私たち新卒の医者の仕事の一つは、教室が主催する研究会のお世話です。病理研究会にも半ば強制的に参加させられているうちに、何となく私も病理が好きになっていました。とはいうものの、私の中で病理というのは普遍的なものであり、眼病理のみが特殊であるという考え方には納得できないでいることをこっそり付け加えます。

小児眼科でも、子どもの診方といったところを、客員教授として岡山大学病院に毎週診療に来られていた倉敷市児島の佐藤眼科の渡邊好政先生の診療をお手伝いさせていただきながら学んだように思います。渡邊先生は、1986年、まだ岡山市の旭川沿いにあった三木記念ホールで開催された日本弱視斜視学会大会の会長を務められました。学会と同時に行われた有料講習会は抄録集が足りなくなるほどの大盛況で、教室員に配布されていた抄録集を急遽召し上げ、参加者に提供して凌ぐほどでした。小児眼科で大きな課題となる弱視・斜視領域の学会や講習会の講演を聞く機会を与えられたことで、その領域の面白さを体験することができました。現在の眼科診療には視能訓練士という国家資格を持つ専門職が不可欠ですが、この視能訓練士の国家資格化（1971年、視能訓練士法成立、第1回国家試験）に貢献されたのも渡邊先生です。1972年に岡山大学医学部附属図書館3階の講堂で開催された日本視能訓練士協会発足式および第一回研究会（現在の日本視能矯正学会）の会長も務められました。

門前の小僧、習わぬ経を読むと言いますが、門の内に誘われ、数々の学びの機会を与えていただいたおかげで今日の私があるのだと、年月を重ねてそう思います。

さて、今回のお題「希少がん診療」のお話です。ちょっと稀な「目のがん」をみてみましょう。小児眼科領域では網膜芽細胞腫。これはコーツ病や硝子体先天異常との鑑別が必要となります。ぶどう膜炎の領域では、網膜下病変や硝子体混濁をきたし、ぶどう膜炎との鑑別が難しい眼内リンパ腫があります。原因不明の硝子体混濁が見られる場合は硝子体手術を行い、硝子体切除物（液体）を遠心して細胞沈査を固めたcell blockを作って病理に提出します。病理医によるパラフィン

包埋切片の免疫染色、診断を待って、治療方針を確定します。眼窩腫瘍の中で多くみられる涙腺腫瘍では、涙腺悪性リンパ腫の頻度が高いのですが、炎症が原因のサルコイドーシスやIgG4関連疾患との鑑別は必要です。脈絡膜悪性黒色腫も日本人では稀な疾患ですが、肝転移をきたすこともあるので、皮膚科を中心としたメラノーマセンターと一緒に診ています。最近では免疫チェックポイント阻害薬が出てきたので、以前に比べて予後は改善しています。また、一見、眼瞼や結膜の炎症に見えても、実は腫瘍であることがあり、特に高齢者では注意を要します。「目のがん」は、血液腫瘍内科、放射線科、皮膚科、小児科、脳神経外科など、そして、病理診断科と連携して初めて診療が成り立ちます。出会う機会が少なくても、連携するに足る意識と知識は欠かせないところです。

ご存知の方もいると思いますが、国立がん研究センター「がん対策情報センター」が運営する「がん情報サービス」というウェブサイトがあります。一般の方が医療者と共に適切な意思決定ができるようながんに関する情報の提供、医療関係者のがん治療・支援の質の向上に貢献し得る科学的根拠に基づいた情報の提供を目的とするサービスであると紹介されています。一般の方のサイト、医療関係者向けのサイトと整理されていますが、閲覧制限が掛かっているわけではありません。10年以上運用が続いているのですが、関連サイトの一つ「病院を探す 希少がん情報公開専門病院を探す」に、昨年9月、眼腫瘍の情報公開専門病院の情報が掲載されました。眼科領域の「がん」は稀であるため、定義上「希少がん」となるのです。

岡山大学病院は、国が定める指定要件を踏まえて県知事が推薦し、厚生労働大臣が適当と認め指定した「がん診療連携拠点病院」です。岡山県内では、がん診療連携拠点病院1、地域がん診療連携拠点病院6、地域がん診療病院2の合計9病院が指定されており、岡山大学病院は、各都道府県で中心的役割を果たす「岡山県がん診療連携拠点病院」となっています。サイトの「病院を探す」から「拠点病院などを探す」→「地図から探す」で岡山県を指定すると、県内の9指定病院が並び、各病院の情報を閲覧できます。岡山大学病院を選び、「診療に関する情報」の欄で「専門施設として詳細情報を公開している希少がん」を開けると、追加された「目のがん」が四肢軟部肉腫と共に提示され、詳細情報が閲覧できるようになっています。閲覧にはさまざまな選択肢が用意されていますので、いろいろな使い方ができると思います。注意書きにもある通り、専門施設は自主応募参加ですので、リストに含まれて

いないところが専門ではないということではありません。ただ、情報公開に当たっては施設要件として、眼腫瘍の診断・治療を実施し、他の医療機関からの相談窓口・コンサルタントとして機能すること、さらに病院で診断・治療を行ったすべての患者さんのがん情報について診療科を問わず病院全体で集め、その病院のがん診療がどのように行われているかを明らかにする調査を行う院内がん登録が求められています。

地域内での病院連携、院内他科との連携。診療科を越えた連携が求められています。連携は、特殊な疾患の治療のためだけに必要なものではなく、新しい知見に柔軟に対応しながら安全に診療が行われるための環境をつくり、維持するためにも欠かせない要件であると思います。折しも今年2019年の秋、特定機能病院である岡山大学病院は、病院機能評価（機能種別「一般病院3」）を受審すると聞きます。目医者の方は、お教えを請うことも多いと思いますが、引き続きご指導をどうか宜しくお願い致します。



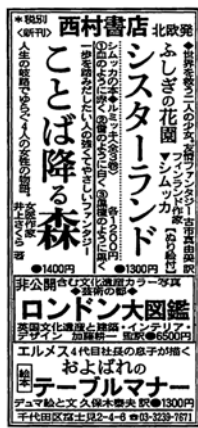
下山 敦士

会員の近況

井上紀美先生（昭43）より御著書をご寄贈いただきました。

ことば降る森 ～強くて優しいファンタジー～

昭43 井上紀美
(井上さくら)



2018年3月29日 朝日新聞

『ことば降る森』は、医師としての臨床経験と心理療法の学びの中で、「ことばは命を内包する」、と身を持って知ったことをファンタジーの形を借りて書いた小説です。

「強さ」がなければ守りきれない。「やさしさ」がなければ抱えられない。この二つを両手に持つことで、ことばは傷つき傷つけることから離れ生きたものとなる。この二つを持って初めて、自分の弱さ危うさを認め受け入れ、他人の弱さをも受け入れることができる。私はそう考えています。

私たちは、いじめ、虐待、ハラスメント、ゲーム・スマートフォン依存、核家族、独居、能力主義・排他主義……など、さまざまな要因による痛ましい事件が後を絶たない現実には生きています。希薄となりつつある人間関係の中でもがいている人も多くいるように思います。

そういった時代だからこそ、ことばをみがき蓄えることで自分を愛しよう。そのことばを他者に届けることで、信頼と愛が芽生え育まれるのではないか。私はそう信じてこの本を書きました。

ことば降る森

～立ち上がる映像 流れる調べ 香り立つことばが
あなたを誘う～

井上さくら著 西村書店発行 (本体1400円+税)

「もしも私が鳥だったら、この広い大空を、どちらに飛べばいいのかわからずに、地図もなく、地図があっても読めなくて、ねぐらに続く道を見失い、あっちへ行っては引き返し、こっちへ飛んでは引き返し、ただただ不器用に飛ぶだけで、元の場所にも戻れず、心細さに碎かれて、飛べない鳥になっただろう」

「もしも私が魚だったら、(以下省略)……」

私にとって、代わりとなる文は考えられないプロログのこの書き出しは、「何にもなれない私は、一体何になれるのだろうか。何になりたいのだろうか」の問いとなり、「そう、私はことばになりたい。ことばを抱えたい」という願いとなり、その思いは、現実とファンタジーが交錯する物語として展開していくこととなります。

登場する四人の女性、ケイ、アイ、マイ、メイは、人生の岐路に立ち、生き惑っています。そんな彼女たちのことばの中に、誰もが味わう感情、心の軌跡を織り込み、ページを繰る毎に映像が浮かび上がり、動き流れていくことを願いました。この四人の名前は、多くの意味を持たせたくて、色々な文字が当てはめられるように、イメージが膨らむように、と考えてつけました。

また、読者は高校2～3年生以上の大人世代を想定いたしました。

あとがきにも書きましたが、私の作業は、書き溜めていた、目の前に山積みになっている虚実取り混ぜたジグソーパズルの各ピースを、同時に聞こえてくる色々な声を聞き分け、選り分け、決められた箇所間違わないように嵌め込み復元すること、完成してひとつの絵となったとき、各ピースがそれぞれ生き生きと働いてくれることでした。

四人の女性が、自分を受け入れほんの少し前を向く姿を、四人が語りかけることばを受け取って下されば望外の喜びです。

上記は、『ことば降る森』の簡単な紹介文です。

一人でも多くの方がこの本を手にとって下さって、『ことば降る森』のことばが皆様に届きますように、と心から願っております。

同期会だより

昭和28年卒のクラス会

昭28 矢部 芳郎

過日（平成30年11月3日）、私たち、昭和28年（1953



左より、山崎夫人（謙三郎君の奥様）、山崎謙三郎、松田 穆、小山靖夫、北中 創、物部大成、矢部芳郎

年）の卒業生が集まりました。今年集まったのは6名でした。しかし今年、山崎謙三郎君が、奥様と一緒に出席され、懐かしい顔を見せてくれました。

例年のように、物故者の名前を読みあげて、追悼。その後、それぞれの近況、学生時代のこと、最近の医療のことなどについて話しました。みんな、それぞれ、ある程度の身体的不具合をもっていました、それでも、元気に話しました。そして、「出来れば、来年も会おう」と言って別れました。

平成30年度 みとう会 (昭和30年卒同窓会)

昭30 山本 泰久

みとう会（昭和30年卒同窓会）が、2018年10月6日に岡山プラザホテルに於いて開催されました。毎年のことですが今年は10名になりました。15名の予定でしたが台風予報によるキャンセルがあったためです。当

日岡山は風だけで快晴でした。もっとも年寄りの会ですから体調のことなどもありなかなかです。集まると話はずみ、まずまずのご馳走とわずかな酒で憂さを忘れて来年の会合を約束してくれます。90歳、熊代永（福島）、岡田和夫（日本救命救急学会）、小高康彦（婦人科）、金岡毅（福岡、婦人科）、喜多嶋康一（内科）、高田超爾（内科）、鍋島三朗（内科）、西岡博輔（精神科）、松尾信彦（眼科、みとう会会長）、山本泰久（外科）、3名の同伴者が参加されて結構な賑わいでした。最後は小高先生のいい歌で会を締めたことでした。



三十三 (ミソミ) 会 卒業60周年記念祝賀会

昭33 氏平一郎

三十三会は、平成30年10月13日（土）午後0時30分より、ホテルグランヴィア岡山において開かれました。出席者は会員26名、家族の方が12名、併せて38名が参加され大変盛会でした。出席会員は青地一郎、石野博志、伊藤文利、氏平一郎、江口寿栄夫、遠藤浩、大塚憲一、岡谷照太、小川市蔵、加原雅教、川崎明徳、川村範夫、川本精一郎、国富典子、国光慎策、小谷秀成、塩飽健、島田彦造、難波克一、平林光司、本郷基弘、松下哲一郎、八重垣環司、横田晃和、吉田宏、和気秀文の各氏及び同行の御家族の皆様方でした。

先ず、記念写真を撮り、次いで宴会場に入り会が始

まりました。

会では、当日の開催に向けて中心となってお世話をされた川崎明徳氏の司会の下にクラス代表の氏平一郎氏の挨拶がありました後、小谷秀成氏の乾杯の音頭で卒業60周年記念祝賀会が盛大に開かれました。

もう、久しくお会いする機会も無かっただけに、お互い大変懐かしく会場は笑顔、笑顔で楽しい雰囲気に包まれました。

途中、参加者全員、一人一人お話しをしていただく機会をつくり、全ての参加者から近況なり、情感溢れるお言葉もいただきました。また、同伴者からのお話も楽しく拝聴しました。

最後に、遠藤浩氏の閉会の挨拶をいただき、心に残る楽しい一日が終わりました。

ご参加下さいました皆様方に重ねて厚く御礼申し上げます。



昭和34年卒業「ねぶち会」同窓会 卒後60年を経過して

昭34 瀧谷泰博

今年の夏は集中豪雨による7月の西日本の被害、特に、倉敷地区の洪水。そして、8月から9月にかけて

関西地方に大きな被害をもたらした台風が続いた。蒸し暑い初秋も10月となると、ようやく秋らしい爽やかな好天に恵まれ、昭和34年卒業の同窓会「ねぶち会」は10月27日、ホテルグランヴィア岡山で開催された。

「ねぶち」は紫竹の強靱な根っこで作った鞭であるが、地方では竹の根を意味している。即ち、筍や藪のルーツである。60年前、同窓会の名称を付けるにあたり、インターンを間近に控え、まだ、藪に該当しない



写真1



写真2 右から城戸先生と説明される佐藤先生



写真3



写真4 右から椎名先生、大崎先生、そして瀧谷

ので、将来に向かう強い「ねぶち」となった。この「ねぶち」の多くは平均寿命を超え、昨年から池尻孝治、平松 収、藤原邦也の3先生がお亡くなりになった。心よりご冥福をお祈りします。

全員が集めたところで、まず、記念写真を撮る。女性は夫人を含めた6人、男性は14人。後から、愛媛の真鍋先生と姫路の瀧谷夫妻が参加したので、総勢23人である。会長の藤原先生は、まず、台風による被害を受けた人々に、お見舞いを述べられ、はるばる参加した同窓の先生方に感謝しますと挨拶された。参加者が年ごとに減少するのは仕方がないにしても、その世話が負担になるので、これからの開催を如何にするか提案された。「ねぶち会」の会計は従来の積立金に余裕があり、あまり個人負担の無いよう配慮されたいきさつがある。このまま中止する。積立金の処分。各地を持ち回りにする。色々と意見が続出したが、結論は出なかった。時間も経過するので、早々に東京からはるばる駆け付けた古市先生の乾杯から懇親会は始まった。「本来なら、東名を走りますが、今回は新幹線にしました。しかし、懐かしい青山先生の姿がここにお見受けできないのは、非常に残念です。何時も出席する先生方の顔触れは同じなので、残りの先生方も来年度は顔を見せてください」。青山名誉教授との関りで旧厚生省に進まれたエピソードを紹介しながら、見送る悲しみと出席した同窓に再会した喜びを交えて挨拶された(写真1)。今日のメニューはホテルグランビア岡山が誇るフランス料理のフルコースである。美しい色彩りで飾った「鱸と車海老のポワレ」に続き、メインは「国産牛フィレ肉のグリエと焼き野菜」となり、先生方のナイフとフォークの歩みはスローダウン気味である。しかし、ポリフェノールに富む赤ワインとフィレ肉に挑戦する後期高齢者の元気な食事風景であった。

会場の壁には所狭しとばかり、色々な写真が飾られ

た。写真を趣味する「ねぶち会」の作品展である。佐藤先生(写真2)は旅行で出会った巨大な橋梁や田舎の風景である。田中先生が望遠レンズで捉えた数葉の美しい小鳥の映像は、根気とシャッターチャンスを想像させてくれた。岩国の城戸先生は身近な風景にポイントを絞り、ズームアップを駆使しながら花や樹木を美しい色彩で表現されている。日本の風景をいつも見事に捉えられる松森先生は、石畳や夕日を写す泉庭を出品された。瀧谷は今秋、地中海のマルタ島で開催された世界医師テニス大会に参加され、猫の鳥の特徴を写した作品である。世話役の山本先生は都会の風景を見下ろしながら、行き交う人々と美しい歩道をコントラスト豊かに表現された組み写真である。今年のハイライトは大崎先生の屏風に描いた豪壮な書であった。剣道の有段者である先生は毎年、「武蔵五輪書」に挑戦され、人間の心理をとらえた戦いの心構えを意味する「鼠頭牛首」を大きな筆を駆使して作品にされた(写真3)。

次は田中先生の司会により各人の近況報告となった。年を経るごとに忍び寄る病、腸閉塞から回復されたZ先生など、多くの先生方が医師でも避けられない病気の経験談を交えながら紹介されていた。病を経験した医師が患者に思いやりの医療を提供した裏話である。さて、今回の「ねぶち会」の開催について、医師会や地元の鶴翔会の世話役をしてきた瀧谷(姫路市)が連絡役を担当する。参加者は来年の再会を約束して散会した。

翌日の日曜は好天に恵まれたゴルフ日和である。椎名先生のお世話により、大崎先生と瀧谷が倉敷カントリークラブに集合した。ここ数年は参加者が減少したので、一組のパーティとなった。スコアは別としながら元気にゴルフを続ける楽しみを、来年の天気を占いながら期待した一日である(写真4)。



山麓会（昭和36年卒）

昭36 難波正義



「皆、八十路過ぎ、いまだ山麓」の会が、2018年10月20日、岡山の「奈々伊」で開催されました。19名の集まりでした。各自の近況報告を交え歓談し、2019年10月19日（土）、奈々伊での再会を約束して散会しました。

昭和57年卒 卒業36周年同窓会報告

昭57 伊達 勲

昭和57年卒の同窓会を平成30年11月24日（土）にホテルグランヴィア岡山で開催しました。卒後10年、20年、30年の節目に同窓会を行った後は卒後33年、そして今回卒後36年と3年ごとに行っています。年齢を重ねるにつれ、もう少し頻回に同窓会を開いて欲しい、という要望にお応えしています。

今回の幹事は、伊達 勲、土井原博義、田口勇仁、木村雅一、津川昌也、羽井佐 実、伊達零子、が務めました。祝日の金曜と日曜の間の土曜開催でしたが、2次会も合わせると48名の参加者で賑やかな会となりました。最初に集合写真を撮影しています。

会の冒頭には亡くなった同級生、恩師に黙祷をささげ、その後、乾杯の音頭を津尾佳典先生にとっていただきました。前回と同様、丸テーブルを6つ設け、それぞれに空席を2つずつ確保して、皆さんがいろいろな席に移動しやすいようにしました。今回は過去2回にスピーチをしていない16人の出席者に近況報告をお願いしました。これで過去3回の同窓会で、出席者のほとんど全員が1度はスピーチをしたこととなります。

とても話が弾んだようで、会の終わりには、今後は3年ごとではなく2年ごとに開催できないか、という意見も出るほどでした。2次会にもたくさんの方が参加され、大いに盛り上がりおりました。2年後か3年後か、また元気で皆さんにお会いできることを楽しみにしています。



第2回 平成4年度入学および 平成10年度卒業生同期会報告

平10 片岡 祐子

晩秋とはいえ暖かさが残る平成30年11月18日、平成4年度入学および平成10年度卒業生同期会をホテルグランヴィア岡山に於いて開催しました。前回平成24年開催時に「次回は5年後」とアナウンスしていましたが、満を持して（幹事がなかなか動かなかったという説も・・・）、卒後20周年を迎えた年に執り行うことになりました。会場との交渉や事前集金を安原隆雄氏、メーリングリスト作成や諸雑務を小川弘子氏、佐久川純枝氏が尽力して下さり、若干の書類作成を片岡が担当致しました。

学会、同門会等で多忙なシーズンでしたが、当日37人の同期生の参加がありました。近況報告では、部長、医長となり部下を指導している人、開業して地域貢献や事業拡大をしている人、次期教授を目指している人等々、それぞれのフィールドで活躍している話を聞くことができ、非常に刺激を受けました。またプライベートでも、趣味を再開した、スポーツ少年団の監督をしている、豪邸（多分）を建てた、出産したばかり、とこれまた各々充実した様子を垣間見ることができまし

た。しかしながら公私ともに変化があったにも関わらず、会話を交わすといい意味で（悪い意味でも？）あまりにも学生時代と変わってなくて、タイムマシンであの頃に戻ったような打ち解けた開放的な気持ちになることができ、やっぱり同期っていいな、としみじみ実感しました。そして個人的にはあまり容貌が変わっていない人が多い（特に女性）気がして、これには正直驚いた次第です。

卒後20年、勿論安泰な時ばかりではなく誰しも皆苦しい時期もあっただろうし、今もそれぞれに重さを抱えながら日々を送っていると思いますが、それでも医療もしくはそれに関わる仕事を続けられているのは幸せなことだと、同期の顔ぶれを見ながらしみじみ感じ入りました。

今回の開催は「誰かが教授になった時」としております。学内、学外、学部問いませんので、内定した際には速やかにご連絡ください。尚、情報共有を迅速かつ効率的に行うために同期メーリングリストの登録を推奨しております。<https://goo.gl/forms/Vcv7EbWLuU50NmAG3>にご登録をお願いします。

前回の同期会報告者は、「次回こそ素敵に年齢を重ねた姿をお見せしたい」と記していました。正にそうありたいですね。次はより多くの方にご参加いただけることを願っております。

それまでどうぞ皆様、お元気で過ごしてください。



支部だより

平成30年度兵庫県鶴翔会総会

医療法人 聖医会 佐用中央病院
林 充 (昭56)

平成30年10月6日(土)に兵庫県鶴翔会が西播支部担当で開かれました。兵庫県鶴翔会は西播地区、神戸地区、阪神地区、の3支部よりなり、順番に総会を各地区が交代で開催しています。本年度は西播地区が担当となり、姫路商工会議所にて午後3時より開催しました。参加者は、神戸支部からの山本満雄先生、青山裕一先生、梶本和宏先生、石井日出夫先生を含めて合計33名でした。台風25号が日本海より迫ってきた時と重なり新幹線に遅れが出たりしてヒヤリとしましたが、何とか事なきを得て開催できました。

総会は初めに昨年度亡くなられた兵庫県鶴翔会会員の岸田渉先生、江尻通磨先生、松浦梅春先生への黙禱が行われました。そしてまず西播地区会長瀧谷泰博先生より総会開会の挨拶がありました。その後、鶴翔会西播支部の新理事に姫路聖マリア病院院長の塩田雄太郎先生を選出し、続いて鶴翔会事務局長の妹尾様より「岡山大学の近況」をお話いただきました。岡山大学医学部創立150周年記念事業に関してや、現在の岡山大学の動向を出身高校などまで示され詳しくお話いただきました。

一般講演として姫路赤十字病院第一血液・腫瘍内科部長の平松靖史先生より「新たな時代を迎えた多発性骨髄腫の治療戦略～抗体薬治療～」とする講演をしていただきました。現在、脚光を浴びているオプジーボなどの薬を含めた現在の多発性骨髄腫の治療のその歴史、また高齢者医療のあり方などわかりやすくお話いただきました。

引き続き特別講演は岡山大学血液・腫瘍・呼吸器内科分野教授前田嘉信先生「ありふれた病気「がん」を治す：血液学からのアプローチ」と題し御講演してい

いただきました。先生は姫路出身ということをお話され、教室の研究テーマが移植免疫であり最近ノーベル賞を受賞された本庶先生が発見したPD-1抗体の話に触れられ、また臓器移植に伴う合併症のひとつである移植片対宿主病：graft versus host disease; GVHDと移植片対白血病(GVL)についての概略も述べられました。血液疾患に対する治療であるHLA不適合血縁者間移植の現状やご自身の研究でもあるTh17細胞を標的とした慢性移植片対宿主病治療についても詳しく説明されました。

また、厚生労働省は2018年2月14日にがん患者のゲノム(全遺伝情報)を調べて最適な治療薬を選ぶ「がんゲノム医療」を中心となって提供する中核拠点病院として国立がん研究センターの中央病院(東京・中央)と東病院(千葉県柏市)のほか、北海道大、東北大、慶応義塾大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、岡山大、九州大の各大学病院となり、4月から全国で進行がんの患者などがゲノム医療を受けられるようにし、一般的な医療として普及を目指す事となったこと、またゲノム医療に触れつつ、白血病などにみられる遺伝子異常の概略にふれ新しい治療薬の可能性について説明されました。

講演会後に集合写真を撮り、懇親会に移りました。前田嘉信教授のごあいさつの後、高木明一郎先生の乾杯のあいさつで会が始まりました。各自の自己紹介も行われ和気あいあいと親しい会となりました。

最後になりますが大変お忙しい中、前田嘉信教授、妹尾行恭事務局長様には懇親会まで参加いただき感謝致します。



平成30年度 鶴翔会呉支部総会報告

呉支部 支部長
木村眼科内科病院
木村 亘 (昭46)

平成30年10月25日呉阪急ホテルに於いて、岡山大学医学同窓会である鶴翔会呉支部の平成30年度総会が開催され、開業医・勤務医合わせて16名が参加いたしました。

総会では、支部長（木村 亘）挨拶後、今年お亡くなりになられた真鍋 欣良先生、沖田 稔先生2名の先生に哀悼の意を表して黙祷を捧げました。

その後、議事（会計報告）に入り、藤原 敬先生よりご報告して頂き、平成30年度の会計報告が了承されました。

このたびの総会では、鶴翔会事務局 事務局長 妹尾 行恭氏をお招きし、岡山大学の近況報告を拝聴しました。現在の大学の様子を伺うことができ、また、母校が懐かしく思い出され、とても有意義な時間を過ごすことができました。

総会に続いて行われた特別講演では、私が座長を務めさせていただき、呉市医師会 会長 玉木 正治先生による「－西日本豪雨災害を受けて－地元医師会としての対応」と題する講演が行われました。



講演では、今年、多大な被害をもたらした西日本豪雨災害後の地元医師会の活動報告を過去の災害被害の話をお話いただき、今後の課題についてもお話して頂きました。当時の状況や対応、災害への知識を得ることができました。

妹尾事務局長と玉木会長には、その後の懇親会にも出席していただき、今年は講師含め18名の参加でしたが、来年はもっと沢山の先生方に参加していただき、更に盛り上げていこうと語り合い散会しました。



平成30年度鶴翔会 山口県支部総会の報告

牧野 泰裕 (昭59)

山口県支部総会は気持ちよく晴れ上がった秋空のもと、国立病院機構岩国医療センター附属看護学校施設を使って11月11日（日）に開催されました。現在、山口県支部には谷本光音支部長（昭52）以下220名の会員がいます。当日の出席者数は42名で、卒業年次別には、昭和30年代の卒業生6名、40年代5名、50年代14名、60年代2名ならびに平成の卒業生が岩国医療センター初期研修医5名を含む15名でした。冒頭、谷本支部長の挨拶から始まり、庶務報告では会員動向（平成28年総数216名、29年219名、本年220名）と会費徴収率が28年87%、29年87.4%と比較的高い結果を維持し

ていることが報告されました。役員の交代としては、会計監査が毛利昌雄先生（昭36）から安光正治先生（昭58）へと引き継がれました。また、今年度も2名の先輩の逝去があり、清水義正先生（昭17）、三亀宏先生（昭43）への黙祷が行われました。

会計ならびに監査報告、次年度総会の案内と続き、最後に新入会員紹介となりました。この時が総会の中でも一番華やかで、初期研修医の先生方の自己紹介を聴いた後には盛大な激励の拍手が送られました。さらに、赤磐郡医師会病院院長を退職された川口憲二先生（昭49）が再び本年度から当支部に加わって下さいました。

総会の締めくくりとして、岡山大学血液・腫瘍・呼吸器内科学教授の前田嘉信先生により、「ありふれた病気「がん」を治す～血液学からのアプローチ」と題した特別講演が行われました。血液病学の第一人者である前田教授のお話をうかがえる貴重な機会です。全会員

が楽しみにしていたところです。マスタードガスに始まる抗腫瘍化学療法の歴史から始まって、教授ご自身のGVHDのご業績を絡めた最新の知見まで、分かりやすく興味をそらせない語り口で有意義なお話をいただきました。前田教授は、こちらも血液病学の泰斗である谷本会長の後任として伝統ある教室を率いて行かれ始めたばかりですが、拝見した印象はなんとも生き生きとしておられ頼もしく、教室のますますの発展を強く予感させるものでした。本当にありがとうございました。

二つ目の特別講演として、今年も同窓会事務局長の

妹尾行恭様より、「岡山大学医学部の現況」と題して、学部ならびに鶴翔会の近況報告をいただきました。たくさん輝くような実績や夢のある将来構想が語られ、興味深く時間を忘れて聞き入りました。

総会の後は、河野宏先生（昭32）の乾杯の音頭で和気藹々の懇親会となりました。前田教授や妹尾様にはお疲れの中、懇親会の最後までおつきあい頂きました。重ねて心より感謝を申し上げる次第です。最後に、山口・宇部医療センター院長の亀井治人先生（昭59）から締め言葉をいただき、本年も盛会のうちに総会を終えることができました。



鶴翔会福岡支部報告

高田 徹 (昭62)

鶴翔会福岡支部会が平成30年12月1日福岡市内の料亭稚加栄に於いて3年ぶりに開催されました。師走最初の週末にも関わらず9名の先生方に参加いただきました。

本年は55年以上の長きにわたって幹事を務められてきた金岡 毅先生（昭30卒）をはじめ、原田実根先生（第6代第二内科教授）、新たに福岡支部会員となられた谷原真一先生（平4卒）や伊藤英史先生（平28院）にもご参加いただきました。

福岡支部の幹事役は長年名簿の更新もなされていませんでしたが、新たに肥山淳一郎先生（平3卒）および谷原先生にご就任頂くことが承認されました。また、本支部会は福岡・佐賀支部の先生方へご案内していましたが、新幹線により九州圏内の時間的距離が短縮されたこともあり、次年度は隣接地域の会員の先生方に

もご参加のお声かけをすることで出席者一同の議決を得ました。

出席者全員に近況報告を頂き、またたくまに時間が経過し、盛会のうちに閉会となりました。岡山大学との関わりはご出席の先生方でお一人お一人異なるものの、伝統ある中四国の中核拠点としての近年の充実ぶりや先生方でなければ分かち合えないお話も数多く賜り、久しぶりに懇親を深める場となりました。



H30年度鶴翔会近畿総支部報告

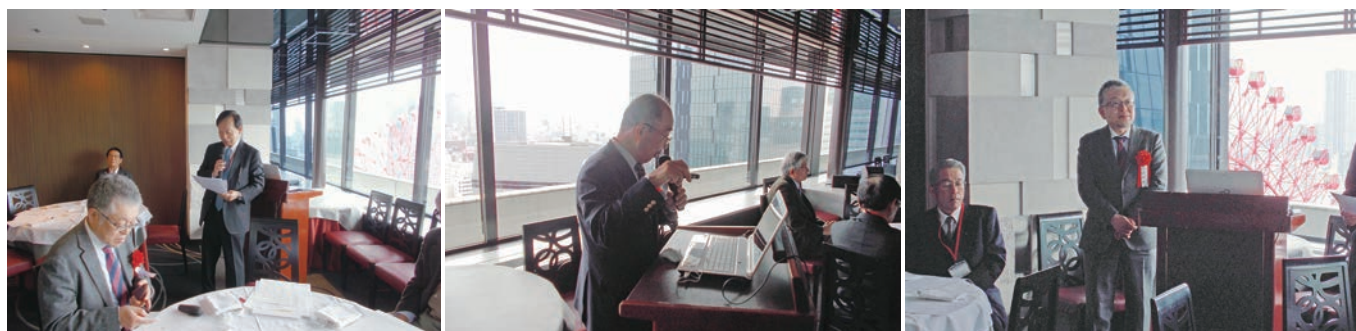
野上浩實(昭48)

平成30年度鶴翔会近畿総支部同窓会は平成31年2月17日(日)、阪急グランドビル27階、白楽天で開催されました。今年是小春日和の好天にめぐまれての開催となりましたが、高齢で体調不良の先生方、また研修医の先生は多忙な勤務もあり、参加人数は14名となりました。

谷口武先生(昭60)の司会の下、先ず本年度亡くなられた壺井富士男先生(昭24)、小林淳一先生(昭29)、徳永五輪雄先生(昭37)、小淵欽哉先生(昭43)、石野和志先生(詳細不明)、宮本裕先生(准)の6名に対し黙祷を捧げ、全員で御冥福をお祈りしました。次いで、近畿総支部長、野上浩實(昭48)、阪奈和支部長、谷口武先生(昭60)、京滋部支部長の波柴忠利先生(昭40)より支部報告があり、総会出席の増加のため、若手、中堅の先生の参加が必須で、最近参加された若手、中堅の先生に声をかけて参加を募るなどの提案がありました。H29年度収支決算報告の後、妹尾事務局長より岡大医学部および鶴翔会の現況について報告があり、榎野博史学長、金澤右病院長を中心に、多方面の実績を上げられていること、特に、がんゲノム医療中核拠点病院に指定され(日本全国で11病院のみ)、「向き合う」「つながる」「広がる」を合い言葉に中四国大学の橋渡しの拠点となることが重要と力説されました。また150周年記念事業として旧生化学棟改修工事が完成しつつあるとの報告がありました。次に、特別講演として、奈良県立医大病院、緩和ケアセンター長 四宮 敏章先生(平9岡山大学医学部卒業)より「がん治療における緩和ケアとは」をご講演頂きました。緩和ケアは患者本人だけでなく家族にも必要なこ

と、また症状の緩和のみならず、スピリチュアルケアの必要性を強調されました。大変興味深いご講演で、会員一同明日からの診療に大変有用であると確信しました。その後、全員で記念撮影を行い、安田正幸先生(昭43)の司会の下、中華料理に舌鼓を打ちながら懇親会に入りました。今年是小人数なので、全員に近況報告や、学生時代の話に花が咲き、またたく間に時間が経過し、来年の再会を約束して閉会となりました。今回の成果として、岡大医学部卒で近畿圏にて活躍している先生にご講演頂き、大いに盛り上がったことです。今後とも他の同門の先生方にも呼び掛けて、近畿地区の鶴翔会を盛り上げていきたいと思っています。末尾ながら近畿総支部(大阪、奈良、和歌山、京都、滋賀、三重)に在住で来年度参加の希望の先生がございましたら、下記までご一報下されば、来年度案内状をお送りいたしますのでよろしくお願い致します。

〒598-0043 大阪府泉佐野市大西1-5-20
谷口病院 谷口 武(鶴翔会阪奈和支部長)
TEL 072-463-3232
FAX 072-463-5714
e-mail : takeshi@taniguchi-hp.org



平成31年岡山医学同窓会 香川支部会 報告

青 江 基 (昭61)

44名+教授2名

2019年2月24日に、豊岡伸一教授、西崎和則教授のお二人を含めて46名の参加者により、恒例の高松市二蝶で岡山医学同窓会香川県支部総会および医学講演会が行われました。

まず、講演に先立って行われた総会では、森下立昭香川支部会長のご挨拶ではじまり、この一年間の物故者の先生に対して黙祷を行ったあと、総会に入りました。総会では大きな議事もなく、また、平成30年の会計も報告され、承認を頂きました。

引き続き、両教授の医学講演会に入りました。

呼吸器・乳腺外科学講座 豊岡伸一教授より、「がんゲノム医療中隔拠点病院について」と題して、一昨

年のがんゲノム医療拠点病院の厚生労働省への申請に関して、当事者しか知り得ないご苦労をお話いただきました。最終的に、11施設、(旧7帝大、慶応、がんセンター、がんセンター東、岡山大学)に決まり、日頃からの岡山大学での最先端の医学研究が高く評価された結果だと思われ、我々も大変誇りに思いました。

次に、耳鼻咽喉科学講座 西崎和則教授より、「聴覚と嗅覚」と題して、先生が長年取り組んでおられた聴覚障害への治療と、嗅覚障害への治療についてお話しを頂きました。人工内耳の研究や、再生医療を用いた嗅上皮再生など非常に興味深いお話でした。特に、聴覚障害が認知症を促進するというお話では、聴覚障害に対して補聴器を早期から装着すれば、認知症を回避できる可能性があるというものでした。そろそろ聴覚障害を自覚するようになってきている方々は、特に耳を澄ませてお話を聞き入っておられました。

お二人の教授の御講演をお聞きした後は、そのまま懇親会に移り、楽しい夜は今年も更けて行きました。

(文責 S61 青江)



岡山医学同窓会香川支部総会

平成31年2月24日 於 料亭二蝶

新聞より

岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など (2018.9～2019.3)

掲載年月日	媒体	見出し	備考		
2018/ 9/13	山陽新聞	24 岡山大学病院で50代男性が脳死	岡山大病院		
2018/ 9/15	読売新聞	30 まび記念病院 病棟再開	まび記念病院		
2018/ 9/16	読売新聞	29 地域の医療 取り戻す	西日本豪雨で浸水 まび記念病院 院内外来18日再開 会議室・理事長室 診療に活用	村上和春 (昭52)、村松友義 (昭58)、神崎寛子 (会員)	
2018/ 9/18	山陽新聞 MEDICA	11 医学教授に聞く 川崎医科大学脳神経外科学2	神経内視鏡活用の拡大	小野成紀 (平3)	
		12 市民の健康を守る ～診療科のチカラ～	早期手術が望ましい急性胆のう炎	佃 和憲 (平4)	
		13 肝細胞がん治療の進歩	カテーテル治療について	松田忠和 (昭49)	
		14 対策専門会議 岡山でシンポ	糖尿病腎症 重症化防ごう	どこでも安心の治療を	四方賢一 (岡山大病院新医療研究開発センター)
2018/ 9/19	読売新聞	14 病院の実力 胃がん治療	胃がん 内視鏡治療広まる	無自覚で進行も 定期検査重要	岡山大病院、姫路赤十字、倉敷中央、岡山済生会、津山中央、福山市民、福山医療セ、香川労災、四国がんセ、高知医療セ
		29 まび記念病院 再開	2カ月半ぶり 院内での外来診療		まび記念病院
	山陽新聞	33 まび記念病院 病棟外来再開	10科目対応 被災免れた2階使用	年内にも入院受入	
2018/ 9/23	読売新聞	25 病院の実力 岡山編 胃がん	抗がん剤で再発予防		岡山大病院、倉敷中央、岡山済生会、津山中央、倉敷成人病、岡山市民、おおもと、福山市民、福山医療セ、尾道市民、中国中央
2018/ 9/24	山陽新聞	24 50代男性に脳死肺移植			岡山大病院
2018/ 9/25	読売新聞	25 仮設診療 79歳の心意気	豪雨で自宅全壊医師	再開ひと月半 家族も効力	源 祐一郎 (昭39)
2018/ 9/26	山陽新聞	28 病気で変形 乳幼児の頭蓋骨	新治療法 自然な丸みに	データ集め細かく調整	岡山大病院
2018/ 9/28	山陽新聞	24 石井十次の功績を顕彰			岡山博愛会病院
		29 不妊、不育症に診療特化	生殖センター来月開設		岡山大病院
2018/ 9/30	山陽新聞	33 災害医療の教訓報告	日本医療マネジメント学会 県支部集会	吉備医師会3人	中尾篤典 (岡山大救命救急・災害医療)、森下紀夫 (会員)
2018/10/ 1	山陽新聞 MEDICA	12 市民の健康を守る ～診療科のチカラ～	産後精神障害と児童虐待		徳毛敬三 (会員)、
		働き盛りの人への健康講座	胃がんにならない、胃がんを落とさないために		石崎雅浩 (会員)
		13 肝細胞がん治療の進歩	薬物療法について		松田忠和 (昭49)
		14 肺の生活習慣病 -COPDとは-	タバコは百害あって一利なし		中田昌男 (昭60)
2018/10/ 3	山陽新聞	12 ノーベル医学生理学賞に本庶佑氏	がん治療を大転換		鶴殿平一郎 (岡山大免疫学)
2018/10/ 7	山陽新聞	32 乳がん検診啓発 あすコンサート			ピンクリボン岡山 (岡山大病院乳腺内分泌外科、岡山県医師会)
2018/10/10	山陽新聞	31 がん遺伝子の関係学	「ゲノム医療」紹介 岡山で市民公開講座		平沢 晃 (岡山大学臨床遺伝子医療学)
		乳がん正しく知り健診を	慈善コンサート 活動資金募る		ピンクリボン岡山 (岡山大病院乳腺内分泌外科、岡山県医師会)

掲載年月日	媒体		見出し		備考	
2018/10/15	山陽新聞	28	地域の医師が難病相談	県、岡山大病院に専門医サポートセンター	早期診断、適切な治療へ	岡山大病院
	山陽新聞 MEDICA	17	機能的脳神経外科の治療最前線	パーキンソン病の外科的治療		上利 崇 (平10)
		18	前立腺がん骨転移注意	患者や専門医呼びかけ		渡邊豊彦、荒木元朗 (岡山大病院泌尿器科)、勝井邦彰 (岡山大陽子線治療学)
		18	がんと生きる 人生に寄り添うホスピス	在宅療養支援の役割も	緩和ケア病棟開設20年	岡山済生会総合病院
2018/10/17	読売新聞	15	病院の実力 乳がん治療	乳がん 同時再建手術が増加	予防切除「強く推奨」学会が指針	岡山大病院、姫路赤十字、倉敷中央、おおもと、福山市民、四国がんセ
2018/10/18	山陽新聞	7	2.2%広がる障害者雇用 エリアの現場から7	個々の癖、こだわり把握を		中島洋子 (昭46)
2018/10/19	読売新聞	29	KYB免振改ざん 岡山市民病院不適合か	装置10本 市と病院、交換要求へ		岡山市民病院
2018/10/21	読売新聞	33	病院の実力 岡山編 乳がん	遺伝性 5～10%		岡山大病院、倉敷中央、倉敷成人病、岡山済生会、津山中央、おおもと、福山市民、福山医療セ、尾道市民、中国中央
2018/10/24	山陽新聞	4	モンゴル医師ら石綿疾患診断学ぶ	放射線画像使い		岡山労災病院
		26	肺がん予防へ禁煙支援	松岡良明賞 西井研治氏に聞く	早期発見にCT健診推進	西井研治 (昭56)
2018/10/25	山陽新聞	29	手術体験や見学 27日フェスタ			岡山医療センター
2018/10/26	山陽新聞	30	石綿疾患診断学ぶ	モンゴル医師ら研修		岡山労災病院
2018/10/27	読売新聞	31	弦楽四重奏10曲 患者らうっとり			岡山大病院
	山陽新聞	9	免振改ざん6病院でも	KYB 12県18件追加公表		愛媛県立中央病院
2018/10/29	山陽新聞	20	タウリン大量投与で抑制	難病「ミトコンドリア病」発作	医薬品承認へ手続き	砂田芳秀 (昭58)
		21	受賞糧に精進したい	松岡良明賞 祝う会で		西井研治 (昭56)
			子どもら手術、調剤体験	医療センターでフェスタ		岡山医療センター
2018/11/ 2	山陽新聞 MEDICA	13	がん治療最前線 犯人はゲノムの中に	パネル検査で候補薬探す	エキスパートパネル 治療法、説明巡り討議	平沢 晃、遠西大輔、富田秀太 (岡山大病院)
		15	機能的脳神経外科の治療最前線	ふるえとジストニア		上利 崇 (平10)
2018/11/ 3	山陽新聞	33	地道に研さん 各分野で貢献	命の維持 鉄関与証明		岡田 茂 (昭39)
2018/11/ 9	山陽新聞	35	新型インフル水際で防げ	県など合同訓練		岡山市民病院、松岡宏明 (昭60)
2018/11/15	読売新聞	32	復興へ希望のツリー			まび記念病院
2018/11/17	読売新聞	33	ハンセン病施設 登録文化財	国の文化審議会答申		長島愛生園、邑久光明園
2018/11/18	読売新聞	29	災害時医療情報のあり方を考える	岡山で研究会		村上和春 (昭52)
	山陽新聞	34	効果的な連携探る	防災意識向上策を発信		中尾博之 (岡山大災害医療マネジメント学)
2018/11/19	山陽新聞	20	患者情報どう共有	災害時対応 岡山で研究会		村上和春 (昭52)
	山陽新聞 MEDICA	12	働き盛りの人への健康講座	運動器の健康と充実した社会生活		依光正則 (会員)
		13	機能的脳神経外科の治療最前線	慢性疼痛の外科的治療		上利 崇 (平10)
		14	皮膚は大切 機能知って	アトピーには新薬も		浅越健治 (平3)
生活習慣病予防しよう	禁煙や運動、食事の見直しを		西大寺病院が公開講座	岡山西大寺病院、岡山労災病院		

掲載年月日	媒体		見出し		備考
2018/11/21	読売新聞	15	変形性膝関節症の治療	膝関節症 軽度なら運動療法	姫路聖マリア、西宮渡辺、神戸市立西市民、岡山医療セ、岡山労災、岡山旭東、福山医療セ、香川労災、済生会今治、松山市民、近森
2018/11/23	読売新聞	27	がん薬剤開発 企業と研究	早くて3年後臨床試験	岡山大中性子医療研究センター
2018/11/25	読売新聞	31	病院の実力 岡山編 変形膝関節症の治療	温熱療法で痛み緩和	岡山大病院、岡山医療セ、岡山労災、津山中央、岡山旭東、岡山済生会、竜操整形外科、笠岡第一、福山医療セ、尾道市民
				増える人工関節置換	
	山陽新聞	4	提言2018 選手生命縮める野球肘から球児を守るには	下肢・体幹の関節を強化	島村安則(岡山大運動器スポーツ医学)
2018/11/29	読売新聞	29	入院受け入れ再開	非常用電源整備	まび記念病院
	山陽新聞	1	医学部地域枠 22大学で2割超欠員	半数が未充足	岡山大学
		18、19	人材育成や治験 地方創世の道筋を		岡山大、恩賜財団済生会、岡山赤十字病院
2018/12/ 2	山陽新聞	27	明日から医療費後払い導入	会計待ち解消へ	岡山赤十字総合病院
2018/12/ 3	山陽新聞	22	視覚障害原因 緑内障最多裏付け	電子データ分析 精度大幅向上 高齢化で割合高まる	全国調査 白神史雄、森實祐基(岡山大眼科学)
	山陽新聞MEDICA	13	機能的脳神経外科の治療最前線	痙縮の治療	上利 崇(平10)
2018/12/ 4	山陽新聞	26	入院患者受け入れ再開	病棟電力回復	まび記念病院
2018/12/12	山陽新聞	30	ウイルス製剤×オプジーボがん治療効果アップ	複合免疫療法開発に期待	藤原俊義、黒田新士(岡山大消化器外科学)
2018/12/14	山陽新聞	30	がんゲノム検査初承認	保険適用で費用負担減	岡山大病院、倉敷中央病院
2018/12/19	読売新聞	31	病院の実力 肺がん治療	肺がん 早期は縮小手術も	岡山大病院、倉敷中央、四国がんセ、高知医療セ
2018/12/23	読売新聞	25	病院の実力 岡山編 肺がん治療	ロボット手術 保険適用に	岡山大病院、倉敷中央、岡山済生会、岡山医療セ、津山中央、岡山市民、中国中央、福山市民、尾道市民、山口宇部医療セ
				禁煙でリスク低く	徳田佳之(平10)
2019/ 1/ 3	山陽新聞	1	第77回 山陽新聞賞 地域への貢献たたえる		岡田 茂(昭39)、赤在義浩(昭58)
		20	山陽新聞賞 国際 医療発展を支える		岡田 茂(昭39)
		21	山陽新聞賞 社会功労 がん再発率減らす		赤在義浩(昭58)
2019/ 1/ 6	読売新聞	29	あゆむ5 西日本豪雨	医療の核 復興道しるべ	村松友義(昭58)
2019/ 1/11	山陽新聞	1	第77回山陽新聞賞贈呈式	道極め地域に貢献	岡田 茂(昭39)、赤在義浩(昭58)
		26	闘病中も仕事継続を	医師や企業担当者研修会	池田房雄(岡山大病院消化器内科)
2019/ 1/15	山陽新聞	1	食道がん腫瘍消失	ウイルス製剤と放射線治療併用	12人中8人 体に負担少なく 藤原俊義、白川靖博(岡山大消化器外科学)
2019/ 1/16	読売新聞	33	併用療法でがん消失	ウイルス製剤と放射線治療	藤原俊義(岡山大消化器外科学)
				まび記念病院全業務再開へ	
2019/ 1/20	山陽新聞	35	内視鏡支援ロボ・ダビンチ	肺がん手術保険診療に	岡山県内初、今月から 岡山大学病院呼吸器外科

掲載年月日	媒体		見出し	備考		
2019/ 1/21	山陽新聞 MEDICA	15	がん治療最前線 「針の先」狙う陽子線	医学物理士、医師と連携、精密な照射担う	脇 隆博 (平16)	
		16	働き盛りの人への健康講座	頸部痛と腰痛 –スマートフォン症候群って？	田中雅人 (昭63)	
		17	機能的脳神経外科の治療最前線	ニューロモデュレーションとリハビリの融合	上利 崇 (平10)	
		18	人工心臓手術体制整う	岡山県内初の「実施設」認定	重症患者 在宅療養可能に	榊原病院
			高度医療、効率運営両立へ 骨盤臓器脱の相談電話開設	GEヘルスケアと契約		倉敷中央病院 倉敷成人病センター
2019/ 1/23	読売新聞	13	病院の実力 肝臓がん治療	肝臓がん 分子標的薬に注目 内科的治療の選択肢増加	岡山大病院、姫路赤十字、姫路聖マリア、岡山済生会、津山中央、福山市民、福山医療セ、高知医療セ	
2019/ 1/24	山陽新聞	31	重要言語奨学金プログラム 国務省派遣先に	国立大初 米トップ学生に授業	岡山大学	
2019/ 1/26	読売新聞	31	医療功労賞に山崎さん	分娩立ち合い 3万例目標	山崎史行 (昭52)	
2019/ 1/27	読売新聞	33	病院の実力 岡山編 肝臓がん治療	4個以上は塞栓療法	岡山大病院、岡山済生会、津山中央、倉敷中央、岡山市民、倉敷成人病セ、福山市民、福山医療セ、尾道市民、中国中央	
				数値異常 再検査怠りなく	仁熊健文 (昭61)	
2019/ 1/29	山陽新聞	29	完全復旧住民の支えに	7カ月ぶり 来月から14科体制	まび記念病院	
2019/ 2/ 1	読売新聞	27	医療功労賞県表彰式	出産、今後も努力	山崎史行 (昭52)	
			まび記念病院 医療復興決意	機器など移動 今日全業務再開	まび記念病院	
2019/ 2/ 2	読売新聞	33	まび記念病院 全業務再開	7カ月ぶり 住民ら歓迎の声	まび記念病院	
			まびの人を支える存在に		村上和春 (昭52)	
	山陽新聞	27	7カ月ぶり全面再開	水没1階整備完了	まび記念病院	
2019/ 2/ 3	山陽新聞	29	「博士の家」に再生	昭和7年築 岡山医科大教授の元自宅	今日開所 住民ら集う場に 故津田誠次 (名誉教授)	
2019/ 2/ 4	山陽新聞 MEDICA	12	心臓大血管の最新治療～在宅へ	冠動脈ステント治療について	廣畑 敦 (平8)	
			人生100年次代を健康に生きる	関節リュウマチと骨粗しょう症	原田遼三 (平19)、那須義久 (岡山大運動器医療材料開発講座)、西田圭一郎 (岡山大整形外科)	
		13	肺がん治療語り合う	医療者と患者が連携 最新の知見や本音	岡山大学病院	
2019/ 2/20	読売新聞	15	病院の実力 前立腺がんの治療	前立腺がん 全摘手術か放射線	岡山大病院、姫路赤十字、神戸市立西市民、倉敷中央、倉敷成人病、広島市民、福山市民、岩国医療セ、愛媛県立中央、四国がんセ	
	山陽新聞	1	ミトコンドリア病薬承認へ	砂田教授 治験で国内初	砂田芳秀 (昭58)	
2019/ 2/23	山陽新聞	36	山形で6歳未満 11例目脳死判定	岡山大などで移植	岡山大病院	
2019/ 2/24	読売新聞	31	病院の実力 岡山編 前立腺がん治療	放射線照射 精密に調整	岡山大病院、倉敷中央、倉敷成人病、岡山市民、津山中央、広島市民、福山市民、福山医療セ、尾道市民、岩国医療セ	
2019/ 2/25	読売新聞	33	脳死肺移植100例目成功	10歳未満女児へ	岡山大学病院	
	山陽新聞	31	脳死肺移植100例目実施			
2019/ 2/27	山陽新聞	14	風疹予防接種 子ども守れ	社会的リスク軽減を	国富泰二 (昭41)	

掲載年月日	媒体		見出し		備考	
2019/ 3/ 1	山陽新聞	37	長期療養患者の就職支援	ハローワーク岡山 がんや糖尿病対象	出張相談窓口 4病院に増	岡山大病院、岡山済生会、岡山赤十字、岡山医療セ
2019/ 3/ 5	山陽新聞	34	重度障害者向け人間ドック開始	特性踏まえた技術と設備		旭川荘
	山陽新聞MEDICA	17	院長に聞く 心臓病センター榊原病院	「病客」を安全に元の生活へ		榊原 敬（会員）
2019/ 3/ 6	山陽新聞	30	岡山県議会 2月定例議会質問	センサー杭モデル活用 斜面の崩落検知		小林孝一郎（平14）
2019/ 3/13	読売新聞	16	第47回医療功労賞中央表彰	地元で 海外で 健康守る	在宅障害児 巡回相談9000件	江口壽榮夫（昭33）
2019/ 3/17	山陽新聞	33	新天皇即位10連休 岡山県内大規模病院	通常診療2、3日検討	前後の大混雑回避図る	岡山大病院、倉敷中央、岡山済生会、津山中央、重井医学研究所附属
2019/ 3/18	山陽新聞MEDICA	11	院長に聞く チクバ外科・胃腸科・肛門科病院	大腸肛門治療でQOL維持		竹馬 彰（チクバ外科・胃腸科・肛門科病院理事長）
		12	心臓血管の最新治療 ～在宅へ	注意すべき不整脈		伴場主市（平8）
		14	岡山「晴れやかネット」	診療所の利用促進へ 患者情報共有多職種参加で地域連携		氏平 徹（会員）
			県北初のダヴィンチ導入	前立腺がん 当面の対象		津山中央病院

【お断り】 媒体に偏りがあり、また、見落としている記事もあるかと思われませんが、何卒ご容赦ください。鶴翔会会員の先生方におかれましては、岡大医学部・岡大病院・鶴翔会会員に関する新聞・雑誌の記事の情報をお寄せいただければ幸いです。

歴史の広場

岡山大学附属図書館医学部分館・資料室物語⑥

中浜東一郎〈前編〉

公益財団法人岡山県郷土文化財団
主任研究員 万城 あき



中浜東一郎肖像写真(複写)

岡山大学医学部資料室には、岡山県医学校の一任教諭で県病院一等医であった中浜東一郎(1857～1937)の肖像写真のほか、複写ではあるが明治17年(1884)の岡山県医学校第一回卒業式の祝辞、石川県金沢病院長兼甲種医学校長一任教諭の俸給、石川県への転任に際しての送別の辞などがある。

中浜が岡山にいたのは明治15年(1882)2月から明治17年11月までのわずかな期間であるが、意外にも中浜に関する資料が集められており、ジョン万次郎の息子という以上にその人物に興味を湧いてくる。今回は送別の辞で熱心な指導と公平な人柄が讃えられた人物像を『中浜東一郎日記』(富山房 平成7年(1995)完結)から少し掘り下げてみたい。

生い立ち

父は中浜万次郎。土佐(現、高知県)の漁師で漂流の後、無人島にいたところをアメリカ船に救われ、アメリカで航海術などを学び帰国。開国にあたっては幕

府や土佐藩に召し抱えられ、通訳や航海術、造船などで活躍したジョン万次郎である。東一郎は、安政4年(1857)、万次郎が幕府直参の時に誕生。英語は父から学んだようだが、武家の子としての環境からか、和歌や漢詩の素養も身につけたようである。5歳の時に生母がはしかで死亡し、父は息子に医学を学ばせようという気になった、と東一郎の三男中浜明氏が『中浜万次郎の生涯』(富山房 昭和45年(1970))に書いている。

また、明氏は、丸山博元大阪大学医学部教授に「明治・大正期の文化史的な意義が充分あるから、ぜひとも完本として世に問いたい」と説かれ、東一郎の日記を『中浜東一郎日記』(以下は『日記』と略す)として刊行した。翻刻された日記は主に東一郎が34歳の明治24年(1891)から80歳で亡くなる昭和12年(1937)までの記録で、明治初期から日本の医学界で重鎮として活躍した医師の記録であり、近代の歩みを知る貴重な資料でもある。

この『日記』には、森林太郎(鷗外)、北里柴三郎など当時の医学界をリードした人物、写真師として名を残す小川一真、将棋の坂田三吉など意外な人物名もみえる。この『日記』から医師としての歩み、人生観などを紹介したい。

医師としての出発 医学者・教育者

中浜東一郎は、明治5年(1872)15歳で横浜十全病院で医師セメンズの通訳を兼ねて医学を修め、翌年第一大学区医学校(現、東京大学医学部)に入学し、ドイツ医学教師ベルツらに師事。この後、国の方針としてドイツ医学の推進に尽力し、明治14年(1881)、東京大学医学部を卒業。森鷗外が同級生で、後にドイツ留学や医師としても関係が続く。

卒業後、福島県須賀川医学校長となり、明治15年2月、25歳の時に岡山県医学校一任教諭兼病院一等医と



上段：中浜東一郎の辞令(複写)



上段：中浜東一郎の卒業式祝辞、下段：送別の辞(いずれも複写)

脚注：この記事は大塚ホールディングス(株)発行「大塚薬報」(2017年10月号/No.288、11月号/No.289)より許可を得て転載

して赴任する。岡山にいたのはわずか2年だが、その間、石坂堅壯が不明の寄生虫と報告していたものを他の教師とともに肝臓ジストマと突き止めた。この後も岡山との縁は続いていくのだが、それは次回としたい。明治17年11月、石川県金沢病院長兼甲種医学校長一等教諭として転出する。

内務省の官吏として

明治18年（1885）、内務省衛生局の局長長与専齋の命でドイツ留学し、陸軍の森 林太郎（鷗外）らとミュンヘン大学のペッテンコーフェルのもとで衛生学を学ぶ。明治22年（1889）に帰国し、内務省衛生局勤務を命じられ、東京衛生試験所所長に就任。コレラ、天然痘の実地調査、防疫対策の第一線で活躍し、明治24年8月には医学博士となる。

明治24年8月18日から始まる『日記』は、西日本・九州地方のコレラ対策から始まる。

各地のコレラ状況を現地で確認し、隔離と予防を指示したほか、貧しい娼妓が病院に入るとその診察代がすべて借金になり、気が変になった実態を見た。貧者ほど伝染病に倒れ、また広がり、多くの人が死に至る様子を見て、無償で医療を受けられる制度仕組みが必要と考えている。

東一郎は衛生学を専門としたが、明治29年（1896）10月に、ソウルで行った衛生演説会の内容が『日記』に貼られた新聞切抜きに次のようにある（旧字、旧かなは現代表記にし、適宜読点を入れた）。「(前略)衛生は即ち人の健康を保護し及び之を催進するの謂いなりと断定し、夫れより衛生学は医学にあらず、国家学なりと論じて、斯事たる決して独り医師に放任すべきにあらず、政府人民共に力を尽くすべき要務にして人民健康ならずんば国家富強なる能わず（後略）」と述べている。同地の視察ではオンドルが最も衛生に利あると感じ、後に日本でもオンドルの仕組みを紹介している。

このほか、医術開業試験で日本各地に出張し、出張先では必ずといっていいほど衛生について演説会が開かれた。伝染病の流行地での実地指導などでは、責任感とともに体力的にも精神的にもかなり強壮な人物が想像される。明治29年4月、医術開業試験委員長職を最後に官界から引退し、明治生命保険会社診査医長に就任した。また、内閣恩給局常務顧問医、専売局嘱託員、中央衛生委員に推挙されるなど、多忙な日々を送っている。

ペスト菌をめぐって

明治32年（1899）11月に神戸で発生したペストをめぐっては、北里柴三郎とのやりとりがいろいろな研究でも取り上げられているところである。

森 鷗外「北里と中浜と」にみる二人の姿には、職務、医師としての強固な信念と性格の差がうまく描かれているので少し紹介したい。これは、香港で北里が発見したペスト菌ではなく、フランスのエルザンが発見した菌が真正のものであったという報道を受けて、明治32年12月2日の読売新聞「茶ばなし」に掲載されたもので、『鷗外全集』33巻に所収されている（旧字、旧かなは現代表記にした）。

『日記』では、11月13日、神戸にペストが発生し、16日に大学の緒方正規と中央衛生会から東一郎が神戸へ出張となった。18日に、「エルザン菌」をペストとするか、北里のペスト菌が真正かということを確認中、緒方が純粹培養した中に「エルザン菌」を確認した。北里は、「少しく赤面しながら予（東一郎）に対し、「ペスト」患者の水脈腺中にエルザン菌を認め殆ど純粹培養なり、予が香港にて調査したるものは皆末期の患者にして敗血症を起したるもののみなれば血中に其菌を見たれども、今回初期より患者を視て其然らざるを認めたりと云う」。これを受けて21日に、「ペスト病毒はエルザン菌なる事を確定し北里氏も同意したり」と内務大臣と長与中央衛生会長などに打電した、とある。

このペスト菌はエルザン菌とするという決定について、森は「ペストを診断するにはペスト病原菌を明知せねばならぬから、緒方中浜が北里のために不利益な事を公言したのは、公衆衛生上に至当な仕方だということには、誰も異議はあるまい」、「北里と面談した上にこれを公にしたのは、どの方面から見ても非難すべきところは無い。その上此事を公にしたのは、却って北里のためにも至極良い」と述べている。

また、世間では何かと対立しているかのように見えている二人だが、その境遇の違いについてドイツ留学した先で学んだ学問の違いを次のように指摘している。「北里が細菌学という当時萌芽^{めぼえ}の新学科を修めたのに、中浜は主に衣食住の衛生と南独逸に所謂流行病学とを修めたからで、境遇の然らしむるところに過ぎぬ。併し境遇は兎も角も、北里の功績があると中浜のそれが無いとは、早く両人が欧州に在る時から、世間と我政府との二人を待つ上に軽重あらしむるに至ったのである」。

そして、決定的には二人の性格の差である。「北里という男は意志の強い、どっしりした、少し小憎らしいところのある、頗る処世の才に長けた男だが、己は多少

此男を好いて居る。中浜という男は才子らしい、いつも忙しそう、付合って見れば存外無邪気で、先ず処世には迂拙な男だが、己は又多少此男をも好いて居る。

つまり、この二人は「人の健康を保護し及び之を催進する」という理念においては、同じ方向を向いていたが、自分の専門とする分野と性格の違いがいろいろな憶測を呼んでいるように見受けられる。ペスト菌の問題を含め、定説となっているものへの疑念、諸説あるものの再検討、建設的な批判と主張を繰り返して科学は前進することを示している。

性格の差や物事の進め方の違いから、『日記』に個人的な感情、怒りが書かれている部分もあるが、それが仕事や人間関係に直接的に影響してはいない。事実、東一郎の長男が亡くなった時、一番に弔問に訪れたのは北里であった。中央衛生会や様々な委員会の運営、東京市医師会の設立などでは思いのほか協力し推進している姿もある。仕事の場面では、常に冷静に、どう進めば理想とするところに到達できるかを考えて行動している。

明治34年(1901)からは日本保険医学会の前身、日本保険医協会の初代会長に就任し、昭和5年(1930)7月まで約30年にわたって務めた。

人間・中浜東一郎

英語は父から学び、ドイツ語は学校でベルツに師事したことから語学はかなり堪能であったことが知られるが、明治25年(1892)にはベルツの訳本校正をし、明治28年(1895)3月には日清戦争終結の交渉に来日した李鴻章が暴漢に襲われ怪我をしたため、内務省から派遣され治療にあたった。その時の李氏の随行員が「中浜博士は英・仏両国の語に通ずるを以て特に都合宜しかりし」と語っている。

性格では、公共の場で人の迷惑を顧みない行動への批判、自宅の建築など日常のことでも約束通りに物事が進まないことへの憤りとそれを筋立てて説明し完遂させようとする几帳面な姿も『日記』にある。

家庭では、妻とは一度は離縁を考えるほどの怒りを覚えた事件があったようだが、軽く考えてはいけなさと自重する。自分の思い通りでない妻の行動に「愚物」とつぶやいたりもする。それでも一生を添い遂げた。二人は三男四女に恵まれ、娘の嫁ぎ先は自ら探し、嫁姑問題で悩む長女を諭したり、子どもを亡くし精神不安定になった三女の心に寄り添い励ましている。しかし、長男と次女を熱病で失うのである。次女危篤の報せを受けた時、彼は京都におり、もう無理と考えて帰るまいかと思ったが、これが最後かとも思い直して帰

京し、何日も徹夜で看病し、最期はひざの上で看取っている。当時、最先端の技術・知識を持った医師でも、幼子をあえなく失ってしまう当時の状況がわかる。日常の衛生的な生活、予防をさらに考えたのではないだろうか。

また、父の縁でアメリカフェアヘブンの父の恩人たちと交流し、ルーズベルト大統領の曾祖父が父を助けた一人だったなど数奇な縁もあった。時代がもう少し早く、父が漂流もしなかったら、土佐の漁村の子としてその

一生を終えていたかもしれないが、時代の変革の中でその才能が大きく花開いた人物の一人といえよう。父とは最期まで一緒に暮らし、高知に父の記念碑が建てられることに協力し、除幕式にも招かれている。また、昭和10年(1935)には『中浜万次郎伝』も編纂している。

晩年には自分ががんと知り、自分なりに最期を覚悟していく姿は、医療の最先端にだけに絶望も深かっただろうが、理性的に病と向き合っている姿もある。

『日記』からは、徳川公爵家から岡山の教え子、古い友人たち、矢野恒太、馬越恭平など事業関係の人々、趣味の関係など多彩な人脈があり、どの人からも慕われ頼りにされている人物像が浮かぶ。

北里、矢野の知名度に比べれば、知る人ぞ知るという存在ではあるが、時代の寵児となった人々のそばでしっかりと自分の役割を果たしてきた人物であった。明治から昭和初期の激変する時代を、医学教育、中央官界、民間の衛生と医療を生涯の仕事として貫いてきた医師の姿とともに、教育者、家庭人としてまっすぐ前を向く雄々しい姿がある。資料室にある資料は数少ないが、そのわずかな中から、大きな功績、足跡に思いをいたすことができる。

【参考文献】

- ・『中浜東一郎日記』(富山房 1995年完結)
- ※中浜東一郎の履歴は『日記』の解説によった。
- ・『岡山大学医学部百年史』(其編集委員会 1972年)
- ・『鷗外全集』33巻(岩波書店 1974年)

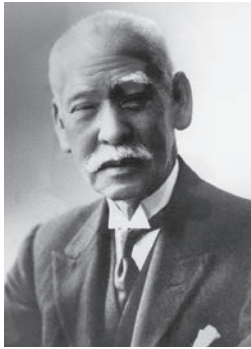


贈正五位中濱萬次郎翁記念碑
碑の文字は徳川家達公爵に東一郎が依頼して揮毫された。
(高知県土佐清水市観光商工課 提供)

岡山大学附属図書館医学部分館・資料室物語⑦

中浜東一郎〈後編〉

公益財団法人岡山県郷土文化財団
主任研究員 万城 あき



中浜東一郎（1857～1937）の
医師としての活躍、また人物像
については前回紹介したところ
である。

岡山大学医学部資料室には、
中浜東一郎自身に関わる資料
（複写）のほか、医学校で教え
た学生、岡西亀太郎の辞令など
もある。『中浜東一郎日記』（富
山房 平成7年（1995）完結）
には、その名が見えることか
ら、今回は日記に記録された岡山とのつながりを少し
掘り下げてみたい。

中浜東一郎と岡山の人々

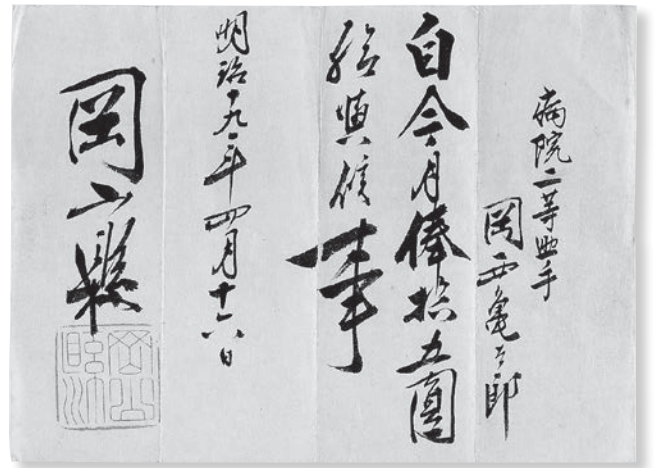
東一郎の岡山での活躍を知る資料は乏しく、資料室
のものも複写の状態でおそらく医学部の歴史を知る
資料として収集されたと思われる。その一つ、学生た
ちの送別の辞には、行き届いた指導で、好き嫌いや偏
りがなく、生徒は皆その徳を仰いだ、先生と別れるの
は赤子が父母と離別するようなものだとあり、学生に
親しく慕われる教師像がうかがえる。

しかし、『中浜東一郎日記』（以下は『日記』と略す）
からは、東一郎と岡山の関係がここで途切れたわけ
ではなく、医学校や岡山で親しくしていた人々とは亡く
なるまで交流が続いていたことがわかる。『日記』に

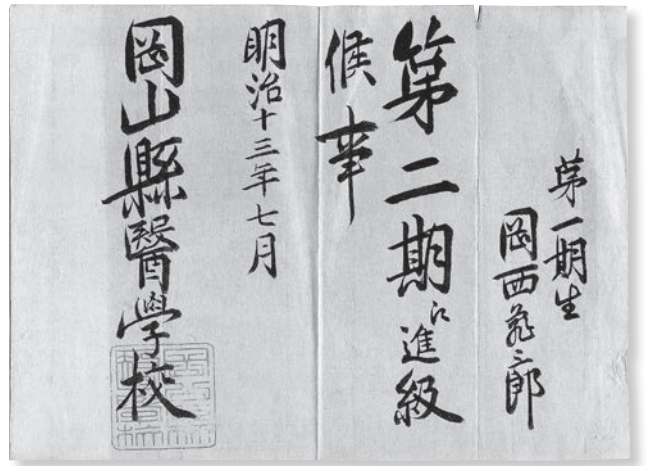


上段：中浜東一郎の卒業式祝辞、下段：送別の辞（いずれも複写）

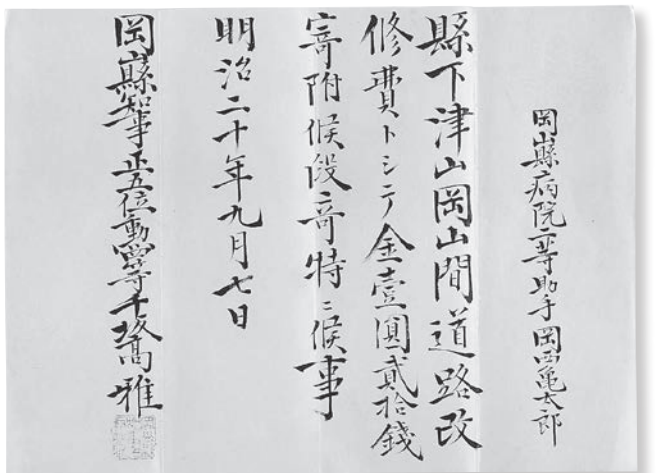
名前が散見する当時の学生、岡西亀太郎の辞令や卒業
写真が東一郎の資料の付近に置かれていることにも意



中浜東一郎の教え子 岡西の辞令、進級証などがある。



岡西亀三郎となっているが、亀太郎のことか。



『岡山市史』4巻（昭和13年（1938））には、岡西亀太郎（1863～
1930）は医術の学徳に優れ、漢学や詩賦、書道にも秀でてい
たと評されている。

（岡西の資料はいずれも岡山大学医学部所蔵）

味がありそうである。岡西は、東一郎が岡山に来ると親睦会に顔を出し、季節の贈り物もしている。

また、『日記』には医学校校長の菅之芳はもちろんのこと、岡山の書家石津大嶼^{たいしよ}とその子息たちなど町の人々と親しくつきあっていた様子がある。石津家からは、多年にわたり、岡山の名産、漬けあみ、鯛の浜焼き、白魚、桃などが贈られ、返礼は東京の海苔を自分で見立てて送る律儀な一面が見える。

岡山来訪と旧宅

岡山には明治25年(1892)4月の出張の通りがかりや明治27年(1894)8月の赤痢巡視などで9回ほど訪れている。また、明治25、26年と続いて起きた洪水や昭和9年(1934)の室戸台風での水害などにも心を寄せ、新聞を切り抜いて日記に残し、石津家に見舞いなどを送っている。

このうち、明治26年(1893)10月、岡山に洪水があった後の来訪では、被害状況の巡視をした時、偶然「夫婦橋」のたもとに出て、旧宅のことをなつかしんで書いた一文がある。

「旧に変わらず、瓦石、門前の樹木、庭の池は十年前に異ならず。

来て見れば昔しかはらぬ草のやの
はかなき人のあとぞかなしき
訪ひなれし草のいほりを来て見れば
恋しき人のをもちげもなし」

誰か想う女性がいたのか、と思わせる歌である。しかし、岡山赴任時にはすでに妻がいたので、その真意はわからないが、人を恋う気持ちが伝わる歌である。この『日記』は、あまり感情が入っていない記録だが、その中であっては珍しい記述である。

もう一つ、東一郎の住居に関しては、明治17年(1884)



明治16年「備前国岡山後樂園真景図」(部分)

明治17年(1884)に後樂園が岡山県に譲渡された後、北の一角にあった還故や奉行屋敷は県高官の官舎となった。

(岡山大学附属図書館所蔵)

10月31日の「山陽新報」(現、山陽新聞)に「後樂園から転居」という通知が掲載されている。後樂園に住居がある、というのは、今では不思議なことだが、明治17年3月に池田家から後樂園が岡山県に譲渡されてからしばらくは、北の一角にあった奉行屋敷などが岡山県の官吏の官舎となっていたのである。その一角でも「還故」と呼ばれる建物は殿様の使った建物で、ここには知事が住み、その他の屋敷に県の高官が住んでいた。その一人が東一郎であった。ここは前述の「夫婦橋」前の旧宅ではなさそうだが、かなりの高待遇であったことがうかがえる。

岡山医学校と中浜東一郎

岡山の医学校校長菅之芳との密なつながりも『日記』から読み取れる。菅が上京時には必ず面談し、明治32年(1899)に解剖学の教授が欠員になった時は、切実な相談をうけ東京帝国大学医科大学に掛け合って教師を紹介している。

大正2年(1913)1月に、菅が3月で辞職したいので、後任としてきてくれないかという相談があった。当時、岡山医学専門学校では菅が教授桂田富士郎を休職させたことをめぐり、教授、学生間の動揺が学生のストライキにまで発展するという事件があり、菅の進退問題にまで広がりを見せていた。東一郎は、医学教育の志はあると答えたが、しばらく静観することになった。5月になり、菅が辞職を6月初旬にしようか、9月にしようかと悩んでいると言ってきた。東一郎は、辞任の意志は周知されているので、いつ辞しても大差ないのではないかと答えた。しかし、菅の追い込まれた立場と気持ちを察してか、5月31日に東京帝国大学医科大学に行き、小金井良精に面会し、「菅が7月に辞任するので、彼の後を受けて、医学教育と学術上の研究をしようと考えている。東京の病院は閉じ、又は売却するのも厭わない」と述べたところ、小金井は大いに賛成し、「文部次官に後任者がいるかどうかを聞き、もしまだ後任者がいない時は東一郎を推薦しよう」と言った、とある。その後、千葉医学専門学校の筒井八百珠^{やおじゅ}が校長・病院長となって赴任しているので、この願いは不調に終わったようである。

菅は6月11日に辞表を提出し、7月に受理された。大正3年(1914)12月に菅が死去したことを知ると、「氏は予の友人にて明治拾五年より交はり深かりき。気の毒の至なり」と書いている。家族以外では、その死を悼む文言が多いほうである。

「医専・県病院祝賀会」への出席

大正7年(1918)4月13日には、岡山後楽園で開催された岡山医学専門学校30年、県病院40年の祝賀会と岡山医学同窓会発会式に出席している。同窓会では、大学への昇格をめざし、図書館の整備を決議した。宴会後は、菅家、石津家を来訪し、石津大嶼の墓参。

翌日の県会議事堂での同窓会発会式では保険医学に関する演説をし、午後からは京都帝国大学総長荒木寅三郎の「旧第三高等学校生理学教室を懐古す」、桂田富士郎の「病原としての「スピロヘータ」及び之に由来する疾病」などの記念講演があった。

この日、東一郎は故難波立愿(難波抱節の息子 経直。漢方医で、父 抱節と同じ立愿を襲名)の35年祭に出席、懐旧談を地元新聞の「山陽新報」に話している。話のおおよそは次のようなものである。「難波翁は漢方医としての大家で、長与専齋も一目置いていた。なかなか頑固ではあったが、西洋医学への移行はあきらめず、積極的に新知識を普及するため、清野 勇、中浜東一郎とも親しく交際した。自分の門下生に両氏の講話を聴講させ、それがすむと御馳走をしてその労をねぎらった。しかも自らが料理をし、くらげの味噌汁とか、鯨の陰莖は未だに忘れられぬ、云々。40年も前の懐旧談に門下生も感服した」。

ここでは紹介しきれない岡山の友人、知人とのやりとりも、どれもとても楽しそうに書かれている。東一郎にとっての岡山は、第二のふるさとと言ってもいいくらいに密なつながりでもって登場するのである。

再度 中浜東一郎とは

『日記』の刊行を促した丸山 博氏が、あとがきで14項目にわたり東一郎の人物像を分析している。それは、高い語学力。ドイツのペッテンコーフェル晩年の弟子として明治初期の衛生学勃興の地盤づくりに東京帝国大学出身のエリート官僚として誠実にその職責を果たしたこと。伝染病の防疫に精力的に奔走し、現地警察官と一緒に超人的な活躍をしたこと。また、地方巡視の時は「衛生講演会」を開き、自らが啓蒙に奮闘する教育者であったこと。保険業の明治生命の保険医として長年にわたり勤務したこと。東京衛生試験場所長として種痘のワクチン造りから、ツベルクリンの治療効果にいたるまで幅広い学識と実験指導能力を発揮したこと。ペスト菌問題で北里らの主張を改めさせたことは彼の真面目さを物語っている。また、子煩悩な父。趣味人。メモ魔。数字に明るい。明治の医人として生き抜いた晩年には、がん告知問題を考える十分な記録を残したこと、などである。

これらに加えて、岡山の人々との交流からは森 鷗外のいう「無邪気」な姿、信義にあつい人物像も垣間見える。また、和歌や漢詩が好きだったと前回紹介したが、明治26年11月、36歳の時の福井県での開業試験では、四角四面に真面目なのではなく、ユーモアのあ一面をのぞかせている。

「一婦人出席答案書佳良なり依て、
佳人の試験場に出るを見て
日の本のこころゆかしきたおやめが
けふのこたへを何とかくらん
又多数男受験者の対策不良にて
落第するの多かるべきを見て
今ぞしれ学びの道の程遠く
こころ得とげぬ秋のいふぐれ」

この時の受験者は前期後期あわせて500人ほどで、そのうち及第となった者が45人、うち合格承認証を下付された者は9人であった。当時の開業試験の厳しさがわかると同時に、地方では岡山の医学校が唯一卒業と同時に開業できたことは、かなりレベルが高い授業が行われていたことを示すものであろう。

最後に、彼が若い頃から気にかけていた事項を挙げたい。昭和6年(1931)6月に、長崎県の医師が墮胎罪で有罪となった件に関して東一郎は、悲惨な状況にある娼婦が妊娠してそれに同情して墮胎したという事情は、妊婦・新生児・産婦などを保養させ治療する途が不十分で、社会政策上の欠陥があるため、このような国法を犯すことになったもので、むしろ貧民救助のために施したものだ。有罪と宣告を受けたのだから、行政処分は不問にするべき、と論じたが、賛成者はいなかった。

また、大阪の医師が8人を収賄して娼妓の入院を見遁した件は、入院を回避するのは設備も不十分で、治療も私費を要するため病院のあり方を見直すよう提議した、とある。

かつて伝染病の現地巡視で感じた貧者の救済策はまだまだ途上であり、社会の片隅で苦しむ人々へ向けたあたたかいまなざしも見遁してはなるまい。

岡山大学医学部資料室には、学生が送別の辞で著した公平無私で父母のような愛情を受けた学生たちの資料も同時に保存されている。

【参考文献】

- ・『中浜東一郎日記』(富山房 1995年完結)
- ・『岡山大学医学部百年史』(其編集委員会 1972年)

医師養成の歴史と岡山大学医学部 —その2—

昭41 棕野 洋

アメリカ医学への転換と日米の二人

昭和20年（1945）秋から準備され、昭和21年（1946）11月3日に公布された憲法の第25条には、「第1項 すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と、「第2項 国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」がある。第1項は森戸辰男らの起案によるが、第2項はGHQ（General Headquarters）の米軍軍医クロフォード・F・サムス大佐（写真）の起案と言われている。国民には生存権があり、国には生活保障の義務があると規定する第25条は、人権、医療、福祉、教育、年金などいろいろな分野で戦後の日本人の生活に大きな影響を与えることとなった。このサムス大佐を局長とする、GHQ公衆衛生福祉局PHW（Public Health and Welfare Section）では、終戦直後の9月から、我が国の保健・衛生・防疫・福祉・国民生活・衣食住・衛生行政等の調査を開始し、日本の公衆衛生の改善には、医学教育の改善が必要であるとの結論に達した。医師の養成については、大学レベルの教育と昭和14年（1939）から始まった不十分な医専レベルの2種類の教育が行われており、国家試験がなく、終戦時の医師77,000人中48,000人が医専の卒業生であったこと、昭和20年（1945）の卒業生の61%が医専の卒業生であったことが示すように、過半数の医師が不十分な教育により養成されていること、公衆衛生教育が不十分なこと、7割が暗記中心の講義で、実験や臨床実習が3割に過ぎないという医学教育等が特に問題とされた。これを改める必要があるとの結論だった。



C・F・サムス大佐

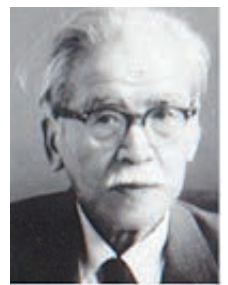
こうして昭和21年（1946）2月、GHQによりアメリカ医学への転換が求められ、GHQ側と日本側のメンバー（文部省、厚生省、日医、国立大学、私立大学等）による医学教育審議会が開かれ、医学教育改革の検討が行われた。大学と医専の2本立て教育の廃止、医学部進学前に一般教育を義務付ける、インターン制度の実施、医師国家試験の実施等がGHQより求められた。

医学教育審議会での検討を受けて、昭和21年（1946）4月、文部省（大臣安倍能成）は医専を廃止し、一定の基準に従って、医科大学に昇格ないしは廃校とする。女子医専については男女共学の医科大学昇格にするか、大学昇格が不可能なものは廃校ないしは厚生専門学校（看護婦養成）に転換し、原則として女子の医科大学は認めない、という改革案を打ち出した。

サムス大佐は、23才で医学部に入学した自身の経験から、18歳という若い年齢で、人の命を扱う医師への道に進む事を決めさせるべきではない。人間として一定の教育を受けた上で、医学の専門家としての教育を受けるべきだ、との信念を持っており、学士になってから医学部進学を決めるべきとして、8年制医師養成教育案を強力に推し進めたが、唯一人反対する安倍能成の説得が出来ず、GHQで教育制度を担当する民間情報教育局CIE（Civil Information and Education Section）の賛同も得られず、参謀本部のGHQ指令とすることにも反対されて、その後提案した折衷案である7年制教育案共に諦めることとなった。

医学教育審議会は2年半の間に20数回開かれ、昭和23年（1948）日本医師会の医学教育委員会に発展解消された。

日本の教育制度改革の為に訪れるアメリカ教育使節団に協力する為に、GHQの要請により、昭和21年（1946）8月10日に教育刷新委員会が設けられた。これは文部省の影響を排除する為に、総理大臣直属とし、アメリカ側の要望を、日本の実情に合わせて審議するものであり、強い権限を持って、学制改革等の教育制度の改革案を審議した。委員長は昭和21年（1946）の1月から5月まで文部大臣を務めた安倍能成であった。彼は7年とか8年という医学教育期間は、親の負担等も考えると長く、我が国の実情に合わないと考えていた。昭和22年（1947）11月からは、後に東大総長になる南原繁に委員長を譲ったが、戦後の教育制度の大きな基本的な改革が幾つも安倍の在任中に行われている。



安倍能成

昭和21年（1946）8月31日には国民医療法施行令の一部改正により、実地修練制度と医師国試制度が決まった。

新憲法が公布されたのが昭和21年（1946）11月3日で、それに基づいて教育の機会均等や義務教育等を定

めた教育基本法や学校教育法が昭和22年（1947）3月に公布され、学校教育は6・3・3・4を基本とし、義務教育は9年となった。医学、歯学、獣医学を履修する課程は修業年限を6年とすることとなり、医学教育は2年の進学課程を終えて、それとは切り離された4年の専門課程に進むという教育となり、公衆衛生の重視、解剖実習を含めて、実験や実習の重視された内容の教育が行われることとなり、一学年の定員は80名以下となった。

教育刷新委員会は教育刷新審議会と名を変え、昭和27年（1952）文部省に中央教育審議会が設置されるまで35回の建議を行い、様々な改革を精力的に成し遂げた。この間、昭和23年（1948）新制高校発足、昭和24年（1949）5月31日国立学校設置法公布と新制大学発足、昭和25年（1950）短期大学制度実施等の出来事があった。

こうした流れの中で、昭和21年（1946）11月に、歯科医の医師転用策による特殊な第1回の医師国試が行われ、137名が合格した。

医専の昇格と廃校

昭和22年（1947）医専をA級（大学昇格）とB級（廃校）に分ける審査が、施設、設備、教授内容等について、実地調査により行われた。戦争末期の急造の為に人員や設備が不十分であったという他に、空襲による被災の為にB級判定とされたものもあった。旧制中学を卒業して、3年間の旧制高校や大学予科（私立では2年もあった）を経て入学し、4年間学ぶ大学と異なり、旧制中学から入学し、4年ないしは5年で臨床医を養成する速成の医専コースを、大学レベルに高めることが目的であった。

A級は国立6校（青森、前橋、東京医学歯学、松本、米子、徳島）、公立13校（北海道立女子、福島県立女子、横浜市立、名古屋市立女子、三重県立、岐阜県立女子、大阪市立、奈良県立、和歌山県立、兵庫県立、広島県立、山口県立、鹿児島県立）、私立9校（岩手、帝国女子医学薬学、順天堂、昭和、東京、東京女子、大阪高等、大阪女子高等、九州高等）の28校で、これらは旧製の医科大学に昇格した。徳島は昭和20年7月の空襲で、基礎学舎が焼失を免れ、附属病院（附属病院）が審査の時は再建中の為、臨床教育も可能と判断されて、1年と2年のみがA級判定となり、旧制徳島医科大学へ昇格した。附属病院が空襲で焼失した為、臨床教育が出来ないと判断された3年と4年はB

級判定となり、医学校としては廃校となり、旧制徳島高等学校（特設旧制高校）に転換されたが、これは昭和24年（1949）旧製の徳島医科大学と共に新製の徳島大学に統合された。北海道立女子は札幌医科大学に昇格し、名古屋市立女子は名古屋女子医科大学に昇格後、名古屋市立大学となった。兵庫県立医専はこの判定を受ける前に、昭和21年（1946）4月に旧製の兵庫県立医科大学に昇格している。帝国女子医学薬学は東邦大学に昇格し、大阪高等は大阪医科大学に昇格し、大阪女子高等は大阪女子医科大学に昇格後、関西医科大学となった。九州高等は久留米医科大学に昇格後、久留米大学になっている。

B級は国立2校（徳島、長崎医科大学附属）、公立5校（秋田県立女子、山梨県立、山梨県立女子、高知県立女子、福岡県立医学歯学専門学校医学科）の7校であった。徳島は上述のように、3、4年生のみが旧製の徳島高等学校（特設旧制高校）に転換された。長崎医科大学附属は昭和20年（1945）8月9日の原爆に被災し、講義中であった為、職員、学生、施設共に壊滅的被害を受け、大学附属専門部の中で唯一B級判定となり、旧制長崎高校（特設旧制高校）になったが、昭和24年（1949）新製の長崎大学に統合された。秋田県立女子は昭和20年（1945）6月開校、昭和22年（1947）B級と判定され、その後4月校舎が全焼し、廃校となった。山梨県立及び山梨県立女子は昭和19年（1944）設立、昭和20年（1945）7月の空襲で校舎、附属病院が全焼し、昭和22年（1947）B級と判定され廃校となった。昭和19年（1944）に私立から県立となり、医学科を併設した福岡県立医学歯学専門学校は昭和22年（1947）医学科のみ廃校となり、福岡県立歯科医学専門学校に改称し、昭和24年（1949）新製の九州歯科大学に昇格し、現在に至っている。高知県立女子は旧制女子専門学校へ転換後、他の専門学校等と一緒に、昭和24年（1949）新製の県立高知女子大学となった。

岡山医大から岡山大学医学部へ

国立学校設置法により、岡山では昭和24年（1949）から新制大学がスタートしたが、医学部（専門課程）としては2年間の進学課程を終えて、昭和26年（1951）から入学することになるので、昭和25年（1950）迄の2年間は新製の医学部進学コースとして理学部2類への受け入れと同時に、旧大学令に基づき、旧製の岡山医科大学の入学者も受け入れた。従って、専門課程の医学部入学者は岡山医科大学の入学者であり、彼らの卒業する4年後の昭和29年（1954）3月をもって岡山医科大学は廃止となった。

前述（その1）のように、医学専門部も昭和27年（1952）3月に最後の卒業生を送り出して廃止となった。

新制大学発足後、医学部進学コースとして理学部2類を設けたが、専門課程への進学が出来ない為の学内浪人が出現するなどの問題が出て来たので、昭和30年（1955）の学生募集からは、医学部の修業年限が4年から6年となり、医学部進学課程としてそのうちの60名を募集し、専門課程に進むときに20名を追加した。昭和32年（1957）からは医学部進学課程として限度いっぱい、80名を募集することになった。

昭和30年（1955）に新制岡山大学医学部として最初の卒業生が生まれ、新制の大学院が設置された。

我々が受験した昭和35年（1960）は、6年制である医学部の進学課程を受験し、2年間で所定の単位を取得して、4年間の専門課程に進み、卒業後1年のインターンを経て医師国試を受け、その合格者が医師になるという、医師への道が一本のすっきりとしたものになってから、未ださほど時が経っていなかった。旧制大学から新制大学への移行である岡山大学に比べて、医専から新制の大学に移行する場合に於いては、大学昇格や国立への移管手続き、進学課程や大学院の整備などに手間取っていた。

神大と神戸大学医学部

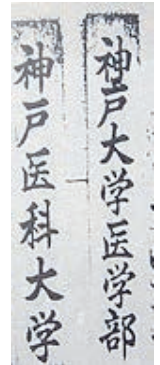
現在の神大は、大正9年（1920）設立の東京商大（現一橋大学）に続き、昭和4年（1929）に官立の商大として2番目に設立された神戸商業大学が母体となっている。昭和3年（1928）に設立された大阪商大（現大阪市立大学）と共に三商大と呼ばれ、我が国有数の官立大学として知られていた。神大は我が国の経営学の発祥の地と言われている。

医学部については、昭和19年（1944）に戦時非常臨時措置として設立された県立医専が、昭和21年（1946）4月に昇格して、旧制の兵庫県立医科大学となった。戦後の我が国の旧制医科大学への昇格の中で最も早かった。昭和27年（1952）に名前を変えて、新制の県立神戸医科大学になり、昭和30年（1955）に医学進学課程が篠山の兵庫農科大学と、姫路の姫路工業大学の2校に委託されるようになり、昭和39年（1964）に国立に移管されるまで続いた。従って国立の神戸大学医学部の歴史は新しく、大学昇格後も、昭和43年（1968）の卒業生までは兵庫県立神戸医科大学卒であった。昭和29年（1954）、当時岡大の教授であり、この年まで存続していた岡山医科大学長であった遠藤中節（法医

学）が兵庫県立神戸医科大学教授を兼任し、昭和31年（1956）からは第2代の学長になって、昭和33年（1958）の大学院設置と昭和39年（1964）の国立移管に向けて骨折った。昭和33年3月25日の神戸新聞は、第3代岡山大学長に推薦されていた遠藤中節神戸医大学長は、神戸医大に問題が山積している為に、岡大大学長就任を断ることになったと報じている。昭和39年（1964）以後は、昭和43年（1968）3月に悲願であった国立移管完了により、神戸医科大学及び神戸医科大学大学院が廃止となる迄、医学部長兼任の学長を続けた。学長在任は78才までの12年間に及んだ。医学部本館前には、昭和39年（1964）4月から昭和43年（1968）3月まで、神戸大学医学部に並んで、神戸医科大学の表札がかかっていた（写真）。小生と同年輩の神戸医科大学卒の医師に、「岡大出身者には昔から劣等感を抱いている」と言われた事があるが、その後国立の神戸大学医学部となつてからの発展著しい現在では、そんな事を感じる神大卒の医師はいないだろうと思う。



遠藤中節



広大と広島大学医学部

明治19年（1886）設立の東京高等師範学校に続き、明治35年（1902）に広島高等師範学校が設立された。これらの卒業生が入学資格者となる、修業年限3年の、文理科大学が東京と広島に新設されたのは、昭和4年（1929）であった。以来この両校は、我が国の教育界の東西の総本山として、教育界に対して強い影響力を持っていた。戦後、東京教育大学、筑波大学となって、教育界への影響力が次第に低下していった東京文理科大学に対して、広島文理科大学を母体とする広島大学は、今尚文科省や教育界に強い影響力を有すると言われている。

昭和20年（1945）2月に戦時非常臨時措置として、広島市皆実町に県立の医学専門学校設立が決まり、岡山医大がその設立を担当し、教授陣を送り、校長には岡山医大教授を兼任のまま林道倫（みちとも・精神科）が就任した。8月5日開校式を挙げて、空襲に備えて現在の安芸高田市に



林 道倫

ある、浄土真宗本願寺派の巨刹高林坊に疎開した為、翌8月6日に病院や校舎は原爆に被災して全焼、全壊したが、スタッフや学生は被災を免れた。昭和21年(1946)林道倫は岡山医大教授のまま校長を兼任した清水多栄(とみひで・生化学)と交代した。昭和22年



清水多栄

(1947) 呉市民病院、呉市立呉病院を県に移管し、附属医院とした。初め文部省の判定はB級であったが、本部を呉市に移転したことで、3回目の会議でA級と判定され、危ういところで医専の廃校を免れ、旧制の広島県立医科大学へ昇格し、これが昭和27年(1952)に新制の広島医科大学となった。その後も呉市からは大学は呉に留まるようにとの強い要望があったが、清水多栄は広島に移ることが条件の国立への移管に尽力し、昭和28年(1953)に国立への移管を成し遂げた。こうして昭和20年(1945)に岡山医大の支援を受けて設立された広島医専が、直後に原爆に被災し、呉に移って大学に昇格し、更に広島市に移転することで、広島大学の医学部となった。昭和30年(1955)に医学部進学課程が設置され、昭和34年(1959)には大学院が設置された。広島県立医科大学が廃止されて、国立大学として現在の姿になったのは昭和36年(1961)4月からで、昭和38年(1963)から医学部の入学定員が20名増加して、60名となった。以後広大は急激に成長し、昭和45年(1970)には定員は140名となり、昭和50年(1975)には160名となり、昭和35年(1960)の40名からすると4倍に増加している。又、3/4を占めていた県内出身の学生は、この間に略半分にまで減少し、県外からの学生が集まるようになってきた。広大発展の基礎的時期に貢献した林道倫と清水多栄は、新制の岡山大学の初代学長と2代目学長となった。

高知県立大学

高知県立女子医学専門学校は、昭和19年(1944)12月に戦時非常臨時措置として設立認可され、京都帝国大学と岡山医科大学が担当して設立された。しかし開校して1週間を終戦となった。空襲による校舎の焼失もあって、戦後にB級と判定され、医学校としては廃校になったが、昭和22年(1947)旧制の県立女子専門学校となり、昭和24年(1949)高知女子大、平成



高知県立大学

23年(2011)には男女共学の高知県立大学(写真)となり、看護学部、文化学部、社会福祉学部、健康栄養学部の4学部と、看護学、人間生活学の大学院を有して発展している。聖路加看護大学教授、兵庫県立看護大学学長、日本看護協会会長、国際看護師協会会長、高知県立大学学長を歴任した南裕子(ひろこ)は、昭和40年(1965)高知女子大衛生看護学科の卒業生である。

昭和35年当時と現在の国立大学医学部

昭和35年(1960)当時の中四国地方の国立大学医学部の入学定員は、岡山大80、鳥取大と徳島大が60、広島大と山口大が40の時代であって、その当時は、兵庫県(兵庫県立神戸医科大学の2か所の進学課程の定員は70)を含めて、中四国の中では岡大医学部は圧倒的な力を持っており、入試もそれだけ厳しいものがあった。半世紀以上が経ち、圧倒的だった医学部間の格差が目立たなくなり、むしろ神大や広大の偏差値が育ての親である岡大よりも上だと評価される事がある。昭和52年(1977)の医学部入試では、偏差値が岡大70、神大と広大68だったとの記録や、平成7年(1995)ではこの3大学は共に67.5であったとの記録が残っている。平成31年(2019)の受験向けに河合塾と駿台の偏差値を平均した値を示したデータでは、神大と広大は共に全国10位で67.75であったのに対して、岡大は66で全国19位であった。他のデータを見ても岡大の下降傾向に比べて、他の2校、とりわけ神大の上昇傾向が著しい感は否めないようだ。

神大、広大の医学部は山口、鳥取、徳島と同じく、戦時非常臨時措置として設立された、軍医養成のための修業年限5年の医学専門学校を母体としている。明治時代の卒業生を同窓に持つ岡大に比べると、医学部としての歴史は新しく、第一回の卒業生は神大で昭和24年(1949)卒、広大で昭和25年(1950)卒であり、驚くほど新しい。ところが設立後間もないこれら2校の専門学校は、終戦後僅かの中に慌しく昇格して県立の医科大学となった後、新制の総合大学が各県に誕生した際に、我が国有数の、伝統ある、旧制の有名大学の一員に組み込まれ、有名大学の一員として、時代の流れと共に、他に見られない躍進を遂げる事となった。大都市に立地している影響も大きいだろうが、何と言っても優秀な学生が目指す伝統ある有名国立大学の医学部へと変身した為に、偏差値が上昇していると思われるであろう。iPS細胞の山中伸弥京大教授は、昭和62年(1987)に神大を卒業している。終戦後に、医学専門学校であった両校が、県立の大学に短期間で昇

格し、更に国立大学の医学部となり、進学課程や大学院が整備され、その後に発展する基盤作りを行った時期に、当時の岡大教授が岡大教授兼任の学長として赴任して尽力したことは、両校に共通している。

昭和35年(1960)の全国医学部入学定員は2,880名で、国立大学の入学金は1,000円、授業料は9,000円であった。それが平成30年(2018)では医学部の入学定員は9,419名で、国立大学の入学金は28万2,000円、授業料は53万5,800円になっている。昭和35年(1960)度の国家予算が1.6兆円で、平成30年度のそれが97.7兆円なので、そのまま昭和35年(1960)の値を換算すると、入学金は6万1,000円、授業料は54万9,000円になる。これら大学の格差や費用等、我々が学んでいた頃と、60年近く経った現在とを比べると、隔世の感がある。

西洋医学の育成に於ける帝大への国の梃入れ

我が国の西洋医学の育成が、東大を中心になされて来たという歴史の影響は、現在も尚続いている。西洋医学の導入から、今日に至るまで、一貫して東大が君臨している状態は変わらない。東大が未だ東京医学校と呼ばれている明治9年(1876)8月、内務省衛生局は、近代医学を全国に広める為、東京医学校の卒業生を全国の医学校等へ配属しようと、在学中に月8円を給付し、卒業後に地方に赴任した場合には月120円を約束する給費生の選抜を行っている。明治10年(1877)東京大学となり、明治19年(1886)東京帝国大学となったが、帝大となる10年も前から、学生に対する特別扱いは始まっている。清野勇が明治12年(1879)に内務省からの使命を帯びて、岡山県病院長兼医学教頭として岡山に赴任して来て以来、第三高等中学校が開設された明治21年(1888)の翌年に、大阪に転任するまでに、菅之芳、山形伸芸、中浜東一郎、原田元貞、熊谷省三、榎林国三郎、栗本東明、緒方太郎、瀬尾原始等が東大を卒業して赴任して来たことが岡山大学医学部百年史に載っている。

明治からの岡大の歴史を見ると、東の東大、西の岡山と言われ、第三高等中学校医学部が、京都や大阪でなく、岡山に設置された頃の勢いが時代と共に、次第に低下して来ているように感じる。例えば、大正11年(1922)に官立の医科大学となった岡大に対して、阪大は、大正4年(1915)に旧制の大学に昇格したものの、当時はまだ府立大学であり、官立の大学になったのは帝大となった昭和6年(1931)のことであった。その為大正から昭和にかけての頃は、岡山医大の入試に落ちた人が、無試験で募集していた府立の大阪医大に行っていたものだと、先輩から学生時代に聞いた事が

ある。昭和の初期までは、明らかに岡山よりも格下とされていた大阪のその後の躍進は素晴らしいものがある。

明治19年(1886)公布の帝国大学令に見られるように、帝大は国家の須要に応ずる教授・研究を行う機関であると規定し、多大なる梃入れをして来たという歴史がある。旧7帝大出身者の親睦と知識交流を目的とする学士会の存在や、全国七大学総合体育大会(七大大戦)、東京神田錦町の東大発祥の地に建つ学士会館(写真)等に見られるように、旧7帝大の結束や勢いが今なお強い事を考えれば、大学の努力だけでなく、国の梃入れの有無の影響が無視出来ないだろうと思う。帝大は総合大学であり、その他の官立大学は当時全て単科大学であった。

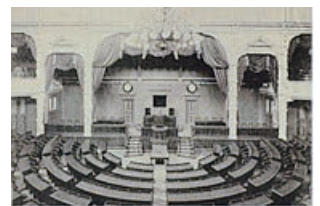


学士会館

京大から北大迄の帝大設立と中国帝国大学案

第1回帝国議会在が招集されたのは明治23年(1890)であった(写真)。現在と異なり、議会在に決定権は無く、建議案を提出して、政府に働きかけるだけであった。明治25年(1892)の第4回帝国議会在で、関西にも帝国大学を新設する建議案が提出されたが設立に至らず、日清戦争の結果、明治28年(1895)の下関条約により、3億6,500万円の賠償金(当時の国家予算が8,000万円の時代なので、国家予算の4倍としても、現在の約400兆円位に相当)を得たので、大部分は軍備費に当てられたが、3%(現在に換算して約12兆円)を教育基金とし、東大の整備、京大設立、その他に使用する事にして、明治29年(1896)の第9回帝国議会在で京大設立を可決し、明治30年(1897)に新設された。京都帝大には母体となる大学は無く、理工科大学新設でスタートし、法科大学、医科大学、文科大学が明治に、経済学部、農学部が大正になって設立された。

その後、東北、九州、北海道に帝国大学を、との建議案が何度か提出されたが、日露戦争後の不況を理由に設立されなかった。ところが、古河財閥の寄付106万円(明治40年(1907)の国家予算は6億円なので、現在の1,770億円位に相当)を得た事で、明治40年(1907)東北帝大が、明治9年(1876)設立の札幌農学校を東北帝大の農科大学に昇格し、理科大学を仙台に新設することにより設立された。その後、明治44年(1911)九州帝大が古河



帝国議会在

家の寄付を工科大学の建築費に充てて設立された。北海道帝大は、大正3年(1914)～大正7年(1918)の第一次世界大戦後の好況に乗じて、大正7年(1918)東北帝大から移管された札幌の農科大学を母体に設立された(東北帝大農学部は戦後昭和22年(1947)に新設された)。東大から北大までの5帝大は、維新以後、日清、日露を含む幾度かの戦争を経て、国威発揚の為に、有為な人材確保の面から、政府主導で設置場所が決まった。東大と京大は当初から、複数の学部を持つ総合大学を目指して設立されたのに対して、阪大や名大を含めて、他の帝大は単科の大学の開設ないしは単科の大学を母体として設立されている。

政府主導の帝大設置の流れを考えると、中国地方にも帝大が出来る筈であったのだろうと思う。本来帝国大学は幾つかの分科大学を擁する総合大学であり、教育を行う大学と、研究する大学院を含む為に、設立には巨費がかかる。この為、巨額な軍事費を必要としていた時代では、衆議院で設立の建議案が出されても、阪大と名大の例を除けば、設立までには実際に、5年以上の歳月を要している。そして巨額な設立費用の一部を、通常の家計以外に負担で賄ってきた。京大ですら、創設時には府が1万8,000坪の用地を、市が4万6,000坪の農場買収の為に80万円を寄付している。

大正5年(1916)には、衆議院に中国帝国大学設置の請願が広島から出された。しかしこの時は衆議院で建議案は出なかった。

中国帝国大学設置に関する建議案が衆議院で出たのは、昭和2年(1927)が最初で、広島市に設置という案と、岡山市に設置という案とがあった。官立の医学校も大学もまだ無かった広島に対して、大正11年(1922)から、中四国で唯一の官立大学であった岡山医科大学を母体に設立するのであれば、明治33年(1900)に六高も既に設立されているので、地理的な面でも、歴史や費用の面でも、十分納得出来るものと思われるが、生憎当時は大正9年(1920)の第一次世界大戦後の戦後恐慌、大正12年(1923)の関東大震災、昭和2年(1927)の昭和金融恐慌、昭和4年(1929)の世界恐慌等の世界的な不況が続いた時代であった。

岡山に帝国大学が設立されるチャンスは、明治の初期に「東の東大、西の岡山」と言われていた頃と、上記のように昭和の初期に衆議院で「岡山に設立」との建議案が出ていた頃と、戦後GHQから7帝大の他に北陸、中国、四国に3帝大を作る案が出た時の3回あったが、何れの時も実現には至らなかった。(以下次号)

ヒポクラテスの木

岡山赤十字病院整形外科
昭60 小西池 泰三

1) 岡大編

昨年(2018)の豪雨の頃、私の「心の師匠」(私が勝手に師匠と思っている)である三笠元彦先生より「岡大医学部図書館にあるヒポクラテスの木を調べて欲しい。」とのお手紙を頂きました。ヒポクラテスの木とはプラタナスの大樹で、この木の下で医聖ヒポクラテスは弟子に医学を教えたという伝説があります。新潟の蒲原宏先生が1969年にギリシャのコス島からヒポクラテスの木と伝えられるプラタナスの種を持ち帰られ、実弟が中山先生(第2生理学教室教授)であったため、実生株(蒲原株2号)を岡大に贈られたとのことでした¹⁾。蒲原先生は医学史の泰斗で、今年数え97歳(1923年9月のお生まれ)ですが、昨年(2018)の日本整形外科学会で講演される程お元気です。三笠先生としては岡大のヒポクラテスの木の元気な姿の写真を蒲原先生にお贈りしたいと考えられたようです。

1955年に篠田秀男先生(慶應大学)がコス島からヒポクラテスの木の種を持ち帰った話を知り、蒲原先生はこの木を移植し特に医学教育施設に分苗しようと考えられました²⁾。蒲原株1号(K1)は母校新潟大学で繁殖、K4は東京大教授・緒方富雄先生に、K7は九州大学教授・天見民和先生に贈られ²⁾、九州大学医学部図書分館の前に天見先生自らお手植えされ5mを超す大木に育っているとのこと¹⁾。三笠先生によると、1958年に移植された篠田株(S6)は現在も慶應大学医学部北里図書館の前にあるとのこと²⁾。

日本で通見られるプラタナスはPlatanus acerifolia(モミジバスズカケノキ)とPlatanus occidentalis L.(アメリカスズカケノキ)ですが、ヒポクラテスの木はPlatanus orientalis L.(スズカケノキ)で葉の刻みは深く、樹皮は大きく剥がれ斑になります³⁾。この木は簡単に見つかると思いましたが、

豪雨があがった日に岡大医学部図書館の周りを調べてみましたが、何ら手がかりは見つかりませんでした。日赤OBの大学院生・平中孝明先生に調査を依頼しました。彼の調査で岡大の木は1975年に枯死していることがわかりました。また、蒲原先生のお弟子さんである星栄一先生の貴重な文献³⁾を探してくれました。

ヒポクラテスの木の系譜は9系統あるようです。1971年に緒方富雄先生(東京大学名誉教授)が「ヒポクラ

テスの木友の会」をつくり、各株の系譜を明確に保つための登録を始められたのですが、1980年後半には登録業務は途絶えました。このため星先生はヒポクラテスの木の詳細な調査をされました³⁾。全国には約100本前後のヒポクラテスの木が生育しているようです。蒲原株は29株生育しており、岡大株(K2)は由緒ある木と言えenと思います。挿し木されたものが2007年には三朝分院で生育していたことがわかりました。

三朝分院は2016年に廃院になっており、三朝に行って確かめることにしました。40年前の新入生オリエンテーションで、金政先生(細菌学教室教授)らの引率で三朝分院を見学したことを懐かしく思い出しました。幹に斑があるヒポクラテスの木らしきもの(図1)はありましたが、記銘などの確認ができるものはありませんでした。猛暑のなか分院跡をウロウロしておりました時、ただ一人お会いした方が芦田耕三先生(岡山大学大学院三朝地域医療支援寄付講座教授)でした。芦田先生は「ヒポクラテスの木については知らないが、確認してまたお知らせします。」と言われ、その日は帰りました。芦田先生から「当時のことを知っている職員がいて、確認できました。」とのメールを頂いた時は、感激したと同時に三笠先生とのお約束を果たす

ことができ肩の荷がおりた気持ちがしました。

芦田先生のメールの中に「このままでいいでしょうか?」というご意見がありました。成る程と思いました。記銘もないままではいずれ忘れられます。せっかく生き残ってくれたのだから岡大医学部に再び移植できないかと考え、同級生である土居教授(衛生学教室)に相談したところ、彼が吉野教授、大塚医学部長らの岡大幹部の先生方に連絡してくれました。岡大創立150年の記念事業の一つとして鹿田に移植されることになりました。

これまでの経過について三笠先生、蒲原先生にご報告しました。三笠先生にはヒポクラテスの木の移植が早々に決定したことに「さすが岡大ですね。」とお褒めの言葉を頂きました。蒲原先生からはご丁寧な御礼のお手紙を頂きました。中山先生(私も学生の時ご指導いただきました)のご関係で、50年前の岡大100年史の編纂の手伝いに岡山に長く滞在されたことが懐かしく、田辺先生、武智先生ともにご懇懇であったとのことでした。また、ヒポクラテスの木を育てるにあたっての注意事項が詳細に書かれており、この木を育てることが困難であることや先生のこの木にかける熱い思いが感じられました。

2) 日赤編

以上の話を当院の東原さん(医療情報管理課課長)にしたところ、「うちにもあります。」とのことでした。昭和52年の日赤創立100周年を記念して、ギリシャ日赤から贈られたものを日赤本社が全国の日赤病院に贈ったそうです。岡山日赤の木は昭和60年に青江に移転する際、当時の院長の指示で丸の内にあったものを青江に移植したとのことでした。東原さんは院内誌の発行の仕事で、このことを覚えていたとのことでした(東原さんは今年3月で定年退職されます)。早速、見に行ったのですが、当院の看護学校と体育館の間の中庭にあります。記銘もなく、周囲の木に押され枯れそうに見えますが、わずかな隙間から精一杯に枝を伸ばそうとしていました。「新病棟が完成したら正面のもっといいところに移植したらどうでしょうか。」と提案しています。

星先生は「日赤株は未整理である。」と指摘されています³⁾。以前よりご指導頂いている名古屋第二赤十字病院の佐藤公治院長にこの話をしましたところ、佐藤先生が日本赤十字社医療事業推進本部・本部長の富田博樹先生(今年3月で定年)に連絡して下さいました。昨年、全国の日赤でもヒポクラテスの木の調査が行われました。ヒポクラテスの木の記銘碑や銘板があ



図1 三朝分院の「ヒポクラテスの木」
樹皮は大きく剥がれ斑になっている。

るものは残っているが、そうでないものは院長や事務長が交代するうちに伐採されたものもあるようです。

ヒポクラテスの木の種からはすべてが発芽するわけではなく、せっかく発芽しても盗まれたり、枯れたりするものも多くあります³⁾。岡大も日赤も創立150年を迎えますが、半世紀前に「ヒポクラテスの木」の下で若い医師が研鑽を積む姿を思い描かれ、この木を育てようと努力された先輩方がおられました。大事なことは「ヒポクラテスの木のDNA」を伝えることだけではなく、蒲原先生らの「この木にかける想い」を伝えることであると感じています。三笠先生のお手紙がなかったら、平中先生の調査がなかったら、芦田先生に会わなかったら、東原さんに昨年この話をしなかったら、土居教授（今年3月で退官）、佐藤院長が知り合いでなかったら、いずれもこの「ヒポクラテスの木」の話はストップしていたと思います。貴重な経験をさせて頂きました。お力添え頂きましたすべての方に感謝します。

文献

- 1) 三笠元彦：ヒポクラテスの木. 整形外科67：1040, 2016.
- 2) 蒲原宏：ヒポクラテスの木とその子孫. 整形外科26：166, 1975.
- 3) 星栄一：ヒポクラテスの木と蒲原株. 厚生連医誌16：163-169, 2007.

ヒポクラテスの木の植樹に向けて

昭55 大塚 愛二

医学部長になって気づいたことに、時折、「岡山大学にはヒポクラテスの木は植えてありますか？」という問い合わせがあるということである。よくわからず、「ありません」と答えてきた。調べてみると、ヒポクラテスの木とは、ギリシャのコス島にあるプラタナス（和名ズカケノキ）で、ヒポクラテスはその木陰で医学を教えたという伝承がある。私は、ひそかにいつかこのキャンパスにヒポクラテスの木を植えたらよいのではと考えるようになっていた。一方で、Jホール建設の時に、多くの先輩方による記念植樹を整理せざるを得なかったことにも頭を痛めていた。

2017年11月、昭和32年卒同窓の先生から「卒後60周年の記念植樹をしたい」という申し入れがあったとい

う報告を受けて、キャンパス全体の緑化整備計画を考えてお答えすることとした。那須医歯薬学総合研究科長からキャンパスの緑化整備を計画的に事業として実施してはどうかと提案があり、事務方から、Jホール周辺に植える樹木と場所を決めて一定期間大学が面倒を見るということで募集をかけたかどうか、という案が示され、実行に移すこととした。私は、その中の一つをヒポクラテスの木にできないだろうか、それを150周年記念植樹にできればという願いを持っていた。

それに呼応するかのようタイミングよく、疫学・衛生学の土居教授からメールをいただき、岡山日赤の小西池先生から、ヒポクラテスの木について問い合わせがあり、蒲原株の一つが三朝にあるということであった。この経緯は、小西池先生の玉稿に詳細に書かれているのでそちらを参照されたい。

三朝に根付いて大きく育ったヒポクラテスの木から分苗し、鹿田に植樹することとし、2018年9月7日（金）、川口総務課長の運転で三朝キャンパスに赴いた。小西池先生からの写真のプラタナスの木を見つけ、三朝の川本さん立会いの下、米原さんが脚立に登って枝を切ってください、挿し木とする枝を持って帰った。現在、植木業者に依頼して発根してもらい、植樹を2020年までには間に合わせる予定である。



三朝のヒポクラテスの木の前で採集した枝を持つ筆者

海外だより

インディアナ大学に移りました。

Indiana Center for Musculoskeletal Health (ICMH),
インディアナ大学歯学部
平6 植木 靖好

平成6年卒の植木靖好です。昨年8月にインディアナ大学医学部に研究室を移したことを報告させていただきます。私は分子医化学（故二宮善文教授）で平成10年に学位を取得後2年間二宮教授の下で助手として勤務しました。2000年から2008年までハーバード大学のBjorn Olsen教授の研究室でポスドクをした後独立し、2008年からミズーリ大学カンザスシティ校歯学部（UMKC）にて研究室を持って来ました。その創成期には吉鷹輝仁先生（平成8年卒、整形外科）、向井知之先生（平成11年卒 現川崎医科大学リウマチ膠原病学 准教授）がポスドクとして来てくれて大いに活躍してくれました。彼らの頑張りのおかげでラボはまもなく順調に走っていましたが、10年経ち今後の展開と方向を模索する日々でした。そんな中、心機一転50代のチャレンジです。進行中のプロジェクトを中断し家族と遺伝子改変マウスと一緒に引っ越しし、新しい環境での研究に飛び込むには覚悟が必要だったのですが、より競争的な環境で精神的に若返り、ラボとテーマを再構築し新しいことを始めたい気持ちからの決断です。新しいラボはリノベーションされた医学部内にあり、ファカルティーとしての所属は歯学部になります。インディアナポリス市はシカゴから車で約3時間の所で、共和党支持者の多い典型的な中西部の州です。日系の自動車関連の会社が多くあります。Boston Red Sox ファンとしてはメジャーリーグの球団が無



2018年8月1日。新生Ueki ラボの初日にメンバーと。橘高瑞穂（右）、私、吉本哲也（左）。

いは寂しいのですが、シカゴのチームや周辺のマイナーリーグの観戦を続けたいと思っています。

研究室は今まだセットアップの途中ですが、以前よりも大きな大学となりました。環境が変わったことで新しい刺激を受けながらサイエンスに取り組んでいます。この研究所は2年前に作られた骨や筋肉をテーマにした研究所で、それぞれの学部に分散していた骨や筋肉など骨格に関する医師や研究者をセンターの名のもとに統合して学部の枠組みを超えた研究を推進する目的で作られました。UMKCのBone BiologyグループのDirectorだったLynda Bonewald教授が2年前にセンター長として着任し、彼女の推薦で今回移籍する機会を得ました。現在のメンバーは私と広島大学歯周病科（栗原英見教授）出身の二人のポスドク、橘高瑞穂と吉本哲也で、この二人と一緒に異動しました。人生で最後のルーキーになるかもしれないこの新鮮な時間を大切にしないといけないなと思っています。

研究分野は破骨細胞やマクロファージの活性機構を中心とした骨免疫学で、様々なマウス病態モデルを用いて炎症下で起こる骨破壊のメカニズムの解明を目指した研究をしています。長期的な展望に立ったプロジェクトも開始してラボメンバーはそれぞれ新しい挑戦をしています。インディアナに来て6ヶ月、ようやく生活の基盤も固まりつつありますが、家を売ったり、子供の高校が変わったりと家族にとっても大きな負担と変化でした。移籍を後押ししてくれた家族には感謝しています。私のミッションはただ一つ、センターと連携し歯学部としての研究環境を作りあげて骨研究を発展させ、知と健康に貢献する成果を発信していくことです。今回の引っ越しにあたりインディアナ大学医学部と歯学部からスタートアップ資金もいただいております。その思いを一層強くしています。その上にグラン



村上昌弘先生（左）と鶴翔会インディアナ州支部を立ち上げました。現在会員は2名です。

トを獲得する事も大きな使命です。リクルートや人事において過去の論文業績よりグラントがあるかどうかを重視するグラント至上主義は現在のアメリカでは避けて通れません。間接経費で大学が潤い、給料の一部をグラントでまかなう仕組みのアメリカでは当然かもしれません。アカデミアの世界もある意味ビジネスでグラントがあれば誰でもフリーエージェントです。資金が枯渇しアクティブに研究室を維持できなくなった時は研究室を閉めて研究以外の道に進むことになります。まず5年、なんとか次の5年、その先は自分の成長と能力次第です。ラボの強みであるヒトとマウス遺伝学を基礎として新技術や時代とともに移り変わるトピックについていけるかどうかが大になると考えています。アンテナをもっともっと高くしないとイケません。教育面では歯学部1、2年生の講義を行い、引き続き岡山大学医学部からMRIプログラムの3年生を受け入れて基礎研究の指導もしていきます。幸先よく5月から浦田里奈さんがMRIプログラム（分子医化学 大橋俊孝教授 推薦）でラボに加わる予定です。ポーっとサイエンスしてんじゃねーよ！にならないよう本質を突く研究、医学と歯学の橋渡しとなる研究を行い結果を発信していく所存です。一方で健康維持とワークライフバランスの取り方も大事になってきました。

インディアナポリス市のEli-Lilly社には村上昌弘先生（平成5年卒）が勤務されていて、会員2名の鶴翔会インディアナ支部を勝手に立ち上げ家族を交え同門会と称した飲み会を行なっています。同窓のみなさん、インディアナに留学される場合や学会等で近くに來られる時はぜひ連絡をください。母校の事はいつも心にありネットでニュースを見るたびに誇らしく思い、その発展を嬉しく思ってきました。今後も米国からその展開を楽しみに見守っていきます。最後に私事ですが父が岡山大学病院の多くの先生に診察や治療をしていただき大変にお世話になっております。この場を借りて心より感謝申し上げます。今後とも父子共々よろしくお願いたします。Please keep in touch!

Yasuyoshi Ueki
Associate Professor
Dept of Biomedical and Applied Sciences, Indiana
University School of Dentistry
Office & Lab:
Indiana Center for Musculoskeletal Health, Indiana
University School of Medicine
Van Nuys Medical Science Bldg, Rm#514

635 Barnhill Dr, Indianapolis, IN 46202, USA
E-mail: uekiy@iu.edu



上高地帝国ホテル裏のベランダ
井上 一

学生だより

解剖学実習を終えて

医学科3年 安藤 碧

解剖学実習を行った三か月間は非常に貴重な時間でした。このまたとない機会を無駄にはするまいと教科書を隅々まで読んだり、授業時間だけでは足りず何度も居残って実習を行ったりしました。とても大変でしたが、実習に真摯に取り組んだことで教科書だけでは得られないことをたくさん学べたので、頑張ってきたよかったなと思います。

解剖学実習を通して、人間の体のつくりの精巧さを改めて思い知らされました。神経や血管が体の隅々まで張り巡らされていることや体中に非常にたくさんの筋肉が存在していることは教科書を見れば分かる当たり前のことですが、実物を見ると、「なぜこんなにも精巧なものが作り上げられたのだろう」という思いが尽きませんでした。また、解剖学実習は驚きの連続でした。動脈と静脈では見た目も硬さも全く異なること、食道が意外と細いこと、肺がとても柔らかいこと、ご遺体によって筋肉の厚さや血管の走行が異なることなど書きだすときりがありませんが、自分の想像とは違った体のつくりには毎回驚かされました。冒頭にも書きましたが、実物を見て触ることで机上の学習からは得られないものをたくさん得ることができたので、とても有意義な実習を行うことができました。

納棺ではご家族からの遺品を受け取りました。遺品にはその方が生きた証があり、私たちが解剖させていただいたご遺体はその方の一生のすべてを受け止めてきた大切なお身体なんだと改めて気づかされました。献体に協力してくださった方々と大切な人を献体に出すことを了承してくださったご家族の方々には感謝の念に堪えません。

解剖学実習を終えた私がやるべきことは、将来関わる多くの命のためにこれからも一生懸命勉強に励むことだと思います。私たちの未来のために献体をしてくださった方々がいらっしゃるということを心に留め、たゆまぬ努力を重ねていきたいです。

解剖学実習を終えて

医学科3年 金 晟 烈

まず最初に、解剖学実習のために献体された方々、そしてそのご遺族の方々に感謝いたします。

解剖学実習の初日に初めてご遺体に向き合ったときには献体してくださった方、そのご遺族の方々に失礼のないように、この実習でできる限りたくさんの方を学ぶために最大限の努力を尽くそうと思いました。そして、解剖を進めていくうちに教科書を読んで知っているつもりになっていた体は実際の体の構造とは異なっており、とても驚きました。また、筋肉や血管、神経を実際に触ると想像とは大きく異なっており、この解剖学実習の重要性を感じました。また、医療機器や手術痕を体の中で見ることで、どのような場所で行われるのか実際の様子を見ることができたのもとても貴重な体験であったと確信しています。

11月半ばには、解剖体慰霊祭に参加させていただきました。そこで、献体を申し出られた故人のご遺族の方々を見て、私たちが解剖させていただいたのは漠然とした誰かではなく、誰かの愛する家族であり誰かの大切な人であったということを再確認しました。代表者の方がスピーチをするのを聞くご遺族の方々の顔を見て、献体された方々やそのご遺族の方々の尊い意思によって私たち学生の学問や医学の発展が支えられているということを改めて思い起こされました。

この解剖を通して、ただ教科書や参考書を読むことでは得られない様々なことを得ることができました。神経が脂肪組織に埋まっている様子から臓器や筋肉の質感、立体的な臓器と血管の位置関係など多くの大切な知識を得ただけでなく尊い命を預かる責任を改めて感じることができました。このような机上の学術では得られない貴重な経験を無為なものにしないように努力を怠らず立派な医師となって世の中に少しでも多く還元できるようにしたいと思います。

最後に、医療発展のために献体を決意してくださった方々、大切なご家族を献体に出すことを了承してくださったご遺族の皆様にご心よりお礼申し上げます。

解剖学実習を終えて

医学科3年 森 下 瑤 子

9月から3か月間、ご献体を用いて解剖をさせていただきました。3か月という長い期間、ほぼ毎日実習をすることは体力的に厳しいものがありましたが、医学生としての自覚や、医学の奥深さなど、得るものがとても多い実習でした。

この解剖実習では、最初に先生方がおっしゃられた通り、このご献体が私たち学生にとって最初の患者であり、多くのことを学ばせていただくという気持ちを持って実習に取り組んでいきました。しかしながらこの解剖実習で自分は十分に学びきれのかという不安もありました。教科書や手引きを読み、予習を行い、実習に臨みましたが、実際に見てみないと分からないことも多くありました。解剖実習中も資料集を見ながら体の様々な部位を観察しましたが、記載されているスケッチや図は見やすいように整えられたものであり、分かりやすいように描くものを選択しているものであるため、人体構造の同定は困難な作業でした。特に神経と血管は細く、複雑な走行をしており、剖出するだけでも大変なのに、人によって全く走行が異なるため、丁寧に一つずつ参考書を確認しながら解剖を行いました。

私が直接解剖させていただいたのは二人のご献体でしたが、女性と男性の性別の差はもちろんのこと、年齢や死因、病歴等の違いもあるので、同じヒトでもこんなにも違いがあるのかと改めて人体の複雑さに驚きを感じました。また、実習も後半になると疲れも溜まってきているのか、集中力や意欲が最初と比べて落ちていたのですが、他大学の看護科の学生や、薬学部の学生が見学をしに実習に参加したときは、短い時間しか実習に参加できないからこそ彼ら彼女らの勉強意欲と熱心さに感銘を受けました。同時に、自分もそれ以上に頑張らねばと良い刺激を受けました。また他人に説明をすることでより一層この解剖実習で学んだことを理解できたように思います。

今回の解剖実習は、今まで学んできた人体構造やこれから学ぶ医学の勉強を理解するうえで大いに役に立つと思います。期間にしては長い日数でしたが、人体について学ぶには短く、足りないように感じました。今後とも立派な医師となるために、今回献体して下さった人々に感謝を忘れずに、勉学に励んでいきたいと思っています。



教室だより

(平成30年8月～平成31年3月)

細胞組織学

岡山大学・中国東北部大学院留学交流プログラム(O-NECUS)の留学生Liu Yangさんが1年の留学期間を終え、平成30年9月に帰国しました。

教育面では、11月に細胞組織学特別講義として、近藤洋一先生(大阪医科大学教授)、佐々木順造先生(岡山大学名誉教授)、金井正美先生(東京医科歯科大学教授)よりご講義いただきました。本年1月には、発生学特別講義として、井関祥子先生(東京医科歯科大学教授)より「頭蓋顔面の発生」について、中島裕司先生(大阪市立大学解剖学教授)より「心臓形態形成と先天性心疾患」についてご講義いただきました。2月には大学院特別講義として、七田芳則先生(立命館大学客員教授)に「光受容体オプシンの機能進化・多様性」についてご講演いただきました。

研究面では、「先祖型薄明視オプシンPinopsin」について*Communications Biology*誌(佐藤助教、大内教授)に、「グルタチオンの破骨細胞形成促進作用」について*Free Radical Research*誌に論文発表しました(藤田助教、大内)。学会活動としては、以下の研究発表を行いました:「逆行性自己再生能をもつ光受容体Opn5L1」(生物物理学会56回年会、佐藤、若手奨励賞受賞)、「ゲノム編集マウスを用いた破骨細胞の機能解析」(生化学会91回大会、藤田)、「Opn5分子特性の改変」(第18回レチナルタンパク質国際会議、於カナダ、佐藤)、「器官再生におけるマクロファージの機能」(日本解剖学会73回中国四国支部会、板東講師)、分子生物学会41回年会にて「眼発生におけるLhx1の役割」(衣畑院生)、「ピノプシンの進化」(佐藤)、「脚再生と極性分子複合体」(板東);第124回日本解剖学会にて「副腎におけるDKK3の機能」(土生田院生)、「Opsin5L1の組織学的解析」(佐藤)、「ロイコトリエン系と破骨細胞」(藤田)。

(藤田 記)

人体構成学

9～11月に医学科2年の系統解剖実習が行われました。これまでの実習に加え、英語教材、Moodleを用いた自習環境、多視点3D解剖教育システム MeAV AnatomieやVisible Bodyなどのマルチメディアの導入、より安全な固定液の開発など、教育効果・実習環境の改善を目指して挑戦、進化し続けます。

研究活動としては、百田助教は国立長寿医療センターとの共同研究「高齢者特有の組織物性と環境に基づく皮膚創傷・脈管病変の診療体系の構築」の班会議(9月15日)に出席、情報処理学会バイオ情報学研究会(12月14日)にて「Integration of Anatomical Terms by Network Visualization and Open-source platform」と題して発表しました。また、ヒトのコラー

ゲンXVIII型と皮膚の加齢に関する論文がJournal of Cosmetic Dermatologyにアクセプトされました。

品岡助教は米国Plastic Surgery The Meeting 2018(9月27日)に出席、第45回マイクロサージャリー学会学術集会(12月6日)にて「続発性リンパ浮腫発症における深部リンパ流障害の役割、それを対象とした治療戦略」を発表しました。

当教室から9月に宮本朋幸さんは博士課程を、藤谷陽子さんは修士課程をめめでたく修了し、それぞれ新たな道に向かって歩み始めました。

11月10日に解剖体慰霊祭が開催されました。Animatoの弦楽奏に合わせて献花が行われ、御遺族の方々とともに御遺体を提供していただいた故人の冥福を祈りました。2年生の武内恵太君が学生代表として一層勉学に励みますと決意を新たに感謝の言葉を述べました。

2月22日には文部科学省の御一行の施設訪問でMeAV Anatomieの見学をされました。

3月11日からの春解剖では、今回もまたイタリアL'Aquila大学よりMarta RinaldiとSara Giovagnoliさんが参加して、医学科生達と解剖学実習を通じた国際交流を行います。(百田 記)

脳神経機構学

人事関係では、昨年10月から当研究室に留学していた、イギリスSurrey大学のRhiannon Redmanが8月に帰国しました。また10月には、同じくSurrey大学のJonathan Smartを迎えました。日本語の学習をする傍ら、パーキンソン病モデル動物における神経保護薬の探索研究に加わっております。

研究活動では、10月の日本解剖学会第73回中国・四国支部学術集会(徳島)で浅沼教授が「妊娠・授乳期エポキシ樹脂曝露産仔マウス脳への影響に関する組織学的・行動学的検討」について発表しました。10月の22nd International Congress of Parkinson's Disease and Movement Disorders(Hong Kong, China)では、浅沼が「パーキンソン病治療薬ロチゴチンのアストロサイトにおけるセロトニン1A受容体を標的としたドパミン神経保護」について、宮崎が「パーキンソン病モデルへのコーヒー成分カフェイン酸、クロロゲン酸投与による神経保護効果」について発表しました。また、第12回香川小児てんかん懇話会で浅沼が「抗てんかん薬のもうひとつの標的細胞」と題し、特別講演を行いました。11月のメタルバイオサイエンス研究会2018(仙台)では、宮崎が「アストロサイトにおけるメタロチオネイン発現を標的とした神経保護」についてシンポジストとして講演し、磯岡院生が「ロテノン誘発神経毒性に対するコーヒー成分の神経保護効果」について口頭発表、菊岡院生が「パーキンソン病モデルマウスにおけるドパミン神経変性に対する抗うつ薬ミルタザピンの保護効果」についてポスター発表しました。また、第134回日本薬理学会近畿部会(神戸)で磯岡と菊岡がそれぞれ発表しました。第41回日本分子生物学会(横浜)で宮地が「RNA存在下でのhnRNPU/SAF-A/SP120のMAR結合への選択的結合」について発表しました。1月の第36回染色体ワークショップで宮地がトポイソメラーゼIIβに関する研究成果を発表しました。3月の第92回日本薬理学会年会

(大阪)、第124回日本解剖学会総会・全国学術集会(新潟)で宮崎が「農薬ロテノン誘発腸管神経障害とコーヒー成分による神経保護」、「妊娠・授乳期におけるエポキシ樹脂曝露による産仔マウスの行動変化」について発表しました。

大学院特別講義では、1月に長谷川隆文先生(東北大学大学院医学系研究科神経内科学分野准教授)に「パーキンソン病の早期診断と進行抑制治療への挑戦」、2月に中曽一裕先生(鳥取大学医学部統合分子医化学分野准教授)に「神経・精神症状におけるグリア細胞シスチン/グルタミン酸交換系トランスポーターの役割」について講義して頂き好評を博しました。

浅沼が8月に「パーキンソン病での先行性腸管神経障害に対する杜仲葉エキスによる消化管神経環境修飾の効果」で日本杜仲研究会第14回研究助成に採択されました。

研究活動の詳細および発表論文に関しては、教室のホームページ(<http://www.okayama-u.ac.jp/user/mnb>)をご覧ください。(宮崎 記)

細胞生理学

6月に就任した教授の神谷は、研究環境を整えながら大学院生の教育に励んでいます。彼にとって初めて迎える学生が10月、中国から来ました。弊学と中国東北部5大学との共同プログラムO-NECUSの留学生、徐珊珊(シュ・シャンシャン)です。皆様、よろしくお祈りします。

10月20日、同門会主催で「神谷厚範 教授就任記念祝賀会」を開催しました。県内や香川はもちろん、千葉、大阪、神戸、鳴門など遠方からも多くの会員が集まり、彼の就任を祝うとともに今後の教室の発展を祈りながら旧交を温めました。

助教の松下の指導を受け、オキシトシンの神経保護作用の研究に従事してきた博士課程のヘイン・ミン・ラットが、2月学位審査を終えました。4月にはミャンマーに戻り、マンダレー医科大学で教員に復職します。また、修士課程の外上、大津、塩本、松持、柚木の5名も無事学位審査を終えました。

神谷は、第60回歯科基礎医学会学術大会の学術領域「温度生物学」共催シンポジウムで「生きた動物の2光子イメージングによる温度生物学研究」、第3回Biothermology Workshop研究会で「生きた恒温動物の体内における、細胞温度イメージング解析」、革新的先端研究開発支援事業「メカのバイオロジー機構の解明による革新的医療機器及び医療技術の創出」の会議で「圧反射求心性神経のメカノバイオロジー機構の解明と、神経操作医療の試作」と題し、講演あるいは成果を発表しました。

助教の藤村が代表を務める研究課題「膠芽腫におけるBNCTプレジジョン・メディシニ化を実現する統合的分子基盤の創出」がAMEDの「平成30年度革新的がん医療実用化研究事業」に、「tRNAエピトランスクリプトーム創薬で実現するがん幹細胞標的型抗がん剤の開発」が同じくAMEDの「平成30年度次世代がん医療創生研究事業」にそれぞれ採択されました。

最後に、西木と松下は3月末日で退職しました。紙面をお借りし、これまでお世話になった皆様に心からお礼申し上げます。(西木 記)

システム生理学

当研究室は基盤研究(S)「メカノメディスン：メカノ医工学を駆使した再生医療・生殖医療への展開」および新学術領域研究「宇宙からひも解く新たな生命制御機構の統合的理解」の研究課題「重力変化を含む力学的ストレスに対するメカノセンシング機構」を継続して行っています。また、平成30年度防衛装備庁安全保障技術研究推進制度の研究課題「メカニカルストレス負荷システムの開発」に採択されました。

今期は以下の学会で参加・発表を行いました。12th Symposium of the European Society of Biochemical Engineering Sciences(9月：成瀬)、第56回日本生物物理学会年会(9月：成瀬、入部、森松、貝原、縄稚)、The 10th International Conference on High Pressure Bioscience and Biotechnology(HPBB2018、9月：成瀬)、iCeMS Mini-Symposium on Mechanobiology(9月：森松)、日本宇宙生物科学会第32回大会・第15回宇宙環境利用研究日韓合同セミナー合同国際大会(9月：成瀬)、第91回日本生化学会大会(9月：片野坂)、第70回日本生理学会中国四国地方会(10月：成瀬、寺町、甲斐)、第6回若手による骨格筋細胞研究会(11月：片野坂、澁谷)、第59回高圧討論会(11月：成瀬、森松)、ASCB EMBO 2018 Meeting(12月：成瀬、森松、藤田)、旭川医科大学講演「メカノメディスン：基礎医学研究から不妊治療・再生医療への展開のアップデート」(2月：成瀬)、63rd Annual Meeting of the Biophysical Society(3月：成瀬、片野坂)、The 9th Federation of Asian and Oceanian Physiological Societies Congress(FAOPS2019、3月：成瀬、片野坂、王、桂)。また、研究論文1編がCell Calcium誌に掲載されました。

メンバーに関しては、修士大学院生の魏恒と甲斐寛彬が修了しました。(高橋 記)

分子医化学

魅力ある研究分野をつくるべく教育および各研究テーマに取り組んでいます。

人事関係では、本年度1-2月に博士の学位審査があり前場、鳥原(矯正学)、Nguyen(インプラント再生補綴学)が無事修了しました。今後それぞれの道で活躍が期待されます。10月にインプラント再生補綴学の博士課程大学院生Ha Thi Thu Nguyenさんが共同研究のため配属されました。また、大連医科大学よりMU、XindiさんがO-NECUS留学生として入学しました。大橋はO-NECUSの面接試験のため3月にハルビン医科大学を訪問しました。

学会活動として、大橋が9月に日本生化学会(京都)でポスター発表を行いました。10月に本学は若手研究者が飛躍できる世界で“キラリと光る”研究大学へ次世代を拓く「重点研究分野」(5拠点)を発表し、大野助教が研究代表者を務める「口腔器官の再構築から器官の発生・再生の統一原理の解明」が選定されました。医歯薬学、異分野融合先端研究コアを巻き込んだ発展が期待されます。10月に、The First International Symposium on Immunology and Tissue Regeneration in

Okayama/12th URA International Symposiumを開催し、本シンポジウムで、Nguyenが講演を、大橋と大野が座長を務めました。11月に、大橋が中国の杭州で開催されたPPCTSSで講演を行いました。12月に医学科3年生の藤井郁成君が西日本医学生学術フォーラム（津）でポスター発表し、大橋は引率教員として参加しました。1月に岡山大学次世代研究拠点セミナーシリーズを開催し、RIKENの小川美帆先生、東京大学の中村正裕先生、北條宏徳先生、東京医科歯科大学の小野岳人先生にご講演頂きました。3月の日本軟骨代謝学会（大阪）に大野・大橋が参加し、大橋が発表しました。大橋は、3月20-22日の間、協定大学である英国Surrey大学（Guildford）を訪問しました。現在医学科ではSurrey大学の学生をMRIプログラムで受け入れています。さらに両大学間で学生教員の交流を発展させるための協議を行いました。

教育関係では、2年次生対象の授業・実習が9月から12月まであり、教員全員で取り組みました。医学科非常勤講師として京都大iPS細胞研究所・渡辺亮先生、東京都医学総合研究所・神村圭亮先生、大分大学・佐々木隆子先生を招聘し、特別講義を拝聴しました。大学院の非常勤講師として同志社大学・堀哲也先生を招聘し、「シナプス前過程の電気生理学実験」の講義を拝聴し、共同研究打ち合わせを行いました。（大橋 記）

薬理学

当教室は、「炎症反応の制御機構の解明、及び創薬開発」を目指しています。現在、抗HMGB1中和抗体を用いた脳梗塞・脳出血・脳外傷などの治療、そして血漿高ヒスチジン糖タンパク（HRG）を用いた敗血症治療・診断法開発を研究室の主要テーマとして、研究をおこなっています。

薬理学教室メンバーは、西堀正洋教授、和氣秀徳講師、勅使川原匡助教、王登莉助教、劉克約非常勤研究員、仲田桜非常勤研究員、出石恭久客員研究員、大学院生の寺尾欣也、Soe Soe Htwe、西村義人、高尚澤、吉井将哲、高橋陽平、進吉彰、喬寒棟、村岡玄哉、O-NECUS短期留学生の庫文涵、技術補佐員の佐藤まどか、教室秘書の矢田真理子、木田由希子で構成されています。留学生の人数が多く、国際色の豊かな研究室です。

昨年度は、WCP2018（西堀正洋、和氣秀徳、勅使川原匡、王登莉、Soe Soe Htwe、高尚澤、吉井将哲、高遠、衷輝）、日本薬理学会近畿部会（勅使川原匡、兼森玄（医学部3回生））、日本神経科学大会（西堀正洋、王登莉）、日本生化学会（和氣秀徳、勅使川原匡）、The Mt. Fuji Workshop on CVD（西堀正洋）、BIT's 8th Annual World Congress of Molecular & Cell Biology（西堀正洋）、日本医療薬学会年会（西堀正洋）、CVMW2018（和氣秀徳）、西日本医学生学術フォーラム2018（西堀正洋、兼森玄）にて研究成果の発表をおこないました。さらに、国際科学誌に寺尾欣也院生（Pancreas）、Soe Soe Htwe院生（Blood Advances）の研究成果が掲載されました。学位修了した高遠院生は、教室を巣立って、社会人として新たに活躍を始めています。

新年1月には、教室員一同が日頃の感謝の気持ちを込めて同門会を開催しました。

ここ数年の薬理学教室は、人材・研究資金共に充実し、他教室との連携も緊密なものとなり、学術的研究と臨床的創薬開発の双方が一步一步着実に進展してきています。今後もさらに鋭意努力していきたいと思えます。（勅使川原 記）

病理学（免疫病理）

平成30年9月から平成31年3月までの教室の動きを、簡単ではありますがご報告いたします。例年どおり、松川教授をはじめ一同、医学部・医学科3年生の講義・実習・試験と各々の研究などで多忙な毎日を送っております。また今年は大学入試に関連した種々の業務が例年になく多く、教員間で手分けして責任を果たしています。さて、平成30年9月に中国人大学院生・楊旭（YANG, Xu）が学位を取得し、帰国しました。また、平成31年1月に大学院生・大倉隆宏の学位論文が海外科学雑誌にアクセプトされ、学位取得の見込みとなりました。それに伴い、4月1日より島根大学・消化器・総合外科学教室に異動します。平成29年の10月よりO-NECUSの留学生として当教室で訓練を受けていた2人の中国人学生・孫英富（SUN, Yingfu）、田淼（TIAN, Miao）が平成30年9月に1年間の訓練を終え無事帰国しました。一方、同10月に新たに2人のO-NECUSの中国人留学生・李甜甜（LI, Tiantian）、陳悦華（CHEN, Yuehua）が当教室での留学生生活を開始しました。また、この3月にはミャンマーから2人の大学講師が将来の岡山大学大学院入学を見据えて、1ヶ月間本教室で経験を積む予定になっています。このように、多様な留学生や短期滞在者を抱え、対応に追われています。最後に、技術職員として8年間教室の研究の発展・運営に貢献してくれた佐藤美和が3月31日付けで教室を去ることになりました。今後も諸先生方との連携を緊密にして教室を更に発展させて行きたいと存じますので、ご協力・ご支援のほどよろしくお願いいたします。（吉村 記）

病理学（腫瘍病理）

吉野は引き続き医学部創立150周年記念事業の実行委員長として活動しております。皆様よろしくお願いたします。学会活動としては2019年1月からIAP（国際病理アカデミー）日本支部会長（理事長）に就任しました。IAPは世界各国の病理を統括する団体で、日本も会員数が1000名程度あります。昨年からは日本医学会に属するリンパ網内系学会の理事長、日本病理学会の監事としても活動しています。IAP日本支部では佐藤康晴が学術奨励賞選考委員に、田中健大が合同会議実行委員に任命されました。なお2021年には岡山でアジア太平洋地区病理学会（APIAP）の開催が投票の末決定しております。皆様のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

教室内では西村碧フィリーズが初期研修を修了し、4月から研究並びに病理研修をスタートします。また、中国からの留学生でChen Mengxiが博士課程に、Bai Zhiyuが修士課程に入学しました。西田賢治、表静馬の2名が学位取得しました。人事面では4月から表梨華が中国中央病院に常勤病理医として着任いたしました。

10月に開催された日台合同スライドカンファレンス（台北）に吉野、柳井広之が参加し、それぞれmoderator、submitterを務めてきました。11月のIAP日本支部病理学教育セミナー（広島）では吉野が教育講演を行いました。また、同月呉で開催された病理学会秋季特別総会の病理診断特別講演の座長を行いました。田中は中国合肥で行われた中日消化器内視鏡実技シンポジウムで講演を行いました。12月には第二内科と第二病理関係者が集う中四リンパ腫カンファレンスが開催され、60名ほどの出席があり、活発な議論がなされました。日本病理学会中国四国支部学術集会（広島）では柳井が希少がん病理診断講習会として小児の腎腫瘍についての講演を行い、池田知佳が演題発表を行いました。（田中 記）

病原細菌学

教育面では、1月末の修士論文発表会で医歯科学専攻の中居絵梨奈さんが、「新興病原体*Elizabethkingia anophelis*のRAW 264.7細胞に対する病原性」の題目で立派な発表を行い、修士課程を修了しました。卒後は、中学校理科の教員として活躍の予定です。10月と11月には、医学科3年生対象の細菌学の講義と実習を行いました。より高い教育効果を得るために、スライドとレジュメおよび実習内容をブラッシュアップして臨みました。松下教授は、医学科3年生対象の基礎病態演習の授業改善に取り組んでいます。10月からは、来年度の医学研究インターンシップ（MRI）で、共同研究先の米国アーカンソー大学と北里大学にそれぞれ派遣予定の医学科2年生2名が、講義終了後にやってきて、自分たちが派遣先で使用するタンパク質の精製に取り組んでいます。

研究面では、「細菌性コラゲナーゼの基礎と応用」「ボツリヌス毒素の新規鎮痛薬への応用」「ビブリオのsmall RNA発現調節機構」「新興病原体*E. anophelis*の病原性」のテーマで研究を継続しています。大学院生（博士課程のインドネシアからの国費留学生1名と、修士課程2年生1名、1年生3名）と一緒に毎日悪戦苦闘しながらも着実に研究を進めています。10月に愛媛大学で開催された第71回日本細菌学会中国・四国支部総会で、博士課程のBayuさんと美間が発表しました。2月に岡山理科大学で開催された第29回生物試料分析科学会年次学術集会で後藤助教、修士2年生の中居さん、修士1年生の西村君が発表しました。（美間 記）

病原ウイルス学

新居志郎名誉教授の第70回岡山県文化賞受賞祝賀会を平成30年9月2日に催し、大塚医学部長他ご来賓に臨席賜り、ご夫妻と同門一同が集いお祝いしました。

さらに小川寛人助教が第18回岡山医学振興会医学研究助成の公募に採択され（採択課題：果食オオコウモリから分離された新規アデノウイルスの初期遺伝子領域の機能解析および新規ベクター開発に向けた基盤研究）、12月3日受賞式に臨みました。

学会として、10月29日第64回日本ウイルス学会（京都）で、小川が上記採択課題に関連して発表しました。また、小川が第

161回日本獣医学会（9月12日、つくば）でも1件発表しました。

講義関係では、4学期には、腫瘍ウイルス学加藤教授、鳥取大学林教授のご支援を受け、今年度もウイルス学講義・実習をスタッフ全員で担当しました。恒例の岡山医学振興会特別講義（平成30年1月8日）では、新見公立大学学長公文裕巳先生（昭和49年卒）から「夢への挑戦：岡山大学発がん遺伝子治療薬の創製」についてお話を伺いました。また、今年度から4学期開講となった基礎放射線学の講義・実習については、自然科学研究支援センター光・放射線情報解析部門鹿田施設の寺東教授、花房准教授他スタッフ全員と山田で担当しました。

国際貢献では、小川がフィロウイルスについて現地調査のため平成30年11月ザンビアに赴きました。（山田 記）

公衆衛生学

平成30年10月からO-NECUSプログラムにてLiu Pinyunさんが1年間の予定で教室に加わり、研究を行っています。修士課程学生の中崎雷太さん、博士課程の三宅優紀さん、安川純代さんが学位審査を終え、学位を取得しました。

学会活動としては、学会発表として11月に島根で第62回中国四国合同産業衛生学会が、2月には第89回日本衛生学会が開催され、それぞれにおいて口頭及びポスター発表を行いました。

現在行われている研究としては、荻野教授の「越境性大気中PM2.5結合ヒトアルブミンの生体影響とその予防法の開発」（基盤研究B）、「末梢血単核球のミトコンドリア活性化を用いた新しい運動トレーニング評価法の開発」（挑戦的研究・萌芽）、「新規発酵食品の抗腫瘍効果を中心とした健康増進及び腸内環境の改善」（共同研究）、「新微量採血デバイスによる採取血液を試料とした公衆衛生分野における疾病予防を目的とする新しいバイオマーカーおよび予防法の開発研究」（共同研究）、伊藤助教の「悪性上皮腫リスクバイオマーカーとしてがん抑制因子BAP1活性検査の実用化研究」（基盤C・代表）、「悪性新生物対応型精密RNA標的システム（POiRT System Elimination type: PRET）の開発」（橋渡し研究戦略的プログラム）、長岡助教の「抗アレルギー性ラクトフェリンサプリメントのアレルギー機序に関する研究」（若手研究）が活動中です。

教育活動としては、大学院博士課程講義「臨床研究・ゲノムインフォマティクス実践論」が行われました。

教室の研究活動・論文に関しては、HP（<http://square.umin.ac.jp/okayamadph/index.html>）をご参照ください。

（長岡 記）

免疫学

人事面では2018年9月で、O-NECUSプログラムの第4期生としてZhao Weiyangさんが1年間の配属期間を修了しました。2019年10月から大学院生として教室に戻ってくる予定ですので、引き続き研究活動での活躍を期待しております。2019年3月で、博士課程大学院生の宮本先生（消化器外科）は研究生活を終え臨床に戻られます。癌に対する化学療法と免疫細胞の多機能性との関係性を、基礎と臨床研究の両面から解析すること

に尽力されました。今後もより一層のご活躍をお祈り申し上げます。

研究面では鶴殿教授が日本ハイパーサーミア学会第35回大会（福井）、AIR in Sapporo 血管新生と腫瘍免疫研究会（北海道）、第13回中部大学ライフサイエンスフォーラム（愛知）、The 4th RIKEN-Tsinghua Joint Symposium（横浜）、IO Expert Seminar in Osaka（大阪）、第35回呼吸器疾患研究会（広島）、第16回日本免疫治療学会学術集会（東京）で招待講演を、第91回日本生化学会大会（京都）、第77回日本癌学会学術総会（大阪）、第33回日本糖尿病合併症学会（東京）、第13回臨床ストレス応答学会大会（北海道）、第12回 in vivo 実験医学シンポジウム（東京）、第41回日本分子生物学会年会（横浜）、第59回日本肺癌学会学術集会（東京）でシンポジストとして口演を行いました。西田が第13回臨床ストレス応答学会大会（札幌）、The First International Symposium on Immunology and Cancer in Okayama（岡山）で口頭発表、第24回国際個別化医療学会学術集会（東京）、第47回日本免疫学会学術集会でポスター発表を行いました。宮本が第77回日本癌学会学術総会（大阪）でポスター発表を行いました。さらに西田と鶴殿教授は2-3月にKEYSTONE SYMPOSIA（米コロラド、伊フィレンツェ）でポスター発表を行います。

教育面では、1-2月の免疫学講義・実習を無事に終えました。来年度のMRIを前に、医学科2年生の山本君が海外研究室配属に向け、また川月君が自主的に毎週の抄読会に参加しており、免疫学の勉強に励んでおります。（工藤 記）

法 医 学

法医学実務面では、昨年1年間の剖検数は181体となり、一昨年の総剖検数を大幅に下回りました。一昨年は取り扱い数がやや増加する傾向がみられていましたが、この傾向は一時的なものだったようです。年が明けてから2月15日までの剖検数は38体と、昨年をやや上回っています。

今年の2月22日と23日には、宮石教授が会長として第25回日本SIDS・乳幼児突然死予防学会学術集会を、岡山駅西口にて2016年新築・移転した岡山県医師会館において開催予定です。

教室内では、長年非常勤研究員として教室に在籍している、谷口 香先生が、12月1日付けで助教として教員に加わりました。三浦助教は、今年の3月から12月までドイツのハンブルグ大学法医学研究所Püschel教授のもとに留学予定です。同研究所には、かつて宮石教授も助教時代留学され、我が法医学教室とは縁が深く、共同研究も多く行っています。三浦助教には、今後の活躍の糧となる多くの貴重な経験を積み、無事な帰国を望みます。また、博士課程大学院最終年度の山崎雪恵さんが、この2月に博士論文の審査に合格し、3月には大学院を修了予定です。ミャンマーからの留学生THU THU HTIKEさんは、シアンに関する論文執筆に取り掛かっており、最終年度となる来年度には論文を投稿し、学位審査に臨む予定です。昨年の4月から博士課程に進学した小林智瑛さんは、博士論文のテーマとなるミオグロビンの免疫組織染色等の研究を行っています。そのほか、この11月からは、杉山早紀さんを新たに技術

補佐員に迎えました。なお、解剖補助やプランクトン検査などを担当していた技術職員の難波令匡氏は11月末で退職いたしました。

昨年末の同門会総会・忘年会は、12月1日（土）にメルパルク岡山で開催いたしました。昨年に引き続き石津名誉教授にご出席いただきましたが、このところ続けてご出席の妹尾昌美先生は、今回はご欠席でしたが、全体の参加者数は昨年と同じ18名となり、皆様のお話も盛りあがっておりました。

学術面では、学会発表としては、第97回ドイツ法医学会、第35回日本法医学会学術中四国地方集学会、第1回日本法医学病理学会学術全国集会、第30回日本中毒学会中国四国地方会等において教室員が発表を行いました。（山本 記）

医療政策・医療経済学

今年度は、修士2年の大学院生が3人（浅井・岸川・水田院生）いて、年末年始を含めて、彼らの修士論文の作成に私もかかわった。3人は無事に論文審査を終了し、まもなく卒業を迎える。彼らの頑張りに敬意を表するとともに、これからの、新たな道、新たな土地での仕事や暮らしを、陰ながら応援していきたい。

医療政策では、すでに各都道府県で地域医療構想が策定されている。2025年を目標として、医療供給の現状にあるべき姿に着地させるのが目的である。私も岡山県医師会の推薦により地域医療構想アドバイザーをしている。県内での議論が活性化するようにデータ提供をしたり、議論を解きほぐしたりする役割である。わが身の能力不足を痛感するのであるが、何とか本県医療の発展に貢献できるように微力を尽くしたい。

長野県立病院機構の評価委員として木曾病院などの病院視察や経営評価に携わった。岩手県立病院の経営委員会にも参加している。一般のイメージとは異なり、ここ数年、医療費は伸び悩み、病院経営は危機的な状況にある。今年度は診療報酬本体のプラス改定の影響もあり、急性期病院では経営改善をしている病院もあるようだ。

教養の社会実践型講義として「多職種連携と地域包括ケアのワークショップ」を笠岡諸島の北木島などで行った。西江保健師、本学修士OBの今城さんなど笠岡市役所の皆様のご協力に深く感謝する。「生命倫理学入門」「医学入門（医療と社会）」という教養講義を行い、医学部では3年生に「医療政策・地域医療学」の講義を地域医療人材育成講座の先生方で行った。

昨年9月には地域包括ケアシステム学会で、今年1月には県医師会の地域包括ケアシステム研究会で講演を行った。2月の岡山市によるSDGsフォーラム2019で分科会コーディネータを務め、岡山市の宮地保健師、金融や薬局の有識者と親交を深めた。「季刊ろうさい」に創刊10周年記念論文として「日本の医療の未来を考える」を執筆した。（浜田淳 記）

分子腫瘍学

次年度の医学研究インターンシップ（MRI）について、学主3回生の関家滉太が、華東理工大学薬学院（上海）の劉建

文教授の研究室へ留学予定のため、2月から実験スキルを磨くとともに、研究準備を始めたところです。学会参加は、第41回日本分子生物学会年会〔2018年11月28日-30日、パシフィコ横浜〕において、伊藤佐智夫助教が『肺癌における癌遺伝子候補MYNNとp53の統合的解析』、笹井香織助教が『細胞分裂期制御タンパク質による新規転写調節機構の解明』のタイトルでそれぞれポスター発表をおこないました。片山博志准教授は、『Aurora-A functional interaction in mammary carcinogenesis』: 2018年中医薬がん予防国際フォーラム〔2018年10月19日-22日、上海〕、『Aurora-A signaling cascade regulating transactivation of mitotic genes』: 7th Meeting of the Asian Forum of Chromosome and Chromatin Biology〔2018年15日-17日、インド、ジャワハルラール・ネルー先端科学研究センター (JNCASR)〕の2件の海外講演をおこないました。その他にも同地大学生へのセミナー講演など、活発な研究および教育交流をおこないました。大内田守准教授は、てんかん治療研究振興財団 第30回研究報告会にて、『年齢依存性てんかん性脳症の分子病態解析』〔2019年3月1日、大阪〕を発表しました。(堺 記)

腫瘍ウイルス学

当教室の本年度下半期の活動内容について報告します。研究面では、上田 優輝助教がイタリア・メッシーナで開催された2018 International Meeting on Molecular Biology of Hepatitis B Virus (2018年10月3~6日)で研究成果を発表し、国内外の研究者と熱心に討論を行いました。また、第10回日本RNAi研究会&第5回日本細胞外小胞学会(広島市、2018年8月29~31日)で團迫が、第66回日本ウイルス学会学術集会(京都市、2018年10月28~30日)で谷 焯琳院生、小野村 大地院生、今井大誉院生、佐藤 伸哉助教、上田助教と團迫の6名が日頃の研究成果を発表しました。このように、教室員は国内外の学術集会に積極的に参加し、日頃の研究成果の発表と情報収集を熱心に行っております。

また、博士課程4年生である今井院生は2019年2月4日の学位審査を無事に終え、2019年3月25日に開催される授与式にて学位記を授与されることになりました。

当教室の研究活動の詳細などについては、教室のホームページ (<http://www.okayama-u.ac.jp/user/med/dmb/index.html>) をご覧ください。当教室は、メンバー、プロジェクトともに一層充実して研究及び教育に取り組んでいます。これまで以上に、御指導、御支援をよろしくお願いいたします。(團迫 記)

細胞生物学

〔人事〕新しいメンバーとしてAcosta gonzalez Herik Rodrigoさん(博士課程)、丸山顕嘉さん(客員研究員)、Jin Zhouさん、Yoni komalasariさん(短期留学生)、Karolina Bajkowskaさん(短期学部留学生)、が研究室のメンバーに加わりました。また、上記メンバーの他にも2018年12月から1ヶ月間、インドネシアのFaculty of Medicine Udayana大学から特別聴講生として

Kenny Satrioさん、Andra Yusariさん、Agastyaさん、Hendri Aryadiさんの4人を受け入れました。

〔研究成果発表〕村田等講師の論文がThe Journal of Biological Chemistryに、木下恵理助教の論文2報がInternational Journal of Cancerに、博士課程のI Wayan Sumardikaさんの論文がMolecular Carcinogenesisに掲載されました。また、私山本と博士課程の高松仁志さんの共著論文がOncology Researchに、友信奈保子さんの論文がBiochemistry and Biophysics Reportsに採択されました。これらの他にも光井洋介さんと陳友誼さんの論文を雑誌に投稿し採択待ちの状態となっています。

〔受賞・研究資金の獲得状況〕阪口政清教授がテルモ生命科学芸術財団2018年度研究助成に、私山本が両備禮園記念財団平成30年度第40回研究助成に採択されました。

今後も教室員一同、教室の発展に励んでいきますので皆様方の御指導、御支援をよろしくお願い致します。(山本 記)

細胞化学

当分野では、Photodynamic therapy (PDT) によるがん治療の基礎研究、ミトコンドリア機能と細胞機能発現の解析、動脈硬化の発症機序解明と分子イメージング技術(体内診断法)の確立、がんの新規画像診断・治療法(Theranostics)の確立、酸化脂質を中心とするメタボミクス研究、低酸素により誘導される細胞外マトリックス分解酵素であるADAMTSL1に関する研究が、次世代がん医療創生研究事業(AMED)、挑戦的萌芽研究(JSPS)、さらには、特別電源所在県科学技術振興事業(岡山県)などの公的資金によって実施されています。これらの研究については、細胞化学、中性子医療研究センター、産学官連携センターの研究スタッフ、工学部、薬学部などの学内研究者、および、日本人大学院生(博士課程)、マレーシアからの留学生(博士課程)、さらには、京都大学の共同研究者が従事しています。

教育関係では、医学科1年次生対象の医学生物学、基礎医学入門、2年次生対象の生化学、分子医学の講義・実習を受け持ち、教養科目「生命の不思議2」では、津島キャンパスに赴いて授業を行いました。いずれの科目も学生が生命科学に深い関心を抱き理解できるよう、最新のトピックを交えるなど様々な工夫を加え取り組みました。3月の大学院特別講義では、保田晋助先生(北海道大学大学院医学研究院免疫・代謝内科学教室准教授)から自己抗体による血栓症の病態とその治療法について、また、佐藤英介先生(鈴鹿医療科学大学薬学部医化学講座教授)からはNETosisの分子機構と様々な疾患との関連について大変興味深いお話を伺うことが出来ました。

学会関係では、日本生化学会、日本癌学会、日本核医学会、世界分子イメージング学会(WMIC)において、がんTheranosticsに関する研究成果を発表しました。(小淵 記)

消化器・肝臓内科学

岡田裕之先生は教授に就任4年目を迎えられましたが、就任当初の情熱を忘れられることなく、日々の診療、研究、教育に

多忙な日々を過ごしておられます。今年は8月に日本消化器内視鏡学会セミナー、10月に内科学会中国地方会の会長を務められる予定です。

人事ですが、昨年10月から炎症性腸疾患センターが中央診療部門に格上げされたことに伴い平岡佐規子(H6)が同センター准教授に就任、また池田房雄(H7)が教室の講師に就任、7月には三朝病院へ半年間出向していた友田健(H16)が助教に採用され、各先生とも臨床および研究面で大いに活躍しております。また平井麻美(H22)、松枝克典(H24)が一年間の病棟医生活を終え、研究生活に入りました。入れ替わりに岡寿紀(H24卒)、里見拓也(H24卒)が帰局し、消化器内科の高みを目指すべく日々研鑽を積んでおります。

教室内での役割人事と致しましては昨年4月より岩室雅也(H14)が外来医長に、10月より川野誠司(H11)が医局長の任務についております。

これからも、消化器内科の発展のために医局員全員で精進し、同窓の皆様にご協力いただけるよう努力致しますので、引き続き御指導・御鞭撻の程よろしくごお願い申し上げます。(川野 記)

血液・腫瘍・呼吸器内科学

岡山大学同窓の先生方におかれましては、平素から大変なご支援をいただき御礼申し上げます。平成30年10月から3月における当教室の現況の報告をさせていただきます。

高齢者の増加に伴い2人に1人ががんになる時代となっております。がん診療は、従来の入院から外来にウエイトが大きくなりつつあります。がん治療を外来で行う機会が増えたため、腫瘍センター機能の充実が求められております。教授に昇任した田端腫瘍センター長をはじめ当教室スタッフが岡山大学および中四国のがん診療の発展に寄与すべく研鑽しております。

また血液悪性疾患、肺癌ともにゲノム変異に合わせた分子標的薬を投与する時代となっております。ご承知のとおり平成30年2月に岡山大学病院はがんゲノム医療中核病院に指定されましたが、がんゲノム外来、クリニカルシーケンスの結果を検討するエキスパートパネルに当教室から西森久和助教、遠西大輔助教、腫瘍センター長田端教授、久保寿夫助教が参画しています。今後とも当教室は、臨床と研究の両面において岡山大学病院のがんゲノム医療に貢献したいと考えています。

本庶佑先生が、腫瘍免疫療法の実用化へつながらるPD-1を特定した業績からノーベル医学賞を受賞されたことは今年度の日本医学界の大きな慶事かと思えます。今後も新たな腫瘍免疫療法が開発、実用化されると期待されております。骨髄移植は腫瘍免疫を利用した治療法の一つですが、当院は厚生労働省から造血幹細胞移植推進拠点病院に指定され国立大学病院の中でも非常に多数の移植を行っております。最後の砦として他施設で難渋して当科へ転院、治療を受けられる患者さんも多いのが実情であり、BCRのみならずICUの先生方、メディカルスタッフのお力も借りながら、白血病をはじめとした難治性血液悪性疾患の根治を目指し診療を行っております。さらにキメラ抗原受容体発現T細胞(CAR-T細胞)療法を実施できる全国でも数少ない施設に選定され、難治性の急性白血病や悪性リンパ腫に

対して治療実績を積んで行っております。今後より安全に治療を提供できるようにノウハウを蓄積していく所存です。当教室は新しい治療選択を創出すべく多数の臨床試験、治験への参加、また臨床中核拠点病院の一員として臨床研究を主導、運営しております。ガイドラインを変えるような成果の創出を継続していきたいと思っております。

教室の実務体制は、医局長 大橋圭明、副医局長 西森久和・頼冠名・久保寿夫、外来医長 西森久和、病棟医長 市原英基(西8)・浅田騰(西3BCR)、教育医長 遠西大輔が担当しております。10月より阿部将也が医員として帰局しました。引き続きご支援、ご指導の程どうぞご願ひ申し上げます。

(大橋 記)

腎・免疫・内分泌代謝内科学

和田淳教授は、教育・臨床・研究・学会活動を初め、広く積極的に活動を行っております。

当科は、基礎研究、臨床研究問わず、幅広く研究活動を行っており、とくに和田教授が研究代表者である「尿中糖鎖プロファイリングによるIgA腎症の診断法の開発」は革新的医療シーズ実用化研究事業(AMED)に採択され、IgA腎症の新たなバイオマーカーの開発が期待されます。

教室員は国内外問わず大変活発に学会発表を行っております。三瀬広記先生が岡山県医師会学術奨励賞、Japan Kidney Council 2018高得点演題・優秀発表賞を、森本栄作先生が日本内分泌学会第19回中国支部学術集会若手研究奨励賞(Young Investigator Award)を、藤澤諭先生が日本下垂体研究会第33回学術集会最優秀演題賞をそれぞれ受賞されました。

人事面では、平成30年10月より利根淳仁助教が岡山済生会総合病院へ赴任されました。平成31年1月より村上和敏先生が留学を終え帰国し邑久光明園赴任後、倉敷中央病院へ赴任され、原孝行先生が三朝地域医療支援寄付講座助教に採用されています。

最後になりましたが、今後とも同門並びに同窓の諸先生方の御指導・御支援宜しくご願ひ申し上げます。(稲垣 記)

精神神経病態学

平成30年度下半期の当教室のご報告です。

来年度医局長は井上真一郎、病棟医長は藤原雅樹、外来医長は松本洋輔、教育医長は岡久祐子という布陣で教室運営を進めていく予定です。

秋の学会シーズンでは各先生が日本サイコオンコロジー学会、臨床精神薬理学会、日本総合病院精神医学会、中四国精神神経学会などで発表されました。後期研修医ら若手5名もそれぞれ活発に発表しました。

昨年12月8日(土)にプラザホテルで第122回岡山大学大学院精神神経病態学教室同門会臨床集談会に100名を超える方々に参加いただきました。一般講演ではいつもと同じく活発な議論がみられました。また、今回は同門の石原武士先生が川崎医科大学精神科学教室、稲垣正俊先生が島根大学医学部精神医学

講座の教授に就任されたことを記念して、お二人にそれぞれご講演いただきました。

教室人事では、来年4月より小田幸治が福山市民病院に、吉田美保が香川労災病院に、富永悟が府中市立湯ヶ丘病院に、山田聡が高岡病院に、山田裕士が積善病院にそれぞれ赴任予定です。また、酒本真次が4月よりジョーンズホプキンス大学に留学予定です。

4月からの平成31年度専門医プログラムでは7人の専攻医を迎える予定です。初期研修や学生への指導も含め臨床指導にも重点を置いています。また、4名（博士課程2名、修士課程1名）が大学院に入学し研究を開始します。

今後ともご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

(川田 記)

小児医科学

岡山大学大学院小児医科学教室と岡山大学病院小児科の現況を報告させていただきます。

当教室は中国四国の基幹としてこの地域の診療、教育、研究を支える責務を全うしています。小児診療では平成24年9月に設置された「小児医療センター」を基盤として最重症児への高度医療をさらに進めています。当センターは小児科、小児外科、小児神経科、小児循環器科、小児血液・腫瘍科、小児歯科、小児麻酔科、小児放射線科、小児心臓血管外科が中心になり、大学病院の多くの診療科との横の連携を發展させています。一方、岡山大学病院は中国四国の各大学病院、総合病院、クリニックと綿密に連携しながら、子どもたちとご家族に安心安全の高度医療を提供しています。

教育では学生だけでなく若手～中堅医師の内発的進化を促すことを第一義に全員が力を尽くしています。当教室への「新入局者」はここ2年間で17名（男/女：11/6、岡山大学卒業/岡山大学以外の卒業：8/9、昭和58年卒～平成30年卒）です。現在、来年度の岡山大学病院「小児科医専門研修プログラム」への希望者を募っていますが、ここ3年間で私たちのプログラムを開始した若手医師は計20名でした。この数字は中国四国地域で最多です。一方、岡山大学病院小児医療センターMC（マネージメントセンター）には計30名が登録してくれています。

研究では英語論文報告が継続して充実しています。一般小児科ではJournal of Pediatrics、Acta Paediatrica、感染免疫ではClinical Experimental Allergy、Journal of Medical Virology、心臓血管ではCirculation Research、血液腫瘍ではAnnals of Hematology、内分泌代謝ではJournal of Endocrinology and Metabolism、成育新生児ではEarly Human Developmentで原著論文が発表されています。ここ数年間の総インパクトファクターは年間100前後を維持しています。他分野他領域の先生方の多大なご支援もあって、ここ4年間で医学博士を取得した当院小児科医師は15名に達しました。

大きな学会としては、2018年(昨年)10月20日(土)～21日(日)に岡山コンベンションセンター、岡山県医師会館にて「第55回日本小児アレルギー学会学術集会」を開催させていただきました。

た。当番会長は小児急性疾患学講座の池田政憲教授が担当しました。10月21日にNobel Laureateになられたばかりの京都大学高等研究院の本庶 佑特別教授に特別講演をしていただいたことは、2018年度の当小児医科学教室の光輝燦然とした成果でありました（下の写真はその時のものです）。

現時点（2019年2月）の医局長は馬場健児、教育医長は岡田あゆみ、病棟医長は近藤麻衣子、外来医長は吉本順子、研究医長は嶋田明です。若手～中堅医師がそれぞれの立場で小児医科学教室、大学病院小児科を誠実に支え、發展させていることは小児科HP (<http://www.okayama-u.ac.jp/user/pedhome/index.html>) に記述されています。ご覧いただけましたら幸いです。（塚原 記）



発達神経病態学

小林勝弘教授以下、秋山倫之准教授（てんかんセンター副センター長、医局長併任）、岡牧郎講師（教育医長）、遠藤文香講師（外来医長）、柴田敬助教（病棟医長）の体制で、教室運営を行っております。

医局人事に関しては、10月より柴田敬が助教・病棟医長に就任し、秋山麻里が病棟医長を終えて医員となりました。

診療については、今までと変わらず、小児医療センター、てんかんセンター、結節性硬化症ボードの所属診療科として横の連携を深めております。てんかんと発達障害という診療の2本柱に加え、その他の神経疾患の診療も精力的に行っております。

学会活動では、小林教授が12月にアメリカてんかん学会（開催地：ニューオーリンズ）で発表しました。また、日本てんかん学会（発表：小林、秋山倫之、柴田、花岡、金）、日本先天代謝異常学会（発表：秋山倫之）、日本臨床神経生理学会（発表：秋山麻里、水野、松田）や地方会でも多数の発表を行いました。また、第97回岡山小児てんかん懇話会、第49回中国・四国点頭てんかん研究会を事務局として運営いたしました。

研究面では、てんかんや神経生理学、発達障害、代謝物質分析等に関する臨床研究を引き続き行っております。また、限局性皮質異形成II型による難治てんかんに対する医師主導治験も開始しております。

なお、来年は小林教授を会長として「乳幼児けいれん研究会国際シンポジウム」を主催予定です。今後とも同門の諸先生方のご指導・ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。（秋山 記）

消化器外科学

平成30年9月～平成31年3月の教室だよりをお届けします。

9月15日には、岡山大学外科講座開設130年の記念となる第5回岡山大学外科同窓会・第17回岡山大学外科MCセミナーを

開催し、多くの先生方にご参加いただきました。また、10月7日には第84回岡山大学医学部第一外科教室開講記念会を開催し、鳥取大学医学部 器官制御外科学講座 病態制御外科学分野教授 藤原義之先生に「消化器癌治療の方向性」、また同門の国際医療福祉大学大学院医学研究科 基礎医学研究分野 分子生物学 教授 西村渉先生に「もうすぐ100周年の教室へ：2年目の分子生物学教室の挑戦」の演題で講演いただきました。平成31年1月27日には、岡山大学関連の消化器外科医が一堂に会する第7回消化器外科フォーラムが開催され、150名を越える多くの先生方にご参加いただきました。皆様からいただきましたご支援・ご協りに厚く御礼申し上げます。

人事面では、信岡大輔が香川県立中央病院へ異動しました。病棟勤務を終えた戸嶋俊明は高知医療センターへ、研究を終えた石川 亘は福山市民病院へ、岡田 剛は津山中央病院へ赴任、納所 洋は小児外科助教に着任しました。また、病棟勤務を終えた金谷信彦が米国ボストンのハーバード大学へ留学しました。臨床研修を終えた小林照貴、梶原義典、高橋一剛、橋本将志、藤 智和、吉本匡志は消化管外科・肝胆膵外科にて病棟で日夜奮闘しています。小松泰浩、田淵幹康、津村朋子、西山岳芳、西脇紀之、三村直毅は病棟勤務を終え、大学院生として研学生活に入りました。

診療では、手術支援ロボット ダ・ヴィンチを使った胃癌手術を着実に進めており、食道癌手術もすでに保険診療で行えるようになってきました。研究・学会活動では、例年通り、国内外の各種学会・研究会において日頃の成果を多数発表しております。食道癌に対するテロメライシンによるウイルス治療の臨床研究も無事終了し、平成31年1月にサンフランシスコで開催された米国臨床腫瘍学会消化器癌シンポジウム (ASCO-GI) で最終報告を行いました。

副院長として多忙な藤原俊義教授のもと、教室員一同団結し、臨床・研究・教育におよ一層努力していく所存です。今後とも教室の運営にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、同門の先生方のご健勝とご繁栄をお祈り申し上げます。(吉田 記)

呼吸器・乳腺内分泌外科学

昨年9月、岡山大学外科としては阪田快太郎教授以来130周年を迎え、岡山大学外科同窓会で大々的にお祝いをいたしました。3外科教室合同の岡山大学外科マネージメントセンターは順調に運営され現在まで194名が登録されています。昨年度より岡山大学広域外科専門研修プログラムを開始いたしました。今春より18名が本プログラムで修練を開始する予定です。

また2018年度は旧第二外科学教室の初代西川義英教授が1918年(大正7年)4月に就任以来100周年の年であり、例年の同門会は2018年11月に西川義英初代教授就任100周年記念と銘打って開催いたしました。西川教授は100年前に留学を終え帰国する途中のフランスで、自動車事故で瀕死の状態となった2名の皇族(明治天皇お孫様など)を数か月間治療に従事していたという当時の新聞記事を見つけることができました。この件について宮内庁に確認したところ、当時の治療経過のやり取り

などの資料が見つかりました。詳細は2018年度の岡山大学外科同窓会誌、第二外科・心臓血管外科同門会誌に記載されております。また、第二代津田誠次教授(1925年教授就任)の岡山市北区広瀬町の当時の自宅が改装され、この度“博士の家”として一般に利用できることとなりました。

この期間の教室の人事関連としては、岡山大学平成4年卒業の伊野英男が岡山大学大学院医歯薬学総合研究科附属医療教育センター教授に就任いたしました。豊岡教授の体制になり、スタッフで協議を重ねた結果、教室の【理念】として“外科医学の革新的創生による医療の発展”、その【心構え】として“真摯”、“利他”、“向上”を掲げ、さらに【教室のあり方】として、“人が集い、互いが高めあい、努力が報われる教室”といたしました。この【理念】【心構え】【教室のあり方】を教室員一同忘れることなく日々研鑽を続けております。

同窓会の先生方には今後とも引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。(山根 記)

整形外科

平成30年8月から平成31年3月までの教室だよりをお届けします。

教室の大きな行事としまして、平成30年8月18日に岡山大学整形外科桃整会夏季セミナーを開催し、遠藤裕介医師、佐野敬介医師、鉄永智紀医師、山田和希医師による4題の教育研修講演と山形大学医学部整形外科学講座の高木理彰教授と福岡大学医学部整形外科学教室の山本卓朗教授による特別講演があり、多数の参加がありました。

10月14日には岡山県医師会館三木記念ホールにて「骨と関節の日」のイベントが行われ、尾崎敏文教授による「がんとロコモティブシンドローム」、鉄永倫子助教による「腰痛を知らう!!」、関西福祉大学教育学部の吉岡哲准教授による「日常生活に取り入れよう!足腰づくり体操」の講演があり、200名にも及ぶ多数の市民の方の参加がありました。

また、平成30年12月8日に岡山大学整形外科桃整会総会、桃整会学術講演会岡山運動器フォーラムならびに忘年会を開催しました。長崎大学整形外科の尾崎 誠教授の「人工股関節の最近の話題と機種選択」及び慶應義塾大学整形外科学教室の中村雅也教授による「難治性脊髄疾患に対する治療戦略と将来展望 - 脊髄腫瘍と脊髄再生 -」の特別講演があり、150名を越える盛大な会となりました。

人事面では平成30年10月から専門研修プログラムで古谷友希、片山晴喜、板野拓人、佐藤雄亮が研修しております。平成31年1月に大学院生の日野知仁が鳥取市立病院へ異動になり、沖田駿治が新潟県立リウマチセンターへ国内留学しました。

学術面では平成30年9月に呂智超、12月に柏原尚子、平成31年3月に上原健敬、三宅孝昌、宇川 諒、山田和希、釜付祐輔、日野知仁、沖田駿治、増田 真が学位を取得しました。

最後になりましたが、同門の諸先生方の益々の健康とご活躍をお祈り申し上げます。(島村 記)

皮膚科学

2018年9月から学術面、人事面についてご報告いたします。

9月1日、2日第3回皮膚科感染症サマースクールにて『手術映像を活用した皮膚外科研修の工夫』の題目で山崎が講演しました。

9月9日第42回岡山研究皮膚科フォーラムにて森実が講演しました。

10月5日岡山メラノーマフォーラム2018を開催し、山崎が座長を務めました。

10月6日、7日第82回日本皮膚科学会東部支部学術大会にて安富が発表しました。

11月2日第3回長崎皮膚悪性腫瘍を考える会にて『メラノーマセンターにおける診療・連携・研究・教育』の題目で山崎が講演しました。

11月3日メラノーマ分子標的療法セミナーにて『BRAF/MEK阻害剤の治療経験 - 1次と3次以降治療での比較 -』の題目で山崎が発表しました。

11月3日第14回中国研究皮膚科セミナーにて『アトピー性皮膚炎患者における遺伝子多型および角層中セリンプロテアーゼ活性について』の題目で野村が発表しました。

11月10日、11日第70回日本皮膚科学会西部支部学術大会にて『乾癬病変部角化細胞におけるTNF- α /IL-17A/IFN- γ の相乗作用』の演題で森実が講演しました。また、高橋、光井、石井、森田、神野が発表しました。

11月14日日常診療における乾癬治療を考える会にて『IL-17Aを標的とした乾癬診療・研究』の題目で森実が講演しました。

11月16日～18日第48回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会にて『メシル酸ガレノキサシン水和物（ジェニナック）による固定薬疹の一例』の演題で石井が発表しました。

11月20日第45回岡山膠原病研究会にて『円板状エリテマトーデスに対するヒドロキシクロロキンの使用経験』の題目で安富が発表しました。

11月24日Atopic Dermatitis IL4/13 Forum in Okayamaにて『岡山大学病院でのデュピクセント使用経験』の題目で川上が講演しました。

11月24日第13回医療の質・安全学会学術集会にて『当院における散布疹を伴う帯状疱疹への感染防止策について』の題目で橋本が発表しました。

12月1日、2日第82回日本皮膚科学会東京支部学術大会にて『ハンセン病LL型新規発症の1例』の演題で篠倉が発表しました。

12月12日MOMO太郎セミナーにて『皮膚科医の診（見）るPsA』の題目で森実が講演しました。

2019年1月19日第43回岡山研究皮膚科フォーラムにて『乾癬病態からみた新規サイトカイン、IL-39の役割』の題目で立花が講演しました。

2月17日市民公開講座にて『メラノーマと免疫療法』の題目で山崎が講演しました。

2月25日難病診療連携拠点病院研修会で『皮膚科が関わる指

定難病』の題目で森実が講演しました。

人事面では2018年9月～2019年3月の期間で中川がLeiden University (The Netherlands)へ留学。2018年10月に藤本と2019年2月に森田が産休に入りました。

新年度からは転局併せ11名の新入局員が決定しており、賑やかな春を迎えることができそうです。同門の先生方のお力添えなしには成り立たない医局運営でございますので、引き続きご指導・ご鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

(平井 記)

眼科学

当科に関係する主な学会等の発表や学会・研究会の開催については、2018年9月1日（土）に、第98回岡山大学眼科研究会『マルチフォーカルIOLのすべて』が、ホテルグランヴィア岡山にて開催されました。井上眼科 井上康先生、広田眼科 廣田篤先生、稲村眼科クリニック 稲村幹夫先生にご講演いただきました。2018年10月11日（木）～14日（日）にかけて、第72回日本臨床眼科学会が、東京国際フォーラム・JPタワーホール&カンファレンスにて開催されました。当院からは、松尾、森實、内藤、濱崎、細川、塩出、藤原美幸、柴田、荒木が発表しました。2018年12月7日（金）～9日（日）にかけて、第57回日本網膜硝子体学会総会が、国立京都国際会館にて開催されました。当院からは、森實、木村、塩出、神崎が発表しました。2019年2月9日（土）に、第99回岡山大学眼科研究会『抗VEGFが効かなかったら？』が、ホテルグランヴィア岡山にて開催されました。東京女子医科大学 丸子一郎先生、九州大学 中尾新太郎先生、名古屋市立大学 吉田宗徳先生にご講演いただきました。学会を通じて臨床や研究に関わる有益な情報や新知見が得られたかと存じます。

最後になりましたが、患者様をご紹介くださる各診療科の先生方、近隣の関連病院や診療所の先生方にこの場を借りてお礼を申し上げます。引き続きご指導ご鞭撻の程、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

(濱崎 記)

耳鼻咽喉・頭頸部外科学

耳鼻咽喉科教室現況をお知らせいたします。学会関係では日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会、日本口腔・咽頭科学会、日本鼻科学会、日本耳科学会、日本人類遺伝学会、日本聴覚医学会、日本気管食道科学会、日本めまい平衡医学会、日本頭頸部外科学会、日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会などで医局員が多数の演題を発表いたしました。

人事関係では4月より藤さやかが岡山赤十字病院、野田実里が国立岩国医療センターへそれぞれ異動しました。

臨床面では頭頸部がんセンターを中心に頭頸部腫瘍診療を積極的に実施しており、耳科手術（含人工内耳）、内視鏡下鼻手術も引き続き実績を伸ばしております。今後とも同門の諸先生がたのご支援をよろしくお願ひ申し上げます。

(片岡 記)

放射線医学・放射線部

放射線医学教室の近況をご報告致します。2018年12月に平木隆夫准教授が研究実績を評価され、研究教授の称号を付与されました。平木研究教授主導で行われた特定臨床研究「ロボット（Zerobot®）を用いたCT透視ガイド下生検：単施設単群非盲検前向き実行性確認試験」は予定症例数10例を無事終了し、現在の次のステージに向かっております。また、4月より生口俊浩が放射線部准教授に昇進し、小児放射線科科長は新家崇義先生から片山敬久先生となりました。

4月に4名の新入医局員を迎えることができました。大森真理先生、大槻花穂先生、鎌村真帆先生、長尾良太先生です。大槻先生と長尾先生は岡山大学病院で、大森先生は岡山赤十字病院で、鎌村先生は岡山ろうさい病院で、それぞれ放射線科専門医を目指し後期研修を開始しています。

4月の人事異動として、岡山大学病院から稲井良太先生が福山市民病院に、大川 広先生が香川県立中央病院に、田邊 新先生が岡山医療センターに、湯浅直未先生が岡山赤十字病院にそれぞれ赴任されました。また、三道幹大先生は母校の九州大学放射線科へ移られました。高知医療センターから児島克英先生、福山市民病院から丸川洋平先生、坪井有加先生、岡山医療センターから梶田聡一郎先生、岡山赤十字病院から左村和麿先生、岡山ろうさい病院から戸田憲作先生、倉敷成人病センターから渡邊菜津子先生、香川県立中央病院から北山貴裕先生が岡山大学病院に異動しました。4月から6ヶ月間、新家崇義先生がハイデルベルグ大学（ドイツ）にて海外研修をしております。医局役員に関しては、医局長生口俊浩、副医局長松井裕輔先生、外来医長富田晃司先生、教育医長正岡佳久先生で変更はありませんが、病棟医長は片山敬久先生から宇賀麻由先生に変わっております。

大学外での異動は、岡村 淳先生が川崎医科大学総合医療センターからPETセンター長として高知医療センターへ、沼哲也先生が住友別子病院から放射線第一病院へ、馬越紀行が国立がん研究センター中央病院から福山市民病院へ赴任しています。それぞれの先生方が、新天地ですばらしい御活躍をされていることと思います。

当科では、金澤 右教授のもと画像診断、IVR、放射線治療において、高度先進化した医療を安全に提供することを心掛けております。皆様の御力添えを受けながらこれからも日々精進してまいりますので、御指導御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。以上、簡単に教室の近況を報告させていただきました。

(生口 記)

産科・婦人科学

増山 寿教授をはじめ教室員一同、臨床、研究、教育へと日々励んでおります。昨秋からも日本産科婦人科内視鏡学会、中国四国産科婦人科学会、日本女性医学学会などの学会・研究会で、教室から多数の演題を発表いたしました。ひき続き「チーム岡大」として、同門が一丸となって中国四国地方の産婦人科医療の充実に努めて参ります。

続いて人事の御報告ですが、10月には岡山赤十字病院の林裕治部長が退職し非常勤医に。岡山大学の鈴木 泉が岡山済生会総合病院に異動。岡山済生会総合病院の高原悦子が福山市民病院に異動。福山市民病院の春間朋子をご主人の留学に伴いフランスに渡航いたしました。また大学病院で研修をしていた片山沙希が広島市立広島市民病院、三苦智裕が中国中央病院にそれぞれ異動。後期研修2年目の谷村史香が津山中央病院に異動。後期研修3年目の津山中央病院の杉井裕和、広島市立広島市民病院の三島桜子が帰局し、研修の仕上げに入りました。さらに岡山赤十字病院の佐々木佳子、倉敷市民病院の岩永優子、岡山大学の石川陽子が1月から、姫路聖マリア病院の谷川真奈美が2月から産休に入り、育休中の三枝資枝が岡山中央病院、藤田志保が福山医療センターに10月から、政廣聡子が岡山医療センターに11月から復職いたしました。なお1月からの教室内役職は、医局長 鎌田泰彦、婦人科病棟医長 中村圭一郎、周産母子センター産科部門長 早田 桂、外来医長 小川千加子、教育医長 衛藤英理子の体制となっております。

産婦人科医不足は本学の関連病院におきましても喫緊の課題です。同門のベテランの先生方には、定年後も嘱託医や非常勤医師という形で現役を続行いただき、厚く御礼申し上げます。現況において「分娩施設の集約化」が必要であることは自明の理ですが、各病院の思惑もあり簡単には進まないのが現況です。「産婦人科医の働き方改革」の一環として、あるいは「少子化対策」の視点からも、その実現には行政からの強い働きかけが不可欠かと思えてやみません。

今後とも同窓の先生方の御指導ならびに御支援の程よろしくお願い申し上げます。(鎌田 記)

麻酔・蘇生学・集中治療部・周術期管理センター

激動の平成が終わりを告げようとしている年度末ですが、同門の先生方におかれましては、ますますご健勝のことと存じます。この場をお借りして、教室行事、人事についてご報告申し上げます。

昨年9月22日には、周術期管理センター（PERIO）開設10周年記念祝賀会を盛大に行うことが出来ました。ご協力頂きました方々に、心より御礼申し上げます。12月22日には麻酔科忘年会が行われました。手術室、ICU、病棟から多くのご参加を頂き、新人の方々には素晴らしい芸を披露して頂きました。厳正なる審査の結果、当科レジデントが同門会長賞を受賞致しました。本年2月8日には、麻酔科冬セミナーを行いました。経胸壁エコーのハンズオンを行いました。多くの初期研修医、専攻医が参加していただき、実際にエコーに触れながら学べる貴重な機会に満足して頂いた様です。今年度の同門会は5月11日にグランヴィア岡山にて開催の予定です。多数の参加をよろしくお願い申し上げます。

平成30年度のレジデントは、昨年10月より、柳田大輔先生が岩国医療センター、11月から五反田倫子先生が香川県中に一足先に異動となっております。4月からは、松本直久先生が鳥取市立、藤村（道谷）友先生が岡山医療センター、伊藤慶昭先生が香川県中、白川拓先生が岡山済生会、角森雅樹先生が香川

災、池田遼太郎先生が呉共済に異動となります。皆大学病院での忙しくも充実した研修を終えておりますが、まだまだ十分ではなく、専門医試験を受験するまで、それぞれの施設でより多くの経験を積んでくれることと期待しております。同門の先生方には、ご指導の程よろしくお願い申し上げます。本年度は13名のプログラム登録者の内、藤井彩加先生、鄭芳毅先生、山崎友輔先生、照屋洋武先生、村上佳弘先生の5名が大学でレジデントとして研修を開始する予定です。初期研修先でご指導頂いた先生方に御礼申し上げますと共に、1年間スタッフ一同、精一杯教育に取り組む所存であります。

4月からは、上原健司先生が岩国医療センターの麻酔科部長に、溝上良一先生が神戸赤十字病院の麻酔科部長に就かれます。新しい施設での勤務は大変だと存じますが、何卒よろしくお願い致します。

本年度も同門の諸先輩方には当教室の運営に関しまして、ご指導ご鞭撻頂けますよう重ねてお願い申し上げます。

(賀来 記)

脳神経外科学

同門の先生方におかれましては益々ご清栄のことと存じます。2018年度は不慣れな災害もあり、様々なシーンで考えさせられることの多い1年でした。2019年4月には脳神経外科手術と機器の学会、2020年10月には脳神経外科学会総会と伊達教授主催の学会が続きます。同門の先生方には日常診療・学会活動・若手指導など多くの面で助けていただいております、心から感謝申し上げますとともに、益々のご指導・ご支援をお願いいたたく存じます。

臨床面では各グループの専門的医療を中心に精力的な診療を続けております。また、教育面では伊達教授を中心とした丁寧な指導と実習が学生に好評を得ています。研究面では、移植・再生、ステレオ、血管、腫瘍の各グループとも、着実に成果をあげ、積極的に論文、学会等で発表しております。

平成30年8月に行われた日本脳神経外科学会専門医認定試験に竹内勇人先生、清水俊彦先生、新治有径先生、西廣真吾先生、守本純先生、岡崎三保子先生が優秀な成績で合格をされました。

人事関連では、まず新入局者ですが、井本良二先生(岡山大学病院勤務)、水田亮先生(津山中央病院勤務)が入局されました。

異動につきましては平成30年7月31日から平成31年3月の間について記します。平成30年7月31日に浅利正二先生が倉敷リハビリテーション病院を御退職されました。平成30年10月に、大熊佑先生が広島市民病院休職後、米国ファインスタイン医学研究所留学、谷口美季先生が川崎医科大学総合医療センターから岡山大学病院勤務、谷本駿先生が岡山赤十字病院勤務から岡山大学病院勤務になりました。平成30年11月に、豊嶋敦彦先生が香川県立中央病院から交野病院勤務、春間純先生が福山市民病院からフランス ロスチャイルド財団病院留学、竹内勇人先生が岡山赤十字病院から福山市民病院勤務、清水俊彦先生、岡崎三保子先生が岡山大学病院勤務から岡山赤十字病院勤務、富田祐介先生が岡山大学大学院脳神経外科研究室から岡山大学病

院勤務、西廣真吾先生が岡山大学病院勤務から香川県立中央病院勤務になりました。平成31年1月に西村卓士先生が姫路中央病院勤務から石川病院勤務になりました。平成31年3月31日に福原徹先生、青井瑞穂先生が岡山医療センターを御退職されました。

教室の役職は、医局長は安原隆雄が、外来医長は菱川朋人が、病棟医長は亀田雅博が、教育医長・教育企画委員は平松匡文が勤めました。

以上、簡単ですが、教室の近況を報告致しました。

末筆となりましたが、同窓の諸先生方の益々の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。(安原 記)

総合内科学

大塚文男教授は、平成30年度後半「全人的医療のできる総合内科医の育成と大学院教育の両立」に精力的に取り組み、また副病院長として本院全体の教育・企画における多くの新しい取り組みに尽力しています。

教室の動きです。臨床面では、長谷川功病棟医長、谷山真規子外来医長(総外来医長)を中心に、各診療科や地域医療機関と連携を取りながら診療を進めています。病棟では、多臓器にわたる疾患症例、複数の問題を有する難治疾患症例など、多種多様な症例の診療を行っています。外来では、地域からの診断困難例など紹介患者を積極的に受け入れ、漢方診療も行っていますので、引き続きよろしくお願いたします。

教育面です。教育医長の小川弘子准教授のもと、卒前教育については教育企画委員の堀口繁助教を中心に、卒後教育については卒研コーディネーターの小比賀および徳増一樹助教を中心に指導を行っています。学生や研修医対象に、教育熱心な若手医師が教育回診や、レクチャーを行い、また月1回の藤井病院、太田茂先生によるベッドサイドティーチングも大変好評です。11月には、漢方医学を体系的に学ぶ機会として、総合内科、産科婦人科、薬剤部がコアメンバーとなり、「漢方臨床教育センター」が開設され、植田圭吾准教授を中心に活動を展開しています。

研究面です。毎週のケースレポート・研究カンファレンスは、花山宜久准教授、長谷川功助教が担当、学会発表、論文執筆など積極的に活動しています。8月の第19回日本内分科学会中国地方会(米子)、9月の第17回日本病院総合診療医学会学術総会(岐阜)、11月の第119回日本内科学会中国地方会(広島)、第26回日本ステロイドホルモン学会(千葉)、第28回臨床内分泌代謝Update(福岡)、2月の第18回日本病院総合診療医学会学術総会(沖縄)などにて多数の演題を発表しました。このうち、安田美帆助教が第19回日本内分科学会中国支部学術集会以て若手研究奨励賞(YIA)を、第18回日本病院総合診療医学会学術総会で大村大輔医師が会長賞を受賞、原田洸医師がインターナショナルセッションでシンポジスト登壇するなど、若手医師の活躍が目立ちます。また、若手医師が研究成果や経験症例からの知見をまとめ、続々と論文発表しています。9月には岡浩介助教が、「外来発熱患者の臨床的特徴に関する研究」で学位を取得しました。

人事面です。2019年10月に岡山で開催されるG20岡山保健大臣会合に向け、9月に西村義人医師が厚生労働省大臣官房国際課に出向、早速、英語力とリーダーシップ力を発揮しています。また、10月に水田有紀医師が医員として着任、2019年1月に、三朝地域医療支援寄付講座の岡浩介医師が、総合内科助教に着任しました。

2019年1月19日の第6回総合内科セミナーは、徳増一樹助教が中心となり企画、南多摩病院、総合内科・膠原病内科の國松淳和先生に自己炎症性疾患について解説して頂き、大変盛会となりました。その他、岡山県南東部（玉野）総合診療医学講座、岡山県南西部（笠岡）総合診療医学講座、岡山県北西部（新見）総合診療医学講座でも、学生・研修医・レジデントの教育・研究のフィールドとして活動していきますのでよろしくお願いたします。引き続き、各診療科および地域の先生方にご協力頂きながら、地域に貢献できる内科医、総合診療医育成を目指してまいります。今後とも、岡山大学総合内科を御指導・御鞭撻の程よろしくお願いたします。（小比賀 記）

循環器内科学

伊藤浩教授は臨床・教育・研究および学会活動を精力的に行っており、相変わらず多忙な毎日をご過ごしております。

人事ですが、平成31年1月から田淵真基が津山中央病院へ赴任致しました。約半年間の大学病院勤務でしたが、新天地での活躍を期待しております。

学会・研究活動ですが、平成31年1月に第21回日本成人先天性心疾患学会総会・学術集会在伊藤浩教授を会長とし開催されました。多くの先生方が参加し盛況のうちに終えることができました。同門の先生方にも多大なご協力を頂きましたこと、感謝申し上げます。

国際学会ではアメリカ心臓病協会や欧州心臓病学会で、関連病院含め多数の演題を発表しました。また日本の学会でも多くの演題発表をしております。ストラクチャークラブジャパン2018で中山理絵が最優秀演題賞を受賞しました。第113回日本循環器学会中国地方会で三木崇史がYIAを受賞しました。第29回心臓血管画像動態学会で市川啓之が画像特別賞最優秀賞を受賞しました。第4回心臓リハビリテーション学会中国支部地方会で高橋生が最優秀演題賞を受賞しました。

最後に教室の実務ですが、医局長に吉田賢司、病棟医長に杜徳尚、外来医長に三好亨、教育医長に戸田洋伸の体制で執り行っております。今後も、臨床・研究・教育に励み、やりがいのある楽しい医局を目指したいと思っておりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。（吉田 記）

心臓血管外科学

2018年9月から2019年3月の教室の動きをご報告いたします。

2017年8月に笠原真悟医師が就任し1年が過ぎました。佐野前教授の代からの当科の特色であった小児心臓手術も、県内・近県はもとより日本全国より患者を受け入れて引き続き精力的

に診療を行っています。人事面では、新井禎彦医師が2018年11月より准教授に就任しました。佐野前教授時代より長年にわたり教室を支えて多大な貢献をされましたが、12月末をもって退職し旭川荘養育・医療センター副院長として赴任致しました。12月に立石篤史医師が助教として着任し、小児部門は、笠原真悟教授をはじめとして、立石篤史医師、黒子洋介医師、小谷恭弘の4名のスタッフで診療を行っています。また11月末には成人手術や教育の中心となっていた衛藤弘城医師が福山市民病院に赴任しました。成人部門は末澤孝徳医師が2018年4月に帰局して以来、手術数も飛躍的に増加いたしました。血管部門は引き続き大澤晋医師が中心となり診療を行っております。2019年1月に入り小谷恭弘が准教授に昇進しました。臨床面では、地域の中隔として診療を行っている小児先天性心疾患の治療を軸に、成人先天性心疾患に対する外科治療、成人後天性心疾患、血管疾患の多岐にわたる診療を展開したいと考えています。

研究面では、以前より行われてきた心臓移植をはじめ、単心室循環に対する補助循環・再生医療、医用工学を用いた新しい人工血管の開発など、5人の大学院生が積極的に活動しています。

教室としての国際貢献としてはJICA草の根パートナー型技術交流の大型プロジェクト最終年（5年目）を迎えました。新井禎彦医師からプロジェクトマネージャーを引き継いだ小谷恭弘が中心となり、ベトナムからの研修の受け入れ、現地での指導を定期的に行いながら、ベトナムでの自立的な高度医療の確立に向けた支援に取り組んでいます。

今後も教室の広範囲での活動に御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。（小谷 記）

脳神経内科学

阿部康二教授は、世界へ発信しかつ世界をリードできるような、教育・臨床・研究の各分野でのさらなる発展を目指して教室員の指導を行い、国内・国際的学術活動において活躍しています。特に2016年11月に理事長に就任した日本脳循環代謝学会において、学会をさらに発展させるための精力的な活動を継続しています。また、複数の厚労省班会議の班員としての活動や山陽神経難病ネットワークや山陽脳卒中協議会などの社会的活動においても中心的役割を果たしています。また特筆すべきこととして2018年11月16-17日に岡山コンベンションセンターにて第6回日本難病医療ネットワーク学会学術集会を開催させて頂きました。この学会は難病医療に携わる医師、看護師、保健師、難病医療相談専門員など様々な職種が一堂に集まり、広く難病の課題を検討し、医療とケア体制の向上を図ることを目的に設立された学会です。今回は特別講演2つ、シンポジウム6つ、口演113演題、ポスター75演題、合計188演題と過去最大数の演題が発表されました。活発な意見交換や議論を通じてお互いの連携を深めることができ、盛況の内に終えることができました。

人事面に関しては、2018年8月から岡山大学病院初期研修医2年目の平祐貴がARTプログラムを利用して、また10月から中国ハルビンから卞宇婷さんが交換留学生としてそれぞれ研究

チームに加わり、脳梗塞マウスモデルの解析等を開始し早くも成果を挙げています。10月から倉敷平成病院より中野由美子が医員として帰局し、病棟で活躍しています。転出者としては、10月より小坂田陽介が倉敷平成病院へ異動し、今後の活躍が期待されます。

臨床面では一般外来および専門外来（認知症、脳卒中、パーキンソン、ALS、SCD/MSA、神経免疫疾患、ボトックス治療）のさらなる充実化を目指し、神経内科独自の外来検査を導入し、待ち時間の短縮と効率的な外来診療を目指して努力をしています。特に、患者数の増加が著しい認知症については、外来検査の結果を基に、簡易認知機能検査や治療方法の開発など基礎研究と並行して推進しています。また、多くの神経難病ALS患者に対してedaravone療法を積極的に行っています。このように多様な専門外来の評判を聞いて岡山県外からも多くの患者さんが受診しています。今後もALSや脳梗塞の病態解明や新規治療開発へ向けて更なる臨床研究を継続して行っていく予定です。

研究面では、脳卒中・アルツハイマー病などの認知症・ALSなどの神経変性疾患の分野において新規治療の開発を目指し、様々な観点から研究活動を継続しています。特に岡山大学神経内科と京都大学の共同研究で原因遺伝子を同定した、小脳失調症と運動ニューロン疾患の臨床的特徴を併せ持つ新たな遺伝性神経変性疾患Asidan (SCA36) の病態解明・治療法開発を目指した基礎研究やiPS細胞/iN細胞などの新たな手法を用いた再生医療分野の研究、認知症モデルマウスを用いた基礎研究など、様々な研究が進行中です。2020年1月には日本脳神経CI学会、同年5月には日本神経学会学術大会をそれぞれ岡山で開催予定であり、今後とも宜しくお願いいたします。（山下徹 記）

救命救急・災害医学

救命救急・災害医学講座は平成30年4月に救急医学から講座名を変更し、中尾篤典教授のもと岡山県内だけでなく中四国救急医療の最後の砦として、多発外傷、広範囲熱傷、心肺停止、重症小児、敗血症など最重症救急患者の診療にあたっています。また、記憶にも新しい平成30年7月の豪雨災害ではDMAT (Disaster Medical Assistance Team) を派遣し、真備地域を中心とした被災地の急性期医療に従事し、DMATチームとして1月には岡山大学病院長賞（楳の木賞）を授与されました。一同深謝申し上げます。

研究に関しても日本救急医学会や集中治療医学会などの全国学会はもちろん、American Heart Association Resuscitation Science Symposiumでの国際学会発表、J Trauma Acute Care SurgやPLoS Oneといった雑誌に論文を発表することができています。また、中尾教授のライフワークでもある基礎研究もいよいよ本格的に開始することができました。

学生教育についても近年は常に高い評価を受けており、1月からは多数の選択実習生を受け入れ救急医療の醍醐味を共有できています。また災害医学教育にも力を入れ、シミュレーション実習も好評です。

より良い救急医療は院内だけでなく地域の様々な医療機関との連携のもと達成されるものです。急な転科や転院の依頼な

どご迷惑をお掛けすることも多々あるかと存じますが、引き続きご指導・ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。そして地域医療への貢献、また国際的にも評価される研究成果を発信できるように努力していきたい所存です。（湯本 記）

形成再建外科学

2018年8月から2019年2月までの近況につきご報告いたします。

2019年1月に行われた日本形成外科学会専門医試験では当医局員の駒越が受験し無事合格しております。

臨床においては頭頸部がんセンター、乳がん治療・再建センター、ジェンダーセンター、小児頭蓋顔面形成センター、口唇裂・口蓋裂総合治療センター棟の各連携部門をはじめ、リンパ浮腫診療など、いずれも例年通り多くの症例を治療しており、各医局員とも多忙に過ごしております。

研究においては、国内では日本頭蓋顔面外科学会、日本マイクロサージャリー学会をはじめ、各種研究会などで各分野の担当者が発表を行いました。またジェンダー関連では、難波、渡邊、櫻井がオランダのアムステルダム自由大学を訪問し、現地での手術技術の見学と学術的共同研究への協力について協議を持ちました。

国際活動に関しては例年通り2019年1月にミャンマーでの医療支援ミッションを無事完了いたしました。当科からは、木股、徳山、渡邊、妹尾、北口が参加し、岩国医療センターから青雅一先生、岡山ろうさい病院から岡本かよ先生が参加されました。当教室に留学された先生方も全員が現地で活躍されており、ミャンマーの形成外科の医療レベルも確実に向上していると手ごたえを感じております。

当教室は今後も、地域医療を担う医師の育成と、常に最良の医療の開発、改良を臨床、研究両面から追い求め、世界に発信していくよう日々邁進してまいります。

同窓の先生方におかれましては、引き続き変わらぬご指導・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。（妹尾 記）

老年医学

老年医学分野の近況をご報告させていただきます。

研究面では、国立研究開発法人日本原子力研究開発機構 (JAEA) および岡山大学大学院保健学研究科との共同で、「極微量ウラン影響効果試験」を平成19年度から継続しています。本研究は、ラドンの影響効果の実験的検証（岡山大学成果）及び解析評価から得られるラドンの体内動態のメカニズム (JAEA成果) を双方の成果として得ることを目的としています。平成30年度、学会（日本原子力学会2018年秋の大会、日本放射線影響学会第61回大会など）でその成果を発表いたしました。また、日本原子力学会2018年秋の大会では、光延が特別講演を行いました。

教育面では、高齢者の特性を踏まえた医療に関する最新の知識を学習し臨床・研究に生かすことを目的として平成29年度より開講した大学院博士課程選択プログラム「臨床老年医学特論」

も2年目を迎えました。学部、大学院での講義を通じて老年医学の教育を行うとともに、より実践的な教育体制を構築するため準備中です。

2019年3月、岡山芳泉高等学校同窓生による市民公開講座2019にて、睡眠時無呼吸症候群についての講演を行いました。また、2019年5月18日(土)・19日(日)の2日間、第84回日本温泉気候物理医学会総会・学術集会在、岡山コンベンションセンターで、光延を会長として開催されることになりました。今回の学術集会では、「超高齢社会における温泉医学」をテーマとし、温泉医学、気候医学、東洋医学、物理医学など、多岐にわたる診療・研究の成果が発表される予定です。本学会が、活力ある超高齢社会の実現に向けて、少しでも貢献できることを祈念いたしております。

診療・研究・教育の面で、さらに少しでも貢献できるように努力する所存です。同窓の先生方におかれましては、今後ともご指導・ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

(光延 記)

臨床遺伝子医療学

腫瘍制御学講座 臨床遺伝子医療学分野の2018年度下半期の活動報告をさせていただきます。

2018年9月から当教室の外来部門として「臨床遺伝子診療科」が新設され、診療科内に「がんゲノム医療外来」と「遺伝カウンセリング外来」の2部門を設置しました。

近年「ゲノム医療」という言葉が社会で広く認知されるようになり、特にがんなどの治療に直結する分野では、国内外でゲノム医療の体制作りが急ピッチで進められています。当科においても、診療体制やフローの整備、安全対策部門への参画など、院内での体制構築や、がんゲノム医療中核拠点病院として連携病院等とのネットワーク強化に向け、日々尽力しております。

また、バイオバンクでは、主に診療活動によって得られる生体試料を利活用できる仕組みを整備し、院内外の研究を支援しています。

ゲノム医療を臨床実装するにあたり、職種・診療科・部門横断的な「シームレス」な取り組みが必須であり、多くの、広い分野にわたる専門家、多職種の方々の御指導や御協力を頂いております。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。引き続き御指導御鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

(河内 記)

自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門

自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門鹿田施設です。当施設の現状としましては、現在、施設建物5階の空調設備の一部(吸気系統)の更新工事を行っており、施設5階部分を使用停止とさせていただきます。RI施設は管理区域の空气中放射性物質濃度を低減させるための給排気空調設備が必須ですが、竣工後26年が過ぎた施設建物においてこれらの付帯設備の更新が行われておらず、老朽化ならびに性能低下が著しい現状がありました。本工事は今年1月から年度末までの期

間で行われます。この間、施設利用者各位にはご迷惑をおかけしておりますが、施設の健全な管理運営に必要な工事であり、ご理解とご協力をお願いいたします。

施設の新しい取り組みとしましては、今年度より放射線業務従事者の再教育訓練に英語での実施日を設けました。これにより、外国人教職員ならびに留学生に対し、放射線業務に必要な知識を正確に伝達することができるようになって考えています。また、放射線障害防止法の改正に伴い、施設の予防規程ならびに教育訓練の実施方法が来年度より変更されます。特に教育訓練については、鹿田施設で実施する教育訓練は全学共通の教育訓練を兼ねておりますが、新規教育訓練の項目ならびに時間が大きく変更となります。一部の項目については選択制となり、どの施設を使う予定か、またどのような使い方をするかで受講の仕方が変わってきます。このことについては、周知文をご確認いただき、対応のほどよろしくお願い申し上げます。

その他、施設に関する話題としましては、施設建物に中性子医療研究センターの客員研究員室を設置していますが、今年2～3月にSaverio Altieri教授(パヴィア大学、イタリア)、Wolfgang Sauerwein教授(デュイスブルク・エッセン大学、ドイツ)のお二人が滞在されました。人事異動は、4年に渡り当施設を支えて頂いた長田直之助教が任期満了のため退職されます。長田助教は副主任者として、また、特にSPECTの担当教員として当施設をもり立てて頂きました。本当にありがとうございました。

(寺東 記)

動物資源部門

動物資源部門鹿田施設では、飼育設備としてプロアユニット1台、マウス飼育架台5台、微生物モニターボックス1台からなるマウス飼育装置一式、ラット飼育架台1台をそれぞれ4階及び3階飼育室に整備した。これにより4階の飼育室空きスペース問題が解消した。共同利用機器の整備では、研究強化促進経費等の資金を元にゲノム編集動物等を作成するためのエレクトロポレーター及び遺伝子注入装置(ピエゾ付き)を導入した。また、中型動物用の実験環境には、施設内に放置されていた日本光電のポリグラフシステムの構成機器を一部入れ替えて再立ち上げを行った。小型動物用の実験環境では、空調が脆弱な化学曝露飼育室にパッケージエアコンを追加設置し、同実験室に予防歯科学教室購入のin vivoイメージング装置(Lumazone)を共同利用機器化の上、設置した。

施設設備面では、マウス・ラット飼育室に設置してある引き戸式セミエアタイト扉が自重により不具合を起こしているのを修理した以外、特に目立った保守整備を行う必要はなかった。

施設の教育活動では、12月11日～19日に例年通り医学部医学科の生物学実習を、1月26日、27日に実験用ブタの取り扱い手技(入門)講習会を昨年度に引き続き開催した。さらに、10月にマウス及びラットを用いた取扱初心者&初級講習会を、2月にTAKE(Technique for Animal Knockout system by Electroporation)法によるノックアウト動物作成講習会、3月にゲノム編集企業セミナーを開催した。11月25日に麻酔蘇生学教室主催のセミナー「術中RMとPEEP」が、ヤギを用いてメ

インウェットラボ室で開催され、本部門が実施の支援にあたった。

人事面では、津島北施設担当の特任技術職員に岸田裕美を採用した。なお、3月31日現在の職員数は教員を除き21名である。

(樺木 記)

薬 劑 部

人事関係では、1月31日付けで梅村侑加薬剤師、3月31日付けで田坂 健薬剤師、八木健太薬剤師が退職となった。田坂薬剤師は三重大学医学部附属病院、八木薬剤師は高知大学医学部附属病院へ移動となった。

業務関係では1月より注射薬の1施用毎の払い出しを開始した。また、医薬品情報業務において人工知能 (aiPharma) の運用を引き続き行い、正確な情報提供ツールとしての確立を目指している。

学会活動として、第28回日本医療薬学会年会を主催し、約9,500名を超える参加者であった。特別講演では岡山大学病院大藤教授に「肺移植の革新」と題して講演を頂いた。また、薬剤部員からも9演題を発表した。その他、第4回日本医薬品安全性学会学術大会、第3回日本薬学教育学会大会、第2回日本精神薬学会総会・学術大会、第77回日本癌学会学術総会、第30回創薬・薬理フォーラム岡山等で研究発表を行った。

学術論文として、2019年は現在のところ英文原著論文に3報、和文原著1報、総説・解説2報の研究結果を掲載した。

教育関係では、薬学部5年次の長期実務実習が開始され、平成30年度Ⅲ期(11月5日～1月25日)12名(岡山大学薬学部・京都薬科大学・福山大学・徳島文理大学香川・広島国際大学)を受け入れた。

(北村 記)

卒後臨床研修センター 医科研修部門

平成30年度マッチ結果では、先進・小児科・産婦人科特別プログラム併せて、44名がマッチとなりました。このうち27名(海外大学3名)が他学出身の学生であり、これも協力型病院・施設との連携によるたすき掛けプログラムの充実によるものと思えます。

平成31年1月4日の岡山大学病院互礼会では、病院長賞である楷の木賞を、学生の勧誘やプログラム改善に貢献した2年目川口満理奈 研修医が、腎・免疫・内分泌代謝内科よりご推薦頂きARTプログラムに貢献した 三宅広将 研修医が受賞しました。

各学会では、高瀬了輔 研修医と佐住洋祐 研修医が第16回日本病院総合診療医学会学術総会で育成賞を、梅田将志 研修医が第59回日本呼吸器学会中国・四国地方会 第57回日本肺癌学会中国・四国支部学術集会で初期研修医優秀演題賞を、塩飽孝宏 研修医が第18回Okayama Hematology Conferenceで優秀賞を、三野麻以 研修医が日本内科学会中国支部主催第119回中国地方会で研修医奨励賞を受賞しました。また、禪正和真 研修医は救急科、小児科で、沢田孝平 研修医は救急科で論文発表をしております。ご指導頂きました先生方にこの場をお借

りして、厚くお礼申し上げます。

また、10月27日～28日には、岡山県医師会と共催で、卒後臨床研修指導医講習会を開催し、38名の指導医の先生方にご参加いただき、より良い臨床研修を考える2日間になりました。

人事面では、10月より、精神科神経科から 植田真司 助教が着任いたしました。

若手医師がアカデミックに活躍し、切磋琢磨しながら成長することができるのは、日ごろから熱心にご指導頂き、教育の重要性を肌で感じ取る環境で育ってきた賜物と思えます。協力型病院・施設の先生方、今後とも研修医のご指導をよろしく願います。

(三好 記)

運動器知能化システム開発講座

運動器知能化システム開発講座は設立9年となりました。スタッフは2018年4月より宮澤慎一(准教授)、中原龍一(助教)の計2名で活動を行っております。国産国内初の手術支援ナビゲーションシステムを用い、より正確かつ良好な長期成績を目標とした手術を目指し診療を行っております。また、アジア人によるアジア人のための人工膝関節の臨床評価にも協力しております。

2018年11月にタイのバンコクにて人工膝関節手技のCadaver trainingを行い初回人工膝関節置換だけでなく人工膝関節再置換術に必要な手術手技についても再確認致しました。

学会活動は国内においては日本整形外科学会、日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会などで研究成果を発表した以外にも2018年6月にバルセロナで開催されたIsokinetic Medical Conferenceにおいてサッカー選手のスポーツ障害の報告を行いました。

中原龍一助教は2018年4月の日本リウマチ学会、5月の日本整形外科学会、7月の日本骨折治療学会、10月の日本整形外科学会基礎学術集会、11月の日本関節病学会において研究成果を報告しております。さらに、国内でのセミナーや講習会において講師をつとめ、医療画像ソフトの開発を目指し研究も行っております。

今後とも産学連携および臨床現場に必要な医療技術を構築し、実践的な運動器医療を提供できるように精進する所存であります。同門の諸先生方には、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(宮澤 記)

先端循環器治療学講座

先端循環器治療学講座は平成22年4月に、循環器疾患の新しい診断、治療に関連する研究を行う目的で開講され、今年で10年目となります。当講座の母体である循環器内科の伊藤教授のご尽力により、次年度の更新が決まっております。スタッフは、森田(教授)、西井(講師)で、2名と少人数でございますが、循環器内科とともに、研究・臨床に精力的に活動しております。臨床研究では西井が中心で行っている心臓植込み型デバイスを用いた多施設共同研究が論文化され、現在、治療介入を行った研究の解析を行っています。次の多施設共同研究やデバイス、

不整脈の新たな研究も進めております。研究・遠隔診療のデータ解析については循環器内科の三好章仁先生、浅田先生、森本先生、宮本先生など多くの先生にもご協力頂き、順調に進んでおります。学会ではアジア・太平洋不整脈学会（10月）で西井がポスター発表の優秀賞を受賞いたしました。その他、カテテルアブレーション関連秋季大会（11月）、アメリカ心臓学会（11月）、植込みデバイス関連冬期大会（2月）、日本循環器学会（3月）などでも、一般演題、シンポジウムを発表致しました。今後もアメリカ不整脈学会（5月）、日本不整脈心電学会（7月）など国内外の学会で報告予定を予定しており、論文作成も行っています。これからも広く循環器系の臨床・基礎研究に取り組んでまいります。多くの先生方の協力のもと、研究・教育・診療を行っており、ここに感謝の意を表させていただきます。今後とも、ますますのご指導のほどよろしくお願い申し上げます。（森田 記）

地域医療人材育成講座

地域医療人材育成講座が設立されて10年目を迎えます。平成30年度の活動について報告します。

本講座は多くの医療機関にご協力いただきながら、1年生に早期地域医療体験実習、2～3年生にかけて地域医療体験実習、5～6年生に選択制臨床実習を行っております。低学年の実習では、臨床医学の視点ではなく、望ましい医療人のあり方、多職種での連携の仕方といった医療そのものを学んでいます。また、指導医の先生方を対象として、12月4日にFaculty Developmentを開催しました。東京医科歯科大学の竹村洋典教授をお招きし、「医師として戻ってきたいくなるような地域医療実習・研修とは」というテーマでグループディスカッションを行った後に、講演をいただきました。三重大学時代の取り組みや東京・日本の状況を踏まえたお話は大変参考になりました。

この春からは新たに地域卒卒業医師5名が地域勤務を開始しました。県北の医療状況を踏まえながら、県南の医師不足地域も支援していく予定です。地域貢献とそれぞれの医師の希望する専門性の追求を両立できるよう支援を行っていきます。岡山県地域医療支援センター、岡山県医療推進課と連携し、協調して、継続的にサポートすることが重要です。

今後も地域医療を担う医師の育成とより良い地域医療の推進のため努力して参りますので、引き続きご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。（岩瀬 記）

CKD・CVD地域連携包括医療学講座

本講座は、2011（平成23）年11月に開講したCKD・CVD地域連携・心腎血管病態解析学講座の仕事を引き継ぎ発展させる目的で、2016（平成28）年11月から3年間の設置となりました。腎臓専門医と循環器専門医との連携を通じた慢性腎臓病（CKD）重症化や心血管疾患（CVD）合併の予防のための病診連携、県や市など自治体との連携、および一般市民の方への啓発活動、の3本柱を活動目標としております。現在、内田治仁准教授（腎臓内科）と吉田賢司講師（循環器内科）より構成さ

れています。

内田は引き続き、NPO法人日本腎臓病協会（JKA）の副幹事長、岡山県生活習慣病対策推進会議CKD・CVD対策専門部委員等を務めております。また厚生労働行政推進調査事業の「慢性腎臓病CKDの診療体制構築と普及・啓発による医療の向上」研究班の研究分担員として、日本全国における今後のCKD対策に努めています。吉田先生は昨年の4月から循環器内科の医局長として多忙を極めております。

岡山県内では、病診連携におきましては、岡山市CKDネットワーク（OCKD-NET）セミナーを2019（平成31）年3月に開催しました。OCKD-NETでは病診連携患者の前向き追跡検討を継続して実施しております。県や市など自治体との連携に関しましては、岡山市や美作市などでの特定健診フォローアップ事業の効果解析を各自治体と共同で実施しています。啓発活動としては、2018（平成30）年11月に勝央町で、12月に早島町でCKDに関する一般市民向けの、2019（平成31）年2月に美作市でCKDに関する医療従事者向けの、それぞれ講演会を開催しました。

研究活動ですが、臨床研究としましてCVD進展リスク因子の解明・重症化予防診療システムの開発を目的とした多施設共同CKD・CVDコホート研究（Kakusyo 3C study）を継続しております。参加施設の先生方におかれましては、最大で2020年までのfollow upのご協力を何卒宜しくお願い申し上げます。基礎研究としまして、内田は腎臓病・血管病の検討を、吉田はヒト心臓内幹細胞から心筋細胞への分化制御機構の解明を、それぞれ継続して実施しております。研究の成果は各学会にて報告しております。

末筆となりましたが、今後とも先生方の御指導、御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。（内田 記）

救急外傷治療学講座

山田、山本の教室員2名と少数ではありますが、臨床・教育・研究に勤しんでおります。

臨床では、二人共に高度救命救急センターのスタッフとして、中尾篤典センター長のもと、救急患者の受け入れに努めております。地域の信頼も得られており、いまや地域に無くてはならない最後の砦として、プレゼンスが高まっております。

教育では、学生、研修医教育共に好評価を得られるようになり、加えて、コメディカルや救急救命士の教育にも盛んに取り組んでおります。

研究面では、国内外の学会で積極的に発表し、また臨床研究も進めており、英文論文数も着々と増え結果に表れつつあります。基礎研究にも着手しており、研究室も活発となってきました。

人事においては、2018年11月より山田が講師として着任し、助教の山本と共に教室を盛り上げていくべく奮闘しております。

救急医療、外傷診療、災害医療、小児診療、集中治療と専門性を有した講座として、臨床・教育・研究へ邁進する所存です。皆様、今後とも、何卒御指導御鞭撻宜しくお願い申し上げます。

ます。

(山田 記)

陽子線治療学講座

津山中央病院での陽子線治療は、平成28年4月28日に自由診療として開始、7月1日に先進医療適応となりました。岡山大学は津山中央病院と共同でがん陽子線治療センターを運用しており、大学病院では勝井、片山、小河が診療にあたっています。今後も各診療科・センターの専門家の先生方とご協力して最適な放射線治療を提供してまいります。4月の人事異動として、福山市民病院から小河の後任に丸川洋平が赴任しております。

陽子線治療は平成31年4月時点で脳腫瘍、頭頸部癌、食道癌、原発性肺臓癌（縦隔腫瘍や気管癌を含む）、転移性肺臓癌、原発性・転移性肝臓癌、胆管癌、膵臓癌、前立腺癌、直腸癌術後局所再発、小児腫瘍等に対して行っています。陽子線治療の保険適応は診断時20歳未満の小児腫瘍（限局性の固形腫瘍）に始まり、平成30年4月に、頭頸部癌の一部（口腔・咽喉頭の扁平上皮癌を除く）、前立腺癌（限局性）、骨軟部腫瘍（手術不適応）に対して適応拡大されました。その他の対象疾患は先進医療で運用され、技術料として自費にて288.3万円（津山中央病院の場合）必要で、入院・薬剤・検査等は公的保険が適応されます。超希少がんを扱うことが多い小児・脳腫瘍は、岡山大学病院小児血液・腫瘍科、脳神経外科、血液・腫瘍内科とのカンファレンスにて方針を決定しております。中国からの患者を含め患者数は増加してきています。

陽子線治療の普及活動として、呼吸器・乳腺内分泌外科より乳癌の研修会、消化器外科より消化器癌の研究会にて機会をいただきました。説明会は、徳島市医師会、十全総合病院、倉敷成人病センター、雲南市立病院、滝宮総合病院、屋島総合病院にて開催していただきました。同窓の先生方、関係者の皆様にはこの場をお借りして深謝申し上げます。

陽子線治療を皆様には是非ご利用いただき、お役に立てればと考えておりますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。

(勝井 記)

三朝地域医療支援寄付講座

2018年2月から2019年1月までの報告をさせていただきます。

人事では、1月から6月まで消化器・肝臓内科学教室の友田健医師が、7月から12月まで総合内科学教室の岡浩介医師がそれぞれ半年間勤務されました。

本年1月より腎・免疫・内分泌代謝内科学教室より原孝行先生が赴任・診療にあたっています。

学会関係では、2月25日に日本温泉気候物理医学会：温泉療法医会近畿・中国四国地区合同研修会を三朝で開催しました。特別講演の一部は一般公開し地域住民・地域温泉関係者にもご参加いただきました。当講座の主たる役割は三朝医療センターの診療の継続であります。さらに地域に何らかの貢献ができればと考えており、地域住民に健康意識を高めてもらうために、定期的に市民公開講座等を開催しております。本年度は上記学

会研修会の一般公開に加え、9月には芦田が三朝町にて「年をとっても元気で過ごすために－フレイル・サルコペニアに気を付けましょう」をテーマに講演会を開催し、多くの住民に参加していただきました。またその内容は地元新聞（日本海新聞9月16日日曜版第一面）でも紹介されました。

講座が開設され3年間が経過し、この度更新され1月より新たな3年が始まりました。この間、ご協力いただきました諸先生方には、心より感謝申し上げます。と同時に今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。(芦田 記)

血液浄化療法人材育成システム開発学講座

本寄付講座は平成28年に開講し、腎不全、特に血液透析を主体とする血液浄化療法に関する教育、研究等に力を入れております。慢性腎臓病CKDや腎不全治療に関する研究・教育・臨床に精力的に取り組んでおり、腎不全治療の更なる向上と地域連携による人材育成システムの開発を目的としております。この度、平成31年1月から3年間の更新が認められました。

「アクセス手技のデモから実践へ」をテーマに、ハンズオンセミナーの新企画を取り入れて岡山アクセスセミナー2018を9月に主催し、大西が講師を務めました。3回目で最多の参加人数を集めました。

杉山教授は10月に第24回日本腹膜透析医学会教育講演「PDの歴史と今後の展開」、11月に北長瀬メディカルフォーラム「腎臓病の最新の診断と治療」、第1回岡山県慢性腎臓病（CKD）研修会「CKD患者の療法選択」、井笠地区CKD診療を学ぶ会「高齢者CKD診療における注意点と対策」、2月には備後腎疾患研究会「CKD診療における最新のトピックス」、第2回岡山県慢性腎臓病（CKD）研修会「CKD患者の療法選択」、3月のWORLD KIDNEY DAY 2019シンポジウム和歌山「地域のCKD対策～減塩や高血圧治療を含めて～」の講演を行いました。「ファブリー病の診断と治療について」のインタビューではファブリー腎症について解説を行いました。この間、作成委員を務めた腎臓リハビリテーションガイドラインが発行されました。「岡山県における透析患者数の分布と推移に関する調査」では、CKD・CVD地域連携包括医療学講座、腎・免疫・内分泌代謝内科学と共同で調査を行いました。8月から「岡山県国保ヘルスアップ支援事業（医療費等分析・評価）」を開始しており、10月の岡山県CKD・CVD対策専門会議では議長を務めました。

今後も腎臓病・腎不全、血液浄化療法の研究、教育や診療を通じて人材育成システム開発に尽力して参ります。本年5月12日には慢性腎不全管理セミナーを、9月1日には岡山アクセスセミナー2019を主催する予定です。

本講座は岡山県医師会透析医部会を中心に、透析関連施設よりご支援を頂いております。末筆となりましたが、関連病院における先生方には、平素よりお力添え頂いておりますことを厚く御礼申し上げます。引き続き御指導御高配を賜りますようお願い申し上げます。(大西 記)

運動器外傷学講座

運動器外傷学講座は運動器外傷に対する治療法の研究・開発を行い、国内の運動器外傷に関する教育を牽引することを目的とした講座で、開設3年を経過しました。スタッフは野田知之(教授)、中田英二(講師)の計2名です。

基礎研究では「人工知能を用いたインプラントと骨の適合予測システムの開発」、免疫病理・松川教授との共同研究で「抗菌性骨接合材」にかかわる研究など続行中です。野田を研究責任者とする“脛骨遠位端骨折に対するDTN(ディスタルティピアルネイル)の有効性と安全性に関する多施設共同臨床研究”も当院を含む国内9施設で施行しています。

臨床面では救命救急科と連携しての多発外傷・高エネルギー外傷に関連した重度整形外傷に対する専門的・集学的治療、ならびに他院で対応困難な骨盤骨折・寛骨臼骨折など難治性骨折に対する受け入れや手術支援も積極的に行いました。さらには国内外の学会活動も精力的に行っており、11月に京都で開催された国際学会16th Biennial Conference of the International Society for Fracture Repair (ORS ISFR 2018)ではTreatment of pathological fracture of proximal femur; surgical tips and pearls for trauma surgeonsの演題名にて教育講演を行い、英語論文、症例報告作成も増産中です。

本学における教育活動としては本年度も、大塚教授をはじめとする人体構成学教室のご協力による臨床解剖実習を本年も3月に開催します。

同窓・同門の諸先生方には引き続きご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。(野田 記)

地域救急・災害医療学講座

本講座も発足して2年半が経ちました。

2018年春から、尾迫・山川泰明2名での活動ではありますが、臨床の現場では地域の諸施設の皆様の御期待に沿うべく、重症患者診療支援に尽力して参りました。臨床のみならず、救急医学会や整形外科学会等の主要学会においては日々の診療により蓄積した業績を発表して参りました。県下においては、県医師会『救急の日』講演会や県臓器移植市民公開講座での講演をおこなうなど、特に岡山市東地区において地域に密着した活動も併せておこなって参りました。災害医療においては、南海トラフ自身を想定しおこなわれた平成30年度大規模地震時医療活動訓練に参加し、医療圏DMAT活動拠点本部にての活動をおこなないました。県下では、航空機事故を想定した平成30年度岡山桃太郎空港航空機事故総合訓練や各種災害医療研修会に参加するなど、今年度下半期も本講座の名に恥じぬ活動を遂行したと自負しております。

今後も、臨床・教育・研究活動と幅広く講座運営に取り組んで参りたく考えております。今後とも宜しく願い申し上げます。(尾迫 記)

岡山県南東部(玉野)総合診療医学講座

玉野市を中心とした岡山県南東部における地域医療に多面的な貢献を行うことを目標のひとつとして活動しております。

玉野市民病院においては内科診療を担当し、総合内科医として診療を行う中で、担当教官の専門である伝統医学(漢方医学)領域、循環器科領域の診療を積極的に行いました。伝統医学領域においてはコメディカルに対し講演会を通じた教育も実施いたしました。循環器科領域においては検査技師への心臓超音波検査の教育を行い、診療内容の充実を図りました。

同院においては昨年度に引き続き早期地域医療体験実習(1年生)及び地域医療体験実習(2-3年生)を行う学生の受け入れが行われました。地域の医療現場を肌で感じることでできる実習であり、学生からは貴重な経験になったという言葉が多く聞かれます。ご協力いただきました各科の医師を始め、スタッフの皆様にご感謝申し上げます。このような活動が将来の地域医療に貢献する医療人の育成の基盤になるものと期待しております。

岡山大学においては、総合内科での診療を担当いたしました。教育面では総合内科において学生の基礎臨床実習および選択実習を担当し、医学部学生に対する内科総論、東洋医学の講義を担当いたしました。また、伝統医学の卒前・卒後教育として定期的に勉強会を開催し、その普及を図りました。

来年度も同様な活動を行いたいと考えております。

(植田 記)

高齢者救急医療学講座

本講座は、平成29年11月1日付で救急医学講座、中尾篤典教授のもと井原市の寄付により開講をいたしました。この講座の設置目的は、高齢化のすすむ地域医療における高齢者救急医療の在り方についての課題に取り組むとともに、救急医療を含めた地域医療体制の構築や人材育成を実践することにあります。スタッフは万代康弘、青景聡之の2名でございます。大学においても、地域においても救急医療や人材育成は様々な方々のご支援を頂かなければ成り立つものではありませんので、お力添えをどうぞ宜しくお願い申し上げます。

井原市と岡山大学において、主に現時点で井原地域医療における救急体制の構築のための活動を行っております。また、医師不足が叫ばれる地域医療においてはチーム医療が必須な状況であり、医師だけでなく多職種にわたる実践能力向上を目指した人材育成と育成システムの構築を目指して活動を継続しております。平成30年度は井原・笠岡地区の5病院で8回の救急対応研修会を実施し、井原市民病院と井原医師会で訪問看護師向け研修会を2回開催、ほぼすべての受講生が意識変容をきたしたという結果を得られました。

今後は更に課題を具体化するためのデータ収集そして解析を継続してまいります。そして、地域の範囲内で急病者の初期対応を行うシステムを模索したいと考えております。また人材育成面では救急に携わる医師、看護師は勿論ですが、地域医療で重要な役割を果たす訪問看護師、ケアマネージャー、介護福

社士などの多職種にわたる人材育成を継続してまいります。

まだまだ未熟な本講座ではございますが、同窓・同門の諸先生方には引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。(万代 記)

岡山県北西部（新見）総合診療医学講座

当講座は平成30年4月1日に、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科に新見市からの寄付講座として、総合内科学の大塚文男教授のご協力にて開設されました。山間部のへき地医療の問題点および医療の質の向上のために、当講座は教育・研究をする事を目的としております。対応へき地地域は、神郷（しんごう）地区と豊永地区の2つの地域です。神郷地区の診療所は神代（こうじろ）診療所、新郷（にいざと）診療所、高瀬診療所、油野診療所、足立（あしだち）診療所であり、豊永地区の診療所は湯川診療所です。現在、当講座には花山宜久と堀口繁助教が所属し、それぞれ週1日新見市のへき地診療所に出張しております。堀口医師は足立診療所の所長も兼務しております。教育では、1) 地域医療を担う若手総合診療医・総合内科医の育成、2) 初期研修医・内科レジデントに対する実践的地域医療教育、3) 地域医療における生活習慣病・循環器疾患教育、4) 地域医療における臨床検査教育、5) 県北西部地域におけるメディカルスタッフを含めた生涯教育を予定し、研究においては、1) 診療を担う若手医師育成のための教育プログラムの開発研究、2) 地域包括ケア、へき地医療教育に関する研究、3) へき地医療・総合診療における生活習慣病診療の改善に対する研究、4) 県北西部の地域特性を考えた総合診療・内科診療の方向性、5) 県北西部の地域医療の充実と医師確保に関する研究、6) 行政と連携した地域医療提供体制の構築に関する研究、7) 在宅医療支援ツールによる診療・在宅医療・介護の質の改善における研究、8) 県各地域における地域医療の現状と課題の比較（県南西部総合診療医学講座、県南東部総合診療医学講座との共同研究）を予定しております。当講座の活動を通じて、多くの医師が岡山県北西部で有意義なへき地医療研修が受けられるように努力してまいりますので、今後とも御指導・ご協力をお願い申し上げます。(花山 記)

運動器スポーツ医学講座

2018年4月より開講されました「運動器スポーツ医学講座」（寄付講座@社会医療法人水と和会水島中央病院）は島村安則と長谷井嬢が在籍し、日常診療にあわせまして県内外のスポーツ活動のサポートを行っております。帯同いたしました昨年の福井国体で岡山県は天皇杯（男女総合成績）11位と躍進し、3年ぶりに目標の「10位台前半」を達成しております。他にもファジアーノ岡山のチームサポートや岡山県高校野球連盟の大会サポート等のフィールドワーク、成長期のスポーツ障害予防を目的とした検診事業や講演などを通じたアスリートの健全育成の取り組みを行っております。引き続き2019年も選手の活躍をサポートし、スポーツ障害の予防・治療法などの研究を継続して参ります。

最後になりましたが、同窓・同門の先生方の益々のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。(島村 記)

災害医療マネジメント学講座

本講座は、平成30年7月に鳥取市からの寄付を財源に開設されました。鳥取市は、同年4月に中核市へ移行し、保健所を設置するとともに、鳥取県より鳥取県東部4町（岩美町、若桜町、智頭町及び八頭町）の保健所業務の委託を受けることにより、鳥取県東部圏域の健康・医療などの危機管理や災害時の東部圏域の医療救護などを担うことになりました。そこで、広域的な災害等が発生した場合の救急医療体制を確保するため、災害救急に貢献する人材育成を目的とした寄付講座「災害医療マネジメント学講座」を開設に至っております。

中尾博之、高田、渡邊の3名体制でスタートを切りました。スタッフは皆、国内外を問わず災害支援活動の豊富な経験、災害医療支援チーム（DMAT）インストラクターや、災害医療における様々なコースの指導歴を持っております。

講座の活動としましては、開設直後の7月5日より平成30年西日本豪雨災害対応にて、岡山大学病院災害対策本部の設置運営、岡山県庁保健医療調整本部、倉敷市保健医療調整本部、備中県民局保健医療調整本部、まび記念病院避難支援、避難所での医療救護活動など、岡山大学病院のスタッフをはじめ、行政職員、県内外の医療機関、関係機関のみならず災害対応活動を実施いたしました。岡山大学病院の災害対策として、多数傷病者受け入れ訓練の企画実施や、災害対応の講習会、災害対策マニュアル改定、事業継続計画（BCP）改定など災害対策も行なっております。根拠の少ないと言われている災害医療の領域における災害時医療システム維持戦略の研究などの研究活動、災害現場では横断的な対応が必要であり、それぞれの専門分野以外の領域も見渡せる能力とリーダーシップをもった、災害医療を組織化できる人材育成などの教育活動を実施していく次第でございます。

皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

(渡邊暁 記)

検査部

総合内科大塚文男教授が検査部長を併任しています。下宮広子技師が平成31年3月で退職されました。業務上では平成30年11月に超音波検査を含む生理検査システムが更新され、順調に稼動しています。教育関係では本学保健学科学生、倉敷芸術科学大学学生、九州保健福祉大学学生の臨地実習および本学医学科学生のポリクリを受け入れました。研究・学会活動では、全国学会で9演題、地方学会で6演題発表しました。また、邦文論文2編、英語論文1編が掲載されました。表彰関係では渡辺修久副技師長が画論26th The Best Image in Ultrasound 超音波部門(心臓領域)で最優秀賞を受賞されました。資格関係では、8月に大倉真実技師が医療情報技師、9月に近藤瑠璃技師が緊急臨床検査士、黒瀬啓子技師が二級臨床病理技術士(臨床化学)、12月に高橋孝英主任が認定サイトメトリー技術者、3月に須浪

夏姫技師が認定心電図専門士を取得しました。また、藤井敬子助教が9月に臨床検査専門医に合格されました。日本臨床検査医学会の認定研修施設は1月より更新継続しています。

(岡田 記)

循環器疾患集中治療部

循環器疾患集中治療部は心疾患術後の集中管理を行うユニットで、これまでの集中治療室の概念を破る高度な医療設備とスペースを備えています。これまでと同様に循環器部門、特に重症心不全患者と心臓血管外科に全国から受診されるハイリスクな心疾患患者の術前・術後管理を担当する部門として高度な集中管理を行っています。

先天性心疾患においては2018年の心臓血管外科での手術症例数が594例となり、特に先天性心疾患の手術症例数は363例に達しております。これは全国の国公立及び私立大学では1番の症例数であります。循環器疾患集中治療部ではこのような手術の術前術後管理を担っており、高度で専門的な医療技術が要求されています。岡山大学では循環器内科の伊藤浩教授と循環器疾患治療部の赤木禎治准教授が中心となって、国内で初めての本格的な成人先天性心疾患センターを運営しています。2019年に当院は中国地方では唯一の「成人先天性心疾患総合修練施設」と認定されました。今後は診療のみならず教育・研究を含めた、地域の基幹施設として責務を果たしていきたいと思っています。

心房中隔欠損症や動脈管開存症のカテーテル治療はこれまでに1200例に達する治療を実施し、国内トップの症例数と実績をあげています。全国各地から患者さんの紹介をいただいています。さらに同様の治療を行う各地の大学病院へ治療技術指導を行っています。治療実績は海外でも高く評価されており、数々の国際学会から招請を受けています。本年は新規医療技術として奇異性脳梗塞再発予防のための卵円孔閉鎖術、さらに医師主導治療として片頭痛治療目的とした卵円孔閉鎖術も国内の先陣をきって実施していきたいと思っています。(赤木 記)

総合リハビリテーション部

千田益生教授のもと、PT29名、OT7名、ST4名、看護師1名、クラーク1名で日常業務をこなしております。医師は助教1名、医員2名です。

毎週金曜13時からのリハカンファレンス(回診)を充実させ、症例1~2例を複数のスタッフで今後の方針やアプローチについて話し合っています。

学会発表は各自目標を決めて行っています。リハの発表は、様々な分野にわたり、多科の先生方にいろいろとご指導いただいております。大変感謝いたしております。他科のカンファレンスも担当者が参加し、連絡事項などはリハ部へ持ち帰り、全員で共有できるよう心がけております。

教育面では、医学科4・5年生が整形外科実習の中で、リハ診察・車いす・義足体験・筋電図実習・理学療法・作業療法など学んでもらっています。選択実習では、筋電図やリハ診察を

積極的に学んでもらい、最終日にはリハ関連の課題についてプレゼンテーションを行っています。

現在の悩みは、リハビリテーション専門医の不足です。新専門医制度が始まりましたが、中四国でのリハ専攻医は少なく、岡大は0名です。リハ専門医不在の大病院も多くあり、早く専門医が増えることを切に願っております。2019年度からは卒業研修プログラムにも参加させていただく予定です。ホームページの充実などあらゆる手段で頑張っております。

スタッフ同士でいつも連絡も密にとるよう心がけておりますが、行き届かない点も多々あると思います。お気づきの点がございましたら、お知らせいただくと幸いです。引き続き、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。(堅山 記)

病理診断科・病理部

柳井広行教授のもと、スタッフ医師3名(都地友紘、谷口恒平、田中健大[病理学(腫瘍病理)]、医員4名(西田賢司、太田陽子、小野早和子、柴田嶺)の合計8名で病理診断にあたっています。

学術面では、腫瘍病理学教室ならびに免疫病理学教室との密な連携の元、活動を進めております。学会活動としては柳井が2018年11月開催の第64回日本病理学会秋期特別総会に座長として、また同月開催の第57回日本臨床細胞学会秋期大会にシンポジウムの演者として参加しました。

業務面では、2018年10月から12月までの3ヶ月間、病理研修としてMandalay central women's hospital (ミャンマー)の病理医Myint Myint Yee先生を受け入れました。婦人科病理を主体として外科病理全般の研修を行いました。

教育面では選択研修、選択実習として、たくさんの初期研修医、実習生が当科を選んで下さっています。

引き続き、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。(都地 記)

血液浄化療法部

血液浄化療法部は、和田淳部長(腎・免疫・内分泌代謝内科学教授)のもと、スタッフ医師2名(木野村賢、田邊克幸)、医員5名(三瀬広記、谷村智史、川北智英子、加納弓月、森岡朋代)と女性支援枠の梅林亮子で診療にあたっています。入院中の慢性維持透析患者の透析管理、新規の透析導入、急性腎不全患者の透析管理、難治症例に対する血漿交換等の体外循環治療について、看護師、臨床工学技士と協力して診療に取り組んでおります。

人事面では当部の医員として活躍していた垣尾勇樹が10月より愛媛県立中央病院に異動となり、現在は三瀬広記が後任の医員として採用されております。

血液浄化療法部への延べ受け入れ件数(アフレス療法を含む)は、平成28年、平成29年と年間2000件を維持していましたが、平成30年(1月~12月)は当院へご紹介いただきました維持透析患者の手術件数の増加もあり、過去最多を更新して2303件となりました。また、同じフロアに併設しているCAPD外来も、25名前後の腹膜透析患者の外来診療を行って

り、週1回の血液透析とのハイブリッド治療も3名に行っております。今後も、急性及び慢性腎不全や他の難治性疾患に対する安全で確実な透析療法及びアフェレシス療法を提供できるよう取り組んでまいりますので、同門の先生方、関連病院の先生方におかれましては引き続き患者のご紹介をお願い申し上げます。(田邊 記)

高度救命救急センター

岡山大学病院高度救命救急センターは、岡山県内のみならず中四国地方の急性期医療最後の砦として活動しております。

当センターは、救命救急外来・集中治療・高次医療機関対象特殊病態対応(四肢再接着・血管内治療・顔面骨折等)を臨床の柱としております。多発外傷や熱傷、中毒といった外因性疾患が入室症例の半数以上を占め、残りの内因性疾患症例も複数臓器不全を有する現状にあります。重症呼吸不全患者に対する体外式膜型人工肺(ECMO)を用いた治療や小児の重篤患者(特に急性脳症)に関しても県内だけでなく中四国から患者が集まってきています。そのため、医師を定期派遣いただいている整形外科・脳神経外科・口腔外科を始め院内各科の皆様から、また連携施設の皆様には症例のご紹介や慢性期管理症例の後送等で多大なるご協力・ご支援をいただいております。この場をお借りしまして、厚く御礼申し上げます。

当センターは中尾篤典のセンター長着任以後、災害医療にも尽力して参りました。2018年は岡山にとって災害の年でもありました。平成30年7月豪雨では中心となって被災地の支援に当たって参りました。2019年は「災害マネジメント講座」とともに災害地の支援、防災対策、BCPに関して更なる精進を重ねて参ります。

「教育」に関しては、各関連病院とも連携しERにおけるcommon diseaseの対応から高度救命救急センターでしか提供が出来ない高度医療までの幅広い診療とoff-the-Jobトレーニングを中心としたシミュレーション教育を学生に提供し、救急医療の本質を学んでいただけるようにスタッフ一同精進しています。

スタッフ一同、今後とも末永くご指導賜りますようお願い申し上げます。(塚原 記)

周産母子センター

周産母子センターは、地域周産期母子医療センターとして、県内外から多数の症例をご紹介いただいております。

当センターは、合併症妊娠や習慣流産・不育症、周産期合併症などのハイリスク妊娠・分娩管理だけでなく、正常妊娠例や生殖補助医療(ART)にも積極的に対応しているのが特色です。分娩時大出血などの産科救急には、高度救命救急センターや麻酔科、放射線科などと協同で母児救命に取り組んでいます。また先天性心疾患に代表される胎児異常症例につきましても、小児循環器科、心臓血管外科、小児外科、脳神経外科、小児麻酔科など関係各科と協同で診療に従事しております。

当センターには産科部門(周産期および生殖内分泌)と

NICU部門があり、増山 寿産科婦人科教授がセンター長、鎌田 泰彦が副センター長・准教授、産科婦人科の早田 桂が産科部門長、小児科の吉本順子がNICU部門長を務めております。産科部門は、周産期専従医および生殖内分泌専従医を中心に産婦人科専攻医とともに診療にあたっております。NICU部門は、塚原宏一小児医学教授の指導下に、小児科専従医の鷺尾洋介、岡村朋香、森本大作および産科婦人科の大平安希子を中心に運営されております。

現在の病床数は、入院棟4階東病棟に産科(母体)18床、新生児集中治療室(NICU)6床、重症新生児病床12床。4階西病棟に産科(母体)5床がそれぞれ配置されています。地域医療への更なる貢献のため、病棟の整備ならびに今後の業務拡大に向けて、病院を挙げて取り組み始めています。

地域の周産期医療の中核の一つとして診療にあたるとともに、日本周産期・新生児医学会の母体・胎児専門医の基幹研修施設、新生児専門医の指定研修施設として専門医の育成にも力を注いでおります。同窓の先生方におかれましては、引き続きご支援とご鞭撻の程、宜しく願い申し上げます。(鎌田 記)

腫瘍センター

腫瘍センターでは田端教授と久保の腫瘍内科医2人体制ではありますが、緩和ケアチームや院内がん登録室、ゲノム医療総合推進センターなど多くの部署と連携をとりながら、がん治療を多方面からサポートできるよう活動しております。

2018年3月に「第3期がん対策推進基本計画」が閣議決定され、その中で「がんゲノム医療」の充実が施策の一つとして挙げられました。腫瘍センターでは、2015年12月より「抗がん剤適応遺伝子検査外来」を立ち上げ、がんゲノム医療に取り組んできました。2018年2月に岡山大学病院が「がんゲノム医療中核拠点病院」に選定されたことを受け、現在は「ゲノム医療総合推進センター」と連携し、「がんゲノム医療外来」を行っております。これまで自由診療で行われていた「がんゲノム医療検査」も近く保険適応となる見込みであり、今後は検査および治療面でさらにニーズが高まることが予想されます。希少がんや治療抵抗性となった患者さんの化学療法の依頼、相談などがございましたら、ご相談頂ければ幸いです。

また、腫瘍センター外来治療室では、これまでと変わらず、毎月800人前後の患者さんが外来化学療法を受けておられます。歯科医師、薬剤師、看護師、歯科衛生士、がん相談事務員など他職種からなるチーム医療を継続しております。今後も診療科・職種の枠を超えて質の高いがんのチーム医療を実践できる場、さらには地域で求められるがん医療に対応できる人材育成のための研修の場の提供を目指して活動を充実させていく所存であります。同窓の先生方におかれましては、今後ともご支援とご鞭撻のほど、よろしく願い申し上げます。(久保 記)

内分泌センター

内分泌センターでは内科・外科Cフロアおよび西7階病棟にて内分泌内科・外科・コメディカルが一丸となって全身多臓器

に及ぶ多様な内分泌疾患に対して関連各科と緊密に連携しながら日々診療を行っております。中四国を中心に全国の同窓の先生方から患者様をご紹介頂き、内分泌センターカンファレンス等にて各専門の立場から活発な意見交換を行いつつ、1症例毎に多彩な病態を呈する内分泌疾患に対してチームで取り組むとともに、専門医育成や学生・研修医教育にも尽力しております。

2018年度下半期の学会活動として、日本内分泌学会臨床内分泌代謝Update・日本甲状腺学会・日本神経内分泌学会・日本生殖内分泌学会・間脳下垂体副腎系研究会・間脳下垂体腫瘍学会・日本乳癌学会中国地方会・内分泌学会中国地方会・中国四国甲状腺外科研究会・岡山内分泌同好会など、内分泌代謝領域の主要な学会・研究会に参加し、数多くの学会発表を行いました。

最後になりましたが今後とも同窓の諸先生方の御指導・御支援を何卒よろしくお願い申し上げます。(稲垣 記)

臓器移植医療センター

岡山大学病院での臓器移植を集中的に管理・運営することを目的として設立された臓器移植センターですが、当院での移植医療を円滑に遂行すべく日々業務にあたっております。本会報では、心移植チームから「心臓移植施設の辞退について」を掲載させていただきたいと思っております。今後、当面は、肝移植、腎移植、小腸移植、肺移植のチームで活動していくこととなりますが、臓器移植医療センターとして先進的な医療を提供できるのは病院全体での御協力の賜物であると考えております。引き続き御指導、御支援を何卒宜しくお願い致します。(大谷 記)

心臓移植施設の辞退について

心臓血管外科 笠原 真悟
黒子 洋介

岡山大学は2010年に心臓移植実施施設として認定され、2013年12月に第1例目の心臓移植を行いました。しかし種々の事情によりその後症例が続かず、補助人工心臓症例や心臓移植登録も行われることがありませんでした。

近年の重症心不全を取り巻く環境の変化に伴い、昨年心臓移植実施施設の見直しが行われました。その結果、当院は現在では移植施設として十分な条件を満たしていないため、移植施設の辞退が勧告され、辞退することとなりました。症例が続かなかったこともありますが、当院が「植え込み型補助人工心臓実施施設」でないことが大きな要因です。心臓移植・心肺同時移植関連学会協議会からは、条件を満たして心臓移植施設として再申請するようにと、叱咤激励されました。

今回の当院の辞退により中国・四国地方には心臓移植施設がなくなってしまうことになります。これからの重症心不全治療には地域性が求められており、心臓移植を経験している当院が心臓移植施設として再度立ち上がることは当然の責務と考え、再申請を目指して決意を新たに誠心誠意取り組んでいく所存です。皆様にはご理解いただくとともに、これからもご指導ご鞭撻いただきますよう、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

低侵襲治療センター

平成23年度岡山県地域医療再生臨時特例交付金によって整備されました低侵襲治療センターは平成24年の設立から6年余りが経過しました。センター長の藤原俊義教授のもと専任・兼任スタッフが、当院での鏡視下手術を推進、向上させ若手外科医の育成に尽力するとともに、県内外の関連病院への教育活動も継続しております。手術手技研究会や各分野のエキスパートによる講演、実技講習会等を通して高度な手術手技が要求される鏡視下手術の術者育成に努めております。

昨年、手術支援ロボット「ダヴィンチ」による手術で保険適応となる術式が大幅に増えました。これまで主に活用されておりました泌尿器科手術に加え、新たに胃、食道、縦郭、肺の手術が現時点で施設基準を満たし、保険診療として実施されるようになっております。糖尿病センターとの連携で肥満症外科治療チームも活動しており病的肥満症に対する腹腔鏡胃腸小術も順当に実績を重ねております。腹腔鏡下肝切除、脾切除等、高度な鏡視下手術も推進しており、安全、安心な低侵襲手術の普及にセンターとして貢献をしまいたいと思っております。なお一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。(香川 記)

糖尿病センター

糖尿病センターは、岡山県から「岡山県糖尿病医療連携推進事業」を受託して事務局業務を行っており、さらに「糖尿病看護認定看護師チーム岡山」と「CDEJ(日本糖尿病療養指導士)チーム岡山」の事務局も担当しています。

当事業では、岡山県における糖尿病医療レベルの向上と医療連携体制の構築及び県民への普及啓発を目的とした活動を進めており、県内で約330の施設が糖尿病総合管理医療機関(かかりつけ医)として岡山県知事および岡山県医師会から認定されており、かかりつけ医と専門施設との円滑な連携ならびにおかやま糖尿病サポーターも加えた地域密着型の糖尿病診療・連携体制(「おかやまDMネット」)の構築を推進しています。また、「おかやま糖尿病サポーター制度」では、2,000名以上のメディカルスタッフを認定し、認定後も独自のスキルアッププログラムにより知識とスキルの維持・向上を図っています。超高齢化社会に対応するため、訪問看護ステーションや介護老人保健施設においても糖尿病サポーターの養成を進めています。

昨年より、国の重要な医療政策となっている「糖尿病性腎症重要化予防プログラム」に関して、当事業が主導して「岡山県糖尿病性腎症重要化予防プログラム」(岡山方式)を策定してきました。その後、新たに岡山県のヘルスアップ支援事業を受託して、岡山県医師会の協力を得て、市町村国保の担当者や医師を対象とした研修会や相談会を開催しています。

岡山大学病院における糖尿病診療においては、多職種によるチーム医療の発展、インスリンポンプを初めとする先進的な糖尿病治療の導入に取り組むとともに、多くの診療科や診療部門と協力して、肥満手術、妊娠糖尿病対策、歯周病対策等を進めています。また、今年から臨床研究法が施行されますが、当セ

ンターでは早期糖尿病性腎症を対象とした多施設共同の特定臨床研究を開始いたしました。

最後になりましたが、同窓の先生方におかれましては、引き続きご指導、ご支援の程何卒よろしくお願い申し上げます。

(四方 記)

IVRセンター

IVRセンターでは垣根を越えた多数科の医師と多職種のメディカルスタッフとの横断的な協力のもと、日々高いレベルの画像ガイド下の低侵襲な治療を行っています。

大きな人事異動としまして2013年の開設からIVRセンターを支えてくださっていた祇園師長が異動となり4月より丸山師長に交替いたしました。3月には祇園師長の人柄と功績から多くの関係者による送別会が盛大に行われました。また、1月には毎年恒例のIVRセンター新年会が開催され、職種を超えて80人が参加しさらに団結力をたかめました。

最近の新たな取り組みとして、昨年12月より循環器部門にて岡山県初となる心房細動に対する内視鏡レーザーアブレーションを開始しております。国内でもまだ施設限定の治療法であり、これまでの取り組みが認められ学会より早期認定を受け開始いたしました。岡山大学で開発したCTガイド下IVR用ロボットを使用した初めての特定臨床研究臨床「ロボット (Zerobot®) を用いたCT透視ガイド下生検：単施設単群非盲検前向き実行性確認試験」は予定症例数10例を無事終了いたしました。また、我が国で初となるオープン型高磁場MRIガイド下の生検も順調に症例を重ねております。

他に大きな出来事としまして、杉生副センター長が中心となって本を執筆いたしました。「メディカルスタッフのための血管内治療シリーズ メディカテ②血管内治療の頻用薬&中止薬 ケアブック」というタイトルでメディカ出版より販売予定です。各部門による分担執筆したオールIVRセンターによる非常に良本が完成しました、是非ご一読いただけましたらと思います。

IVRセンターでは、毎月1回センター運営会議を開催し、安全面など診療科間で情報を共有することに努めております。その数も60回を超えました。今後もさらに高度な医療を安全に行っていきたいと思っております。(生口 記)

ジェンダーセンター

まず人事面ですが、ジェンダーセンターの活動を支えてくれていた産婦人科外来看護師の三宅麻紀が皮膚科に移動となりました。形成外科医員の櫻井透も当院での研修を終え2019年4月には関東方面に移動の予定です。

前回お伝えしたように、2018年4月の診療報酬改定後で性別適合手術が保険適用となったものの、ホルモン療法の保険適用が認められていないことから、性器に関わる性別適合手術は混合診療とみなされる問題が続いています。乳房切除術以外は、まだ実質的に保険診療化がなされていないといえます。この矛盾を解決すべく、関係者がホルモン製剤の告知申請による保

険適用などを検討していますが、薬事法の壁は厚く、早期の解決とはいかないようです。引き続き当センターもホルモン療法の保険診療化に向けて力を尽くす所存です。

2019年3月23日、24日に岡山県医師会館において当センターの担当でGID学会第21回研究大会を開催いたします。中央診療部門という病院の医療部門が担当いたしますが、GID学会は学際的な学会です。医学、看護学、臨床心理学など医療分野だけでなく、教育学、社会学、法学など幅広い分野の専門家が集まり議論する場となります。近年、性的マイノリティーに対する支援は、我が国のみならず国際社会の大きな注目を集めています。また、性別適合手術の完全な保険診療化をにらみ、各地に性同一性障害／性別違和の診療を担う施設が増えていく必要もあります。岡山大学病院ジェンダーセンターは、我が国有数の実績があり、医療界におけるリーダーシップを取り続ける立場にあります。今後とも同門の先生方のご理解とご支援を賜れば幸いです。(松本 記)

炎症性腸疾患センター

2016年9月に設立されました「炎症性腸疾患(IBD)センター」ですが、お蔭をもちまして、2018年10月より中央診療部のセンターに移行となりました。診療体制に関しましては、センター長の岡田裕之(消化器内科兼任)、副センター長の近藤喜太(低侵襲治療センター兼任)と平岡を中心に、小児科、小児外科の先生方とも協力し、日々の診療にあたっております。外来については毎日IBD専門外来を行っており、緊急の紹介にも対応できるよう努めております。

現在、当科には潰瘍性大腸炎・クローン病あわせて約600名以上の方が通院しておられます。看護師・薬剤師・栄養管理士とも協力し、患者さんの病状・ニーズに応じた適切な治療選択ができるよう努めています。

月曜日の夕方には消化器内科、消化管外科中心に院内定期カンファレンスを行っています。当院の難渋例が中心ですが、院外の相談症例の受け入れも行っています。診断や治療に難渋する患者様がおられましたら、お気軽に御相談いただければと思います。

今後もIBDの専門機関の中心として恥じないように皆で切磋琢磨してまいります。通院患者数が増加の一途であり、軽症例や長期に渡り病態が落ち着いている症例を中心に、逆紹介も積極的に行っていけるよう、病病・病診連携を更に強めていきたいと思っておりますので、引き続きのご協力、ご高配のほどよろしくお願いいたします。(平岡 記)

核医学診療室

核医学診療室では、4名の診療放射線技師が常駐し、SPECT/CT装置2台、SPECT装置2台にて、核医学検査ならびに内照射治療を行っています。平成30年7月から平成31年1月までに、約1629件の核医学検査を行いました。最も多い検査は脳血流シンチグラフィで313件です。次いで肺換気・血流、リンパシンチ、骨、腫瘍・炎症、腎シンチの順となっています。

また全ての核医学検査にて放射線科及び小児放射線科の診断専門医がレポートを作成しています。

内照射治療としては、平成28年10月より、去勢抵抗性前立腺癌骨転移に対するRadium-223を用いた α 線治療が開始されています。この薬剤は骨転移を有する去勢抵抗性前立腺癌の患者様が適応となる放射線医薬品・抗悪性腫瘍剤であり、骨転移に対して抗腫瘍効果を示す薬剤として、泌尿器科・放射線科を中心に期待を集めています。

核医学診療室ではその他の放射線同位元素を用いた放射線治療も行っております。子宮頸癌などに対するIr-192を用いた高線量率密封線源治療、前立腺癌に対するI-125を用いた低線量率密封小線源治療、甲状腺癌転移巣に対するI-131を用いた放射性ヨード内用療法、有痛性骨転移に対するSr-89内用療法、悪性リンパ腫に対するY-90標識抗体療法などを継続して行っています。

更に病院施設の放射線安全管理も核医学診療室の重要な役割のひとつであり、放射線取扱主任者を中心として、関連法令の教育訓練や個人放射線被ばく管理などを行っています。

今後とも臨床各科の皆様方のご指導およびご協力のほどよろしくお願い致します。
(新家 記)

結石治療室

結石治療室では、おもに尿路結石症に対する体外衝撃波結石砕石術を行っています。この治療は尿路結石に対する最も侵襲の低い治療であり、入院せずに無麻酔で施行が可能です。

尿路結石の治療は、近年めざましい進歩を遂げています。特に内視鏡の進歩は著しく、細径化によって多くの症例が経尿道的内視鏡下手術や経皮的腎結石砕石術で対応可能となりました。そのため体外衝撃波結石砕石術は件数として減少傾向にあります。しかしながら、大学病院の性質上、他院での治療困難症例を受け入れることが多く、このような難治症例では複数の治療法を組み合わせる治療を行うことが必要となります。体外衝撃波結石砕石術は、以前の簡便な治療という位置づけから、今後は内視鏡手術の補助的役割という位置づけへ変化しつつ、引き続き尿路結石治療の重要な一翼を担い続けるものと考えます。

今後とも積極的に体外衝撃波結石砕石術を含め、総合的な結石治療を推進してまいりますので、皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。
(和田 記)

てんかんセンター

伊達勲センター長（脳神経外科）のもと、秋山倫之副センター長（小児神経科）、脳神経外科、小児神経科、精神科神経科、脳神経内科の脳神経系診療科、関連診療科・部・病棟の連携体制で、センター運営を継続しております。

てんかんセンターでは診療科の枠を超えた包括的な診療を続けております。脳神経系診療科と多職種からなるてんかん外科カンファレンスを定期開催（月2回）し、乳児から成人に至るまで積極的に治療を行っています。教育・啓発活動としては、

8月末にデジタル脳波セミナー、2月には支援学校教員を対象とした研修会（テーマ：学校生活におけるてんかん患者への対応法）を開催し、いずれも盛況を博しました。

岡山大学病院てんかんセンターは、厚生労働省のてんかん地域診療連携体制整備事業として今年度も認定され、TVカンファレンスシステムを用いた県内医療施設間での症例検討会を定期開催（月1回）しております。色々な診療科の医師や検査技師が参加し、徐々に充実してきております。これに加え、地域連携医療機関のメーリングリストによる情報交換も始めたところであり、県内での医療連携をより密にしていこうと努力しております。

今後とも同窓の先生方のご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。
(秋山 記)



海外への留学者一覧

平成31年4月1日現在

分野名	氏名	卒年次	留 学 先	期 間
分 医 子 化 学	植 木 靖 好	平 6	Indiana University, Indianapolis, USA. E-mail: Uekiy@iu.edu	2000. 10~未定
	関 次 男	平 6	Department of Medical Education California University of Science and Medicine (CalMed) School of Medicine, U.S.A. E-mail: SekiT@calmedu.org	1998. 7~未定
	浅 野 恵 一	平30院	Icahn School of Medicine at Mount Sinai, New York, U.S.A.	2018. 4~未定
病 理 学 (腫瘍病理)	高 田 尚 良	平 16	British Columbia Cancer Centre, Vancouver, Canada	2016. 4~未定
消 化 器・臓学 肝 内 科	中 川 裕	平 1	University of Pennsylvania, Philadelphia, U.S.A.	
	恩 地 正 浩	平 19	Institut für Molekulare Biotechnologie GmbH, Vienna, Austria	2015. 10~未定
	赤 穂 宗 一 郎	平 19	University of California, Los Angeles, U.S.A.	2018. 4~
血 液・器 腫 瘍 呼 吸 内 科	萩 野 敦 子	平 12	Dana Farber Cancer Institute Lowe Center for Thoracic Oncology, Boston, U.S.A. E-mail:ogino8186@gmail.com	2009. 7~未定
	小 山 幹 子	平 12	Queensland Institute of Medical Research, Herston, Australia. E-mail: mokomoko125125@yahoo.co.jp	2009. 2~未定
	藤 井 昌 学	平 14	Beth Israel Deaconess Medical Center Boston, U.S.A.	2015. 4~未定
	藤 原 英 晃	平 18	University of Michigan, Internal Medicine, Hematology and Oncology, U.S.A.	2015. 8~未定
	浅 野 豪	平 18	Dana-Farber Cancer Institute, Boston, U.S.A	2017. 4~
	藤 井 詩 子	平 18	McGill University, Montreal, Canada	2018. 4~
腎・免疫・代 内 分 泌 内 科	杉 本 光	平 1	Beth Israel Deaconess Medical Center, Boston, U.S.A. E-mail: hikarusugimoto@yahoo.co.jp	1998. 9~未定
	勝 山 隆 行	平 19	Beth Israel Deaconess Medical Center, Harvard Medical School, Boston, U.S.A	2016. 9~
	勝 山 恵 理 寺 坂 友 博	平26院	University of California, San Diego Department of Reproductive Medicine, U.S.A.	2015. 11~約3年間
小 医 科 兒 学	野 坂 宜 之	平28院	Sinai Medical Center, Los Angeles, U.S.A	2016. 12~2020. 3
消 化 器 外 科	高 木 弘 誠	平 19	Erasmus Medical Center, Rotterdam, Netherlands	2017. 10~未定
	金 谷 信 彦	平 22	Brigham and Women's Hospital, Boston, U.S.A.	2019. 2~未定
	熊 野 健 二 郎	平29院	Baylor Research Institute, Dallas, Texas, U.S.A	2017. 11~未定
呼 吸 器・乳 腺 内 分 泌 外 科	佐 藤 博 紀	平 21	Memorial Sloan Kettering Cancer Center, U.S.A	2018. 4~
	富 山 浩 司	平 12	Univeraity of Rochester, NY, U.S.A	
	植 村 忠 廣	平 16	Allegheny General Hospital Pennsylvania, U.S.A	
	目 崎 久 美	平 22	University of Tronto, Tronto General Hospital, Canada	2018. 4~
整 外 科 形 学	田 中 真	平 22	Hospital Universitario Puerta De Hierro, Majadahonda, Spain	2018. 10~
	藤 原 智 洋	平 16	Memorial Sloan Kettering Cancer Center, U.S.A	2017. 8~約2年間
	尾 崎 修 平	平 18	National Institutes of Health, Bethesda, U.S.A	2017. 8~約2年間
泌 尿 器 病 学	中 道 亮	平 19	The Scripps Research Institute, San Diego, U.S.A	2018. 2~約2年間
	倉 繁 拓 志 有 吉 勇 一	平13院 平28院	Cleveland Clinic Lerner Research Institute, Ohio, U.S.A Columbia University, New York, U.S.A	2017. 7~2019. 7 2017. 7~約2年間
耳 鼻 咽 喉・頭 頸 部 外 科	大 道 亮 太 郎	平29院	The University of Iowa, Iowa, U.S.A	2018. 2~2020. 2
産 科・学 放 射 線 医 学	長 谷 川 徹	平 21	Ottawa Hospital Research Institute, Ottawa, Canada	2019. 1~
麻 酔 学 蘇 生 学	新 家 崇 義	平 13	Heidelberg University, Heidelberg, Germany	2019. 4~2019. 9
	中 平 毅 一	平 9	Brigham and Women's Hospital Harvard Medical School, Boston, U.S.A.	2003. 11~未定
	岡 崎 信 樹	平 19	The Florey Institute of Neuroscience and Mental Health, Melbourne, Australia	2018. 9~未定
	岡 原 修 司	平 19	Monash University, The Alfred Center, Melbourne, Australia	
	木 村 聡	大学院生	Harvard University, Cambridge, U.S.A	2018. 7~未定
脳 神 経 外 科	佐 野 美 奈 子	大学院生	The Hospital for Sick Children, Sick Kids, Toronto, CANADA	
	鳥 津 洋 介	平 18	Northwestern University, Chicago, U.S.A.	2017. 4~2019. 4
	大 熊 佑	平 19	The Feinstein Institute for Medical Research, NY, U.S.A.	2018. 9~
	大 谷 理 浩	平 21	The Univeraity of Texas, Houston, U.S.A.	2017. 6~
	金 恭 平	平 22	The University of Alabama, Alabama, U.S.A.	2019. 2~
循 環 器 内 科	石 田 穰 治	平26院	The Hospital of Sick Children, Toronto, Canada	2018. 4~
	春 間 純	平29院	Rothschild Foundation Hospital, Paris, France	2018. 10~
	斉 藤 幸 弘	平 19	University of Wisconsin-Madison, Wisconsin, U.S.A	2017. 6~未定
心 臓 血 管 外 科	川 田 哲 史	平30院	Toronto Congenital Cardiac Centre for Adults, Tronro, Canada	2018. 7
	甲 元 拓 志	平 1	University of Wisconsin Medical School, Wisconsin, U.S.A.	
	本 淨 修 己	平17院	The Hospital for Sick Children, University of Toronto, Toronto, Canada	2004. 12~未定
	大 崎 悟	平18院	University of Wisconsin Hospital and Clinics, Madison, U.S.A.	2006. 8~未定
	小 林 純 子	平26院	The Hospital of Sick Children, Toronto, Canada	2017. 9~未定
	石 神 修 大	平28院	The University of California, San Fransisco, U.S.A.	2017. 4~未定
脳 神 経 内 科	奥 山 倫 弘	平29院	Univeraity of Kentuckey, Lexington, U.S.A.	2018. 2~未定
	佐 野 俊 和	大学院生	The University of California, San Fransisco, U.S.A.	2018. 5~未定
	森 原 隆 太	平 23	University of Tronto, Tronto, Canada	2018. 7~2020. 6
救 急 医 学	西 村 健	平 21	University of Pittsburgh, Pennsylvania, U.S.A	2018. 7~2020. 6



岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会総会のご案内

このことについて、下記日程により開催しますので、会員多数のご参加を賜りますよう、ご案内申し上げます。

記

期 日：2019年6月1日（土）

場 所：岡山プラザホテル 岡山市中区浜2-3-12 電話086-272-1201

日 程

- 11：45～12：15 一般社団法人鶴翔会 理事会
- 13：00～13：10 岡山医学会 総会
- 13：10～13：40 鶴翔会評議員会・総会
- 13：40～13：50 岡山大学関連病院長会 総会
- 13：50～14：00 一般社団法人鶴翔会 社員総会並びに会員総会
- 14：00～14：15 岡山大学医学部創立150周年記念事業について
- 14：15～16：15 岡山医学会主催 新任教授講演会
- [演題] 細胞生理学教室のご紹介：新しい神経科学を目指して
細胞生理学 神谷 厚範
- [演題] がんの転移の基礎研究
細胞生物学 阪口 政清
- [演題] 皮膚科学診療の進歩と岡大皮膚科の挑戦
皮膚科学 森実 真
- [演題] ゲノム医療実用化と臨床実地での対応
臨床遺伝子医療学 平沢 晃
- 16：15～17：10 岡山大学関連病院長会主催特別講演会
[演題] 変革期における医療のあり方
岡山県保健福祉部長 中谷祐貴子
- 17：10～17：50 岡山医学会賞及び各種助成金受賞者等による研究ポスター紹介（ロビーにて）
- 17：50～18：15 岡山医学会賞授賞式並びにActa Medica Okayama Best Reviewer Awards
- 18：15～20：00 合同懇親会
懇親会にご出席の方は、5月10日（金）までに鶴翔会事務局へ会費を添えてお申し込み願います。会費は5,000円です。
なお、学外の方は郵便振替口座（01290-7-12749：岡山大学関連病院長会）をご利用下さい。

※岡山医学会賞の受賞講演は、2019年6月3日（月）及び4日（火）両日、岡山大学医学部臨床第二講義室で開催します。多数の聴講を期待しております。

ご寄附いただきました

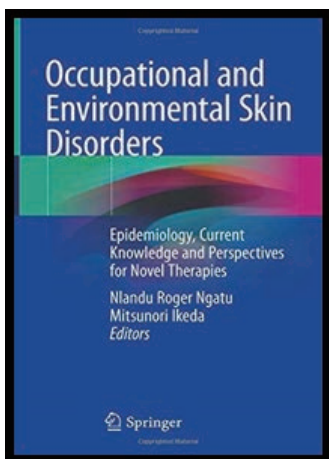
このたび、四三会（昭和43年卒業同期会、代表 黒田重利先生）より、鶴翔会に対しご寄付をいただきました。四三会の先生方のご厚意に対し厚く御礼申し上げますとともに、会員各位にご報告申し上げます。

平成30年12月

次の方々より、御著書等をご寄贈いただきました。ご厚意に対し深く御礼申し上げます。

池田光徳先生（昭58）

「Occupational and Environmental Skin Disorders」(Springer)



井上紀美先生（昭43）

「ことば降る森」(西村書店)



大田浩右先生（昭39）

「腎移植の夜明け」(一般財団法人 渋谷長寿健康財団)

「進行がん ステージ4でも怖くない」(時空出版)



お詫びとお知らせ

昨年12月の鶴翔会会員名簿発行に際しましては、クラス委員の先生方を始め多くの先生にご協力いただき、ありがとうございました。

名簿の掲載内容に誤りがありましたので、お詫びいたしますと共に、次のとおり正しい内容を掲載して訂正します。会員の皆様にご迷惑をお掛けしましたこととお詫び申し上げます。

鶴翔会事務局

旧教育職員

氏名	専門 関係教室	勤務先	勤務先住所・TEL・FAX	自宅住所・TEL・FAX
梶谷 文彦	生理 二生	AMEDスーパーバイザー／ 川崎医科大学・名誉教授		〒796-0088 愛媛県八幡浜市矢野町6-34-1 TEL 089-427-9088

昭和39年卒業

氏名	専門 関係教室	勤務先	勤務先住所・TEL・FAX	自宅住所・TEL・FAX
富田章一郎	整 整	もりの木おおにしクリニック	〒768-0073 香川県観音寺市茂西町1-6-3 TEL 0875-25-3291 FAX 0875-25-2012	〒768-0073 香川県観音寺市茂西町1-1-35 TEL 0875-25-9641 FAX 0875-57-5176

昭和43年卒業

氏名	専門 関係教室	勤務先	勤務先住所・TEL・FAX	自宅住所・TEL・FAX
村上 洋	内 二内			〒709-4635 岡山県津山市油木北175 TEL 0868-57-3011 FAX 0868-57-3011

昭和45年卒業

氏名	専門 関係教室	勤務先	勤務先住所・TEL・FAX	自宅住所・TEL・FAX
内田 久子 旧姓 原田	眼 眼			〒701-4221 岡山県瀬戸内市邑久町尾張139-1 TEL 0869-22-3333 FAX 0869-22-3330

昭和59年卒業

氏名	専門 関係教室	勤務先	勤務先住所・TEL・FAX	自宅住所・TEL・FAX
山口 勝行	整	山口整形外科 (開業)	〒597-0001 大阪府貝塚市近木町7-5-1F TEL 072-430-5558 FAX 072-430-5565	〒592-8345 大阪府堺市西区浜寺昭和町5丁611-1 TEL 072-266-7607

平成4年卒業

氏名	専門 関係教室	勤務先	勤務先住所・TEL・FAX	自宅住所・TEL・FAX
大西 泰裕	内 一内	もりの木おおにしクリニック	〒768-0073 香川県観音寺市茂西町1-6-3 TEL 0875-25-3291 FAX 0875-25-2012	〒768-0073 香川県観音寺市茂西町1-1-38 TEL 0875-23-1830

平成17年卒業

氏名	専門 関係教室	勤務先	勤務先住所・TEL・FAX	自宅住所・TEL・FAX
露口 雅夫	衛		自宅療養中	〒676-0016 兵庫県高砂市荒井町扇町7-3 TEL 079-443-6137 TEL 090-5154-8943

平成30年度 Student Doctor 認定式

平成31年1月7日（月）、岡山大学医学部医学科 Student Doctor 認定式がJ-Hallにおいて執り行われました。



平成30年度 岡山大学医学部医学科 学位記授与式

平成31年3月25日（月）、岡山大学学位記授与式が岡山県総合グランド体育館で執り行われました。

同日午後、鹿田キャンパスJ-Hallにて関係教授及び多くの保護者の見守る中、医学部医学科の学位記授与式が挙行され、医学部長から卒業生一人一人に学位記が授与され、122名の医学生が学舎から新しい第一歩を踏み出しました。

卒業生の皆様におかれましては、これからのご活躍を心よりお祈り申し上げます。



第113回 医師国家試験 合格者状況

全国（国公立）の合格状況

	合格率 (%)	合格者数	受験者数
全国計	89.0	9,029	10,146
(参考：第112回)	90.1	9,024	10,010

中国・四国地区国立大学における合格状況

大学名	合格率 (%)	順位			備考
		中四国 (9校中)	国立 (43校中)	全国 (80校中)	
鳥取大学	90.1	5 (4)	26 (19)	49 (41)	
島根大学	87.3	8 (7)	35 (34)	64 (58)	
岡山大学	90.7	4 (1)	23 (6)	44 (19)	
広島大学	86.5	9 (3)	36 (15)	65 (37)	
山口大学	89.3	6 (5)	29 (23)	51 (45)	
徳島大学	91.7	2 (8)	14 (38)	30 (63)	
香川大学	89.3	6 (8)	29 (38)	51 (63)	
愛媛大学	95.5	1 (2)	3 (13)	9 (32)	
高知大学	91.0	3 (6)	21 (25)	40 (48)	

※ () 内は、昨年度の順位を表す。

岡山大学の年度別合格状況

試験年月	新卒者	既卒者	受験者	新卒者 合格率	既卒者 合格率	計	順位		備考
							国立	全国	
15. 3	92	2	94	89/92 96.7	0/2 00.0	89/94 94.7	9/43	17/80	
16. 3	98	5	103	89/98 90.8	5/5 100.0	94/103 91.3	20/43	29/80	
17. 2	102	10	112	98/102 96.1	7/10 70.0	105/112 93.8	12/43	20/80	
18. 2	98	7	105	93/98 94.9	4/7 57.1	97/105 92.4	15/43	30/80	
19. 2	98	8	106	93/98 94.9	4/8 50.0	97/106 91.5	21/43	30/80	
20. 2	92	8	100	87/92 94.6	5/8 62.5	92/100 92.0	22/43	36/80	
21. 2	104	7	110	98/103 95.1	2/7 28.6	100/110 90.9	28/43	51/80	(新卒者1名は未受験)
22. 2	94	12	103	87/93 93.5	6/10 60.0	93/103 90.3	24/43	44/80	(新卒者1名は未受験)
23. 2	107	10	116	94/106 88.7	5/10 50.0	99/116 85.3	39/43	68/80	(新卒者1名は未受験)
24. 2	98	20	116	95/98 96.9	12/18 66.7	107/116 92.2	15/43	33/80	
25. 2	95	10	103	90/95 94.7	6/8 75.0	96/103 93.2	8/43	23/80	
26. 2	105	8	113	97/105 92.4	5/8 62.5	102/113 90.3	25/43	46/80	
27. 2	105	12	117	101/105 96.2	6/12 50.0	107/117 91.5	26/43	46/80	
28. 2	115	10	125	109/115 94.8	6/10 60.0	115/125 92.0	18/43	38/80	
29. 2	120	8	128	113/120 94.2	6/8 75.0	119/128 93.0	14/43	21/80	
30. 2	112	12	124	110/112 98.2	5/10 50.0	115/122 94.3	6/43	19/80	
31. 2	122	7	129	115/122 94.3	2/7 28.6	117/129 90.7	23/43	44/80	

平成30年度卒年次別会費納入状況

平成31年2月末現在

卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率
昭16以前	25	0	0	-	39	56	47	30	64%	8	101	97	37	38%
17	2	0	0	-	40	60	50	36	72%	9	97	94	36	38%
17専	2	0	0	-	41	74	67	48	72%	10	105	97	38	39%
18	4	1	1	100%	42	73	71	47	66%	11	96	90	34	38%
18専	5	1	0	0%	43	78	71	46	65%	12	99	92	27	29%
19	2	0	0	-	44	78	70	46	66%	13	100	97	25	26%
19専	8	3	1	33%	45	77	73	51	70%	14	94	77	27	35%
20	7	2	0	0%	46	85	75	54	72%	15	92	81	26	32%
20専	9	2	2	100%	47	81	75	55	73%	16	98	78	21	27%
21	7	2	2	100%	48	97	93	59	63%	17	100	81	27	33%
22	6	4	2	50%	49	104	92	63	68%	18	98	78	24	31%
23	16	11	4	36%	50	77	72	49	68%	19	98	76	19	25%
23専	14	8	4	50%	51	108	99	64	65%	20	91	75	24	32%
24	22	14	7	50%	52	101	94	52	55%	21	104	86	26	30%
24専	34	20	12	60%	53	73	67	40	60%	22	94	87	36	41%
25	12	6	3	50%	54	120	117	60	51%	23	107	96	35	36%
25専	42	29	16	55%	55	114	111	72	65%	24	98	83	27	33%
26	18	12	9	75%	56	107	102	56	55%	25	95	92	29	32%
26専	18	9	5	56%	57	126	120	75	63%	26	105	96	29	30%
27	23	16	8	50%	58	114	107	62	58%	27	105	100	23	23%
27専	8	5	3	60%	59	123	119	68	57%	28	114	112	13	12%
28	29	20	10	50%	60	112	107	46	43%	29	120	120	15	13%
29	31	21	14	67%	61	112	106	62	58%	30	112	111	105	95%
30	33	21	16	76%	62	118	112	64	57%	学部卒計	6,294	5,583	2,763	49%
31	39	29	15	52%	63	129	122	63	52%	備考. 上記一覧表は本学部卒業者の状況であるが、他大学卒業後本学大学院の修了者及びその他会員の状況は次のとおり。				
32	42	29	22	76%	平1	108	100	59	59%					
33	45	35	26	74%	2	120	111	61	55%					
34	54	38	25	66%	3	111	97	55	57%					
35	63	50	29	58%	4	117	106	53	50%	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率
36	52	42	28	67%	5	110	106	42	40%	大学院計	1,302	891	281	32%
37	49	40	32	80%	6	120	115	52	45%	その他	1,791	1,635	918	56%
38	58	48	38	79%	7	109	95	36	38%	合計	9,387	8,109	3,962	49%

注：
 ① 会費の前納制度として、一時に25年分・75,000円（終身会費）の納入方法の制度もありますので、ご利用ください。（会則第10条附則）
 ② 会則第10条の規程により、満77歳に達したときは、会員の申し出により会費を免除することができますので、お申し出ください。

おひとり “3,000円” の年会費が鶴翔会の活動を支えています！

鶴翔会会員の先生方には、益々ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げますと共に、平素から岡山大学医学部及び鶴翔会に対して、ご支援ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

鶴翔会では、総会、会報の発行、会員名簿などの同窓会としての一般的な活動だけではなく、医学科学生に関係する大学行事への協賛、3年生授業の医学インターンシップの支援、卒業生への記念助成など医学科の教育研究の支援活動をおこなっております。こうした活動は会員の皆様からの会費に支えられております。会費納入に皆様のご理解ご協力をお願いします。

鶴翔会では多様な会費納入に対応しています。先生方のライフスタイルに合わせてお選びください。毎年お手数を煩わせております手間を省いていただけるものと存じます。

- **会報に同封の払込用紙** ※終身会費または平成30年度会費を既にお支払いいただいている先生には同封しておりません
会報に同封の「払込取扱票」をお使いください（手数料は鶴翔会負担になります）。
下に示す金融機関の口座に直接お振り込みいただいても、また、鶴翔会へお持ちいただいても結構です。
- **インターネット・モバイルバンキング**
先生方がご利用の金融機関のネットバンキング申込をされていまして、デスクのパソコンから、何時でもお振り込みできます。振込口座は下の金融機関の口座となっております。
- **自動引き落としサービスもご用意しています**
毎年払い込むのが面倒…というお忙しい先生方に便利です。手続きをご希望の方は鶴翔会事務局まで、電話・FAX・e-mailなどで、お気軽にお問い合わせください。手続用紙をお送りします。
- **お得な会費制度もいっぱい！**
一時に25年間分の会費（75,000円）を終身会費としてお納めいただきますと以後の会費は納めていただくことはありません。振込用紙の金額欄を75,000に訂正してお振り込みください。
満77歳になられたときは、お申し出により会費が免除になりますので、お申し出ください。

【振込金融機関名、口座番号等】

中国銀行 清輝橋支店 （チュウゴクギンコウ セイキバシシテン）
普通預金 1591434 鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

ゆうちょ銀行

※ ゆうちょ銀行からの振込の場合

ゆうちょ銀行（ユウチョギンコウ） 記号、番号 15410、38020041
鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

※ ゆうちょ銀行以外からの振込の場合

ゆうちょ銀行（ユウチョギンコウ） 店名 五四八（ゴヨンハチ）
店番 548 番号 3802004
鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

【お願い】

- お振り込みに際しては、同封の払込取扱票により振込金額をご確認いただくと共に、会員番号（払込取扱票の氏名右側の番号）及び氏名を必ず入力してください。
- 鶴翔会会費についてのお問い合わせは、鶴翔会事務局へお願いします。
電話：086-235-7060 FAX：086-235-7052 e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

(公財) 岡山医学振興会より —プラ塵—

代表理事
難波正義

同窓の諸先生にはご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。平素は、当財団に対しまして多大なご支援を賜り心から感謝申し上げます。

今回は、現在、世界で起こっている問題について、考えてみます。それらは、1) 人間教育、2) 格差、3) 環境、4) 人口、5) 食糧などの問題です。

教育問題では、現在の政治家、官僚、経済人のでたらめぶりが目に余ります。公文書の黒塗り、改ざん、破棄、記憶にございませぬ、隠ぺい、談合、偽装、いろいろあります。また、巷間では、いじめ、虐待、殺人など頻々です。これらの現象は、人間教育の欠如によるのではないかと思います。経済的効果に重点を置かれた現在の教育には問題がありそうです。

現在、増大しつつある格差は、経済を始め、テロ、移民、医療問題などの多くの問題を起こしています。政治家や経済界の人達が英知をあつめ真剣に取り組むべき課題だと思えます。それぞれの地域が、平和でほどほどに豊かであれば、なにもわざわざ故郷を捨て、他国に移ろうとする人々はいないでしょう。

環境問題については、地球温暖化、異常気象、砂漠化、大気汚染、水質汚染、環境ホルモンなど深刻です。人類が英知を絞って考え、取り組まなければ解決できない難問ばかりです。これらの問題は、私共の毎日の生活に影響します。

当財団は、毎年「医療フォーラム」という市民講座を開催いたしています。今年は、2019年3月23日に「環境と健康」というテーマで、岡山国際交流センターで行いました。

この講座で、私が「環境とプラスチック」という話を致しましたので、その内容を、少し詳しく述べてみたいと思います。

プラスチックは19世紀後半に発明され、生産が本格化したのは1950年ごろからです。現在までの累計生産量は約83億トンで、リサイクルしないでプラ塵として地球上に約63億トン存在すると推定されています。そして、年間約800万トンが海に流入しています。一方、プラスチックが分子レベルまで分解される時間は、450年という説もあれば、永久に分解されないという説もあります。

2018年11月にインドネシアで死んでいたマッコウクジラの胃の中には6.5kgのプラスチック（固いプラスチック片19個、プラスチックカップ115個、ビニール袋25枚、ビニール紐3.25kg、ペットボトル4本、サンダル2足）がありました。これでは、胃の調子が悪くなります。

このプラ塵は、自然のなかで破壊されマイクロプラスチック（5mm以下）や、ナノプラスチック（1mmの100万分の1がナノ）となり、生体系への影響が予想されます。ナノレベルになれば、細胞の中にも入ると考えられます。しかし、現在までのところ、プラスチックの細胞に及ぼす確かな情報はありません。

マイクロプラスチックがいろいろなところに存在することが報告されています。水道水、ビール、食塩、河川、湖底、魚類の消化管、ミジンコ、ヒトの糞便などからです。

環境中に蓄積してゆくプラスチックに対して、2018年6月、G7首脳会議で「海洋プラスチック憲章」が成立しました。でも、日本と米国は参加を見送っています。この2国が最も多くのプラスチックをつくっているにも関わらずですが。ただ、日本では、その時、海岸漂着物処理推進法が成立しました。また、いくつかのボランティア団体がプラ塵を収集する活動を展開していますし、ある飲食店では、ストローなどのプラスチック製品を使用することを控える努力をしています。もちろん、プラスチックの使用を控える私たち自身の努力も必要でしょう。

企業は、生分解するプラスチックの開発を進めていますが、生分解するといっても時間がかかります。生分解するという安心感から、プラスチックを簡単に捨てれば、また、環境に溜まります。また、日本政府は、プラスチックの研究に今年度100億円出すそうです。

とにかく、現在、プラスチック問題はホットになっています。私共は粘り強くこの問題に取り組み健康な地球を維持しなければならないと思います。1960年台にカールソンによって書かれた「沈黙の春」から、1997年に「メス化する自然」、「奪われし未来」が書かれたころ、環境ホルモンの問題は大変ホットでした。でも、現在はこの問題はどうなっているのでしょうか。片付いているとも思いません。忘れ去られています。

環境ホルモンは目では見えません。一方、プラ塵の蓄積は、ますます目立つでしょう。プラ塵の問題が一時的な話題でなく、今後粘り強く取り組まれることを期待します。

岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧

病院長 金澤 右
 副病院長〔診療(医科)担当〕 増山 寿
 同〔教育(医科)担当〕 豊岡 伸一
 同〔研究(医科)担当〕 前田 嘉信
 同〔医療安全管理担当〕 塚原 宏一
 同〔総務・企画運営担当〕 大塚 文男

平成31年4月1日現在

診療領域	診療科	科 長	副 科 長	医 局 長	外来医長	病棟医長	教育医長
内 科	総合内科・総合診療科	大塚 文男	花山 宜久	小比賀 美香子	安田 美帆	長谷川 功	谷山 真規子
	消化器内科	岡田 裕之	高木 章乃夫	川野 誠司	岩室 雅也	平岡 佐規子	原田 馨太
	血液・腫瘍内科	前田 嘉信	松岡 賢市	大橋 圭明	西森 久和	浅田 騰	遠西 大輔
	呼吸器・アレルギー内科	木浦 勝行	松岡 賢市	大橋 圭明	西森 久和	市原 英基	遠西 大輔
	腎臓・糖尿病・内分泌内科	和田 淳		稲垣 兼一	中司 敦子	北川 正史	木野村 賢
	リウマチ・膠原病内科	和田 淳		稲垣 兼一	中司 敦子	北川 正史	木野村 賢
	循環器内科	伊藤 浩		吉田 賢司	三好 亨	杜 徳尚	
	脳神経内科	阿部 康二		山下 徹	武本 麻美	菱川 望	商 敬偉
感染症内科	草野 展周						
外 科	消化管外科	藤原 俊義	白川 靖博	吉田 龍一	寺石 文則	野間 和広	菊池 覚次
	肝胆膵外科	八木 孝仁	榎田 祐三	吉田 龍一	吉田 一博	枕 瀬 崇	安井 和也
	呼吸器外科	豊岡 伸一	大藤 剛宏	山根 正修	杉本 誠一郎	山本 寛斉	岡崎 幹生
	乳腺・内分泌外科	土井原 博義	平 成人	山根 正修	枝園 忠彦	枝園 忠彦	池田 宏国
	泌尿器科	渡邊 豊彦	荒木 元朗	小林 泰之	佐古 智子	枝村 康平	荒木 元朗
	心臓血管外科	笠原 真悟		小谷 恭弘	末澤 孝徳	黒子 洋介	大澤 晋
	小児外科	野田 卓男			納 所 洋	谷本 光隆	納 所 洋
	小児心臓血管外科	笠原 真悟					
緩和・支持医療科	田端 雅弘						
感覚・皮膚・運動機能科	整形外科	尾崎 敏文	西田 圭一郎	島村 安則	中田 英二	古松 毅之	宮澤 慎一
	形成外科	木股 敬裕	難波 祐三郎	松本 洋	渡部 聡子	渡邊 敏之	徳山 英二郎
	皮膚科	森 実 真	山崎 修	平井 陽至	川上 佳夫	三宅 智子	加持 達弥
	眼 科	白神 史雄	森 實 祐基	濱崎 一郎	塩出 雄亮	細川 海音	土居 真一郎
	耳鼻咽喉科	西崎 和則	假谷 伸	片岡 祐子	菅谷 明子	丸中 秀格	野田 洋平
脳・神経・精神科	精神科神経科	山田 了士	寺田 整司	井上 真一郎	松本 洋輔	藤原 雅樹	岡久 祐子
	脳神経外科	伊達 勲	黒住 和彦	菱川 朋人	亀田 雅博	藤井 謙太郎	佐々木 達也
	麻酔科蘇生科	森松 博史		賀来 隆治	松岡 義和	松崎 孝	清水 一好
小児・産・女性科	小児科	塚原 宏一	岡田 あゆみ	馬場 健児	近藤 麻衣子	八代 将登	吉本 順子
	小児循環器科	大月 審一					
	小児神経科	小林 勝弘	秋山 倫之	秋山 倫之	遠藤 文香	花岡 義行	岡 牧 郎
	小児血液・腫瘍科	塚原 宏一					
	小児麻酔科	岩崎 達雄					
	小児放射線科	片山 敬久					
	産科婦人科	増山 寿	中村 圭一郎	鎌田 泰彦	小川 千加子	中村 圭一郎	衛藤 英理子
放射線科	放射線科	金澤 右	平木 隆夫	生口 俊浩	富田 晃司	宇賀 麻由	正岡 佳久
救急科	救 急 科	中尾 篤典	内藤 宏道	内藤 宏道	塚原 紘平	藤崎 宣友	万代 康弘
病理診断科	病 理 診 断 科	柳井 広之		都地 友紘			谷口 恒平
臨床遺伝子診療科	平 沢 晃	河内 麻里子	河内 麻里子				

鶴翔会会報 投稿内規

項目	字数(程度)	内容
ご挨拶	800	(学内) 学長・学部長・病院長就任、定年退任、教授就任 (学外) 学長・教授就任、関係機関の長就任等
謹弔		名誉教授・名誉会長・会員などご逝去のとき
医学部(病院)の動き		医学部・附属病院の変革、新設部門などについて
会員の近況		受賞・表彰、近況報告等
学会・研究会だより		学会・研究会等報告、開催通知
支部だより	1,600	各支部の支部総会報告
同期会だより	1,600	同期会報告、開催通知
関連病院だより		岡山大学関連病院長会 新規入会病院紹介
学生だより	1,600	西医体報告、解剖実習体験記等
海外だより	2,000	海外留学、在住時の体験記や海外旅行記等
歴史の広場		岡山大学医学部にまつわる歴史について
随想	1,600	
会員のこえ		会員の意見・感想等
教室だより	800	医学部・大学院・病院診療施設の現況報告
岡山より		事務局より報告事項
編集後記		会報担当幹事又は事務局が担当
挿絵		

1. 字数はあくまで目安です。
 2. 4月号のメ切は2月中旬、10月号のメ切は8月中旬です。
 3. 上記以外の内容であっても受け付けております。ただし、特定の個人への誹謗中傷等、掲載に相応しくないと
思われるものについては、編集委員会において審議後、掲載をお断りする場合があります。
 4. 原稿、挿絵はデータ(一太郎、word、JPEG等)にて下記メールアドレスまでお送りいただければ幸甚ですが、
紙原稿やお写真を下記宛てご郵送いただいても結構です。
- ※メールにてお送りくださった場合、必ず当方より原稿受領及び御礼の返信をさせていただきます。当方からの返信がない場合は、メールが正しく届いていない可能性がありますので、お問い合わせ願います。

原稿送付先・連絡先

鶴翔会

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1

TEL: 086-235-7060 FAX: 086-235-7052

E-mail: dosokai@md.okayama-u.ac.jp

編 集 後 記

会報126号をお届けします。

今春、122名の卒業生を送り出しました。良き医療人、研究者を目指して努力し、成果をあげてくれることを期待しています。新たに112名の新入生を迎えました。大きく羽ばたいてくれることを期待しています。先生方のご指導、よろしくお祈りします。

公衆衛生学萩野景規教授と疫学・衛生学土居弘幸教授が定年退職されました。永年にわたりご尽力いただき、ありがとうございました。引き続き、ご支援のほどよろしくお祈りいたします。

創立150周年まで後1年となりました。先生方から絶大なご支援を賜り、誠にありがとうございます。記

念事業も旧生化学棟大講堂の改修計画や150年記念誌の発行等大詰めを迎えています。引き続き、ご支援のほど、よろしくお祈り申し上げます。

今号から試験的に全ページをカラー化しました。また会報を透明のビニール袋に入れてお届けします。一般の人の目に触れても良いように敢えて裏表紙が見えるようにしました。皆様に、「鶴翔会会報が来た」とすぐ認識し、ページをめくるのを楽しみにしていただければ、と思います。

春です。お忙しい中にも、たまには花を楽しみ春風に吹かれてみてはいかがでしょうか。

(伊達 勲)

発 行 鶴翔会 (岡山医学同窓会)
会報幹事 伊達 勲
鶴翔会会報編集委員 阿部康二、
大塚愛二、加藤宣之、金澤 右、
木浦勝行、伊達 勲、土居弘幸、
豊岡伸一、西崎和則、森実 真、
柳井広之

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1

電 話 (086) 235-7060・7061

F A X (086) 235-7052

E-mail : dosokai@md.okayama-u.ac.jp

<http://www.okayama-u.ac.jp/user/mdosokai/>

印 刷 友野印刷株式会社

電 話 (086) 255-1101

F A X (086) 253-2965

乱丁・落丁はお取りかえします。

鶴翔会会員向けサービスのご案内

○ 岡山大学勤務医師責任賠償保険サービス

鶴翔会では会員の方々を対象に、(株)損害保険ジャパンの団体勤務医師賠償責任保険を取り扱っています。パンフレットを鶴翔会ホームページに掲載していますが、ご連絡をいただければお送りいたします。

特徴・メリット

- 個人で保険に加入するより、断然保険料がお得（20%も割安）
- 会員の先生であれば勤務先に関係なく利用できます
- 期間中に、勤務先を異動しても保険は有効
- 契約は1年更新

※加入又はパンフレットを希望される場合は、必要書類をお送りしますので、鶴翔会事務局までご連絡ください。

鶴翔会事務局まで TEL：086-235-7060 FAX：086-235-7052
e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

○ クレジットカードサービス



2019年3月現在

鶴翔会では、三井住友トラスト・カード(株)と提携して、「VISAゴールドカード」と「VISA・Master Card 加盟店契約」をご案内しております。

➤三井住友トラストゴールドカード(会員の先生が開業されている場合、従業員の方もお申込みできます)

- VISAゴールドカード 年会費が2,500円+税(通常10,000円+税に比べ75%OFF)
割引は2年目以降も続きます。ご家族会員年会費は1,000円+税です。
- キャンペーン実施中!! (2019年9月30日まで)
→VJAギフトカード1,000円分プレゼント(本会員・家族会員)



➤VISA・Master Card 加盟店契約

- ご利用見込額等に応じた優遇手数料となります。
- キャンペーン実施中!! (2019年9月30日まで)
→クレジット端末1台が本体・ピンパッド・工事費とも無料です。

〔端末の一例〕



<ご留意事項>

- カード申込・加盟店契約申込ともカード会社所定の審査がございます。
- 加盟店契約申込において、既にVJAグループのカード会社と加盟店契約のある会員様は対象外となります。

※詳しい資料、お申込書の請求は、三井住友トラスト・カード(株)まで
電話：0120-006-542(通話無料) メール：Osaka_Info@smtcard.jp
FAX：06-6348-8806



申込書請求

◎必ず、「鶴翔会会員であること」、「お名前」、「ご住所」、「電話番号」、「希望サービス(カード・加盟店)」をお伝えください。

担当：大阪営業推進部 土屋・今井 <電話受付の場合→受付9時～17時(土・日・祝日・12/30～1/3休)>

裏表紙の写真

岡山大学病院入院棟。平成20年に完成(第1期工事は平成15年竣工)し早くも10年が過ぎました。患者さんに希望を与え、社会復帰を叶えるため日々懸命な取り組みが行われています。



鶴翔会

岡山医学同窓会報